

國立臺灣大學日本語文學系

碩士論文

Department Japanese Language and Literature

College of Literature

National Taiwan University

Master Thesis

副詞の類義語に関する一考察—「どうせ」「しょせん」

を中心に—

有關副詞類義語之考察—以「どうせ」「しょせん」為

中心—

The Investigation of Synonymous Adverb Centering on

“DOUSE” and “SHOSEN”

劉耀升

Yao-Shien Liu

指導教授：趙順文 教授

中華民國 99 年 7 月

July, 2010

前書き

四年，可以做很多很多事情，也可以一事無成。在台大日研所，我用四年的青春完成這篇論文。喜愛日文的我，進入研究所之後，開始了解到何謂「適合與否」這回事。在適應研究這門學問的路上屢屢受挫，憑著一股信念撐到最後，加上老師與家人朋友的鼓勵幫助，才終於又克服了人生的一個階段。回頭望見四年前的自己，感觸良多。不論是思考邏輯、人際關係、時間安排、情緒管理，還是面對問題時每個當下的取捨抉擇，都可以說是身為研究生的訓練內容。而經過了這段幾近完全自食其力的考驗，我想我有所成長，也有所獲得。它的具體，或許只能呈現在論文成果以及一紙文憑上，但在其背後不具形體的部分，才是它最有價值的化身。這份價值何其珍貴，是我燃燒生命換來的寶藏。

能夠有機會撰寫這篇謝辭，除了我本身的努力之外，更重要的是仰賴了許多給予我幫助的人們。每一位對我而言，都是生命中無可取代的貴人以及恩人，都是支持我繼續撐下去的動力。首先要感謝我的家人—特別是媽媽和姐姐，在閉關期間為我打理衣食，聽我訴苦，送上噓寒問暖。感謝你們，因為沒有你們的關心愛護，就沒有今天的我。再來要感謝過去在東吳日文系曾給予我教導的多位老師，尤其是王世和老師和劉立薰老師，使我得以走出東吳，看得更廣更遠。感謝研究所的共患難鐵三角—弘琳、純瑩，雖然三個角是由我殿後陸續畢業，但來自你們的加油打氣讓我溫暖在心頭。後期更多虧弘琳和戰友怡君提供範本並抽空為我解答論文後續處理上的疑問，讓一切得以順利進行。其間，我最愛的夥伴—東吳吉他社的大家也從上到下四面八方地送來遙遠的祝福，信鏘學弟更是一口答應幫我操刀英文摘要，果然夠貼心。我最好的朋友伯昇也時常關心我的狀況，並在我快要悶壞時邀我出去聊聊天透透氣，使我能夠調適好心情再回到崗位上奮戰。這些都是孤軍奮戰時不可或缺的精神支柱。謝謝診所的打工同事以及主管們的體諒配合，讓我在唸書之餘花少許的時間賺取生活費平衡開支，並且能夠無後顧之憂安心撰寫論文。系辦公室的黃媽、宛庭、芸珈和朱小姐，四年來承蒙你們的照顧幫忙，特別是黃媽總是掛心我們，還會督促進度、精神喊話，多謝你的關懷。另外也感謝幾位在我心目中舉足輕重的人，你們對我的好我會銘記在心，在此就不細表。最後，萬分感謝我的指導教授趙順文老師，以及兩位口試委員林立萍老師和林青樺老師。謝謝老師熱心指導我的論文、提點不足之處並指引方向，學生深表感激。希望今後無論是在何種領域發展，都能秉持信念堅定目標，將所學及精神貫徹在人生的道路上。

2010年8月 劉耀升

副詞の類義語に関する一考察 — 「どうせ」「しょせん」を中心に—

劉耀升

要旨

本稿は、類義語となっている二つの副詞「どうせ」「しょせん」を中心に、構文的・意味的特徴を通して相違比較を行うものである。

考察の結果、共通点として、「どうせ」と「しょせん」二語はともに「既存の想定」という話し手の思考のプロセスが含意され、話題の事態に対して「マイナス性付与」という作用によって「軽視・余計・放棄」など三つの意味を伝達する。文の論理性にかかわる意味的特徴として、「原因・理由・根拠」と「結論」になり得る。

一方、相違点として、「どうせ」の場合では過去形との共起に支障があり、さらに比較を通して「しょせん」がテンスにおいて使用制限がないことがわかった。また、「どうせ+なら」構文の場合、心理的側面の現象「多肢比較」が背景の意味として潜在しており、それによって話し手が「好みによる決定・選択」を下すという、「どうせ+なら」構文に欠かせない新たな二つの要素を指摘した。

「しょせん」の場合、「どうせ」に見られない「前提的結論」と「前文脈指向性」という独特な働きが観察される。「しょせん」の現れる文の意味を理解する際、ほとんどの場合文脈を沿って前の文もしくは段落までたどることによって、「しょせん」を指すことの意味がはじめてわかってくる。それに対して、「どうせ」の場合はほとんど一文の中で意味を捉えることができる、といった差異を明らかにした。

キーワード：「どうせ」、「しょせん」、既存の想定、マイナス性付与、多肢比較、前提的結論、前文脈指向性

有關副詞類義語之考察—以「どうせ」「しょせん」為中心—

劉耀升

摘要

本篇論文是以形成類義語關係的副詞「DOUSE」「SHOSEN」為中心，透過句子構成以及意義層面的特徵進行共通點與相異點的比較。

考察結果發現，在共通點方面，「DOUSE」和「SHOSEN」兩者都蘊含了「既存的假定」此種說話者的思考過程。針對話題的事態，藉由「負面性賦予」此種作用來傳達「輕視、多餘、放棄」等三種意義。在與句子的理論性相關的意義層面的特徵方面，都可以作為「原因、理由、根據」以及「結論」來使用。

另外，在相異點方面，「DOUSE」與過去式難以共同出現，而透過比較發現「SHOSEN」在時態上沒有使用限制。此外，在「DOUSE+NARA」構句的情況時，筆者指出在此構句之下不可或缺的兩個新要素。也就是心理層面的現象之「多選項比較」會潛在於背景意義當中，說話者再藉此下達「依據喜好的決定、選擇」。

在「SHOSEN」的情況下，觀察到「DOUSE」所沒有的兩種機能，「前提性的結論」以及「前方文脈指向性」。當要理解有「SHOSEN」出現的句子的意義時，幾乎都要沿著文章脈絡往回解讀前句或者是前面的段落，才能明白「SHOSEN」所指的意義為何。相較之下，「DOUSE」的情況則是在該句子之中便能釐清意義為何。在本篇論文中明示了以上的差異。

關鍵字：「DOUSE」、「SHOSEN」、既存的假定、負面性賦予、多選項比較、前提性的結論、前方文脈指向性

The Investigation of Synonymous Adverb Centering on “DOUSE” and “SHOSEN”

Yao-Shien Liu

Abstract

The aim of the research centers on the analysis of the synonymous adverbs: “DOUSE” and “SHOSEN”. In order to clarify whether these two adverbs have similarities or differences, the researcher contrasts the two adverbs on discourse level and semantic level.

The findings are as follows. First, “DOUSE” and “SHOSEN” are semantically related. Speakers would choose both adverbs to insinuate the idea of “predetermined hypothesis”. Under different conditions of the topics that proceed, both adverbs conveyed “negativity” which can be further extended to the meaning of “overlooked”, “redundant” or “relinquished”. While both adverbs applied in discourse level, they express the idea of “reasoning”, “basis” or “conclusion”.

Second, “DOUSE” and “SHOSEN” demonstrated differences in the conditions they’re being applied under different verb tense. “DOUSE”, according to the study, rarely occurs under past tense while “SHOSEN” doesn’t have such constraint. Moreover, in the combination of “DOUSE + NARA”, the researcher discovered the inseparable meaning arisen from the use of combination; the meaning of “multiple choices” is entailed in the combination. The speakers utilize this combination to suggest the idea that “the decision is made due to one’s liking” through their speech.

On the contrary, “SHOSEN” entails different semantic connotations that “DOUSE” lacks: “conclusion under certain condition” and “retrospective directivity”, in which the speakers are required to trace back to the previous context. That is, the recipients need to trace back to previous sentence or the paragraph to achieve fully understanding. Otherwise, the recipients can understand the sentence with “DOUSE” without any problem due to the fact that the meaning is fully demonstrated in the very

sentence. Above are the findings that have been discovered in the thesis.

Key words: “DOUSE”, “SHOSEN”, predetermined hypothesis, negativity, conclusion under certain condition, retrospective directivity.



副詞の類義語に関する一考察 — 「どうせ」「しょせん」を中心に—

目 次

前書き.	i
要旨.	ii
目次.	vi
図目次.	ix
表目次.	x
第一章 序論.	1
1.1 研究動機及び目的.	1
1.2 先行研究から見る問題点.	2
1.3 研究方法及び本論の構成.	4
第二章 副詞「どうせ」の諸相.	7
2.1 先行研究.	7
2.1.1 位置づけ.	7
2.1.2 構文的及び意味的特徴.	9
2.1.2.1 工藤 (1982)	9
2.1.2.2 森田 (1992)	10
2.1.2.3 森本 (1994)	11
2.1.2.4 杉本 (2000)	12
2.1.2.5 小矢野 (2000)、武内 (2005)	12
2.2 問題提起.	15
2.3 辞書による記述.	17
2.4 「どうせ」の構文的特徴についての考察.	20

2.4.1	ヴォイス.	20
2.4.2	テンス・アスペクト.	25
2.4.3	ムード.	31
2.4.3.1	「～だろう」.	32
2.4.3.2	「～のだ」.	37
2.4.3.3	「～にちがいない」.	42
2.4.3.4	「～にきまっている」.	45
2.4.3.5	「～てしまう」.	49
2.4.4	共起成分.	51
2.4.4.1	基本的成分.	51
2.4.4.2	「～なら」.	53
2.4.4.3	「～だから」.	64
		
第三章	副詞「しょせん」の諸相.	73
3.1	先行研究.	73
3.1.1	位置づけ.	73
3.1.2	構文的及び意味的特徴.	73
3.1.2.1	森本 (1994)	73
3.1.2.2	小矢野 (2000)、武内 (2005)	74
3.2	問題提起.	76
3.3	辞書による記述.	78
3.4	「しょせん」の構文的特徴についての考察.	80
3.4.1	ヴォイス.	80
3.4.2	テンス・アスペクト.	82
3.4.3	ムード.	87
3.4.3.1	「～だろう」.	87
3.4.3.2	「～のだ」.	91
3.4.3.3	「～にきまっている」.	97
3.4.3.4	「～にすぎない」.	98
3.4.4	とりたて詞.	101

3.4.4.1 「～しか～ない」	101
3.4.4.2 「～だけだ」	105
3.4.5 共起成分	106
3.4.5.1 基本的成分	106
3.4.5.2 「～なら」	110
3.4.5.3 「～だから」	111
第四章 副詞「どうせ」「しょせん」の相違比較	117
4.1 構文的特徴	117
4.2 意味的特徴	122
第五章 結論および今後の課題	125
5.1 まとめ	125
5.2 今後の課題	128
参考文献	129
用例出典	130

目次

《図 1》 山田氏の副詞分類.	7
《図 2》 工藤氏の叙法副詞の構成.	8
《図 3》 「どうせ+なら」構文の構造.	64
《図 4》 「どうせ+だから」構文の構造.	72
《図 5》 「しょせん+だから」構文の構造.	115



表目次

《表 1》 森本氏の「どうせ」に関する研究結果.	11
《表 2》 武内 (2005) の主張—「しょせん」「どうせ」の異同.	13
《表 3》 先行研究—「どうせ」構文的特徴.	15
《表 4》 先行研究—「どうせ」意味的特徴.	16
《表 5》 森本氏の「しょせん」に関する研究結果.	73
《表 6》 先行研究—「しょせん」構文的特徴.	76
《表 7》 先行研究—「しょせん」意味的特徴.	77
《表 8》 副詞「どうせ」「しょせん」による構文的特徴の有無 1.	117
《表 9》 副詞「どうせ」「しょせん」による構文的特徴の有無 2.	118
《表 10》 ムード、とりたて詞の節による考察結果.	119
《表 11》 共起成分の節による考察結果.	120
《表 12》 副詞「どうせ」「しょせん」意味的特徴の有無.	122
《表 13》 副詞「どうせ」「しょせん」についての考察結果総表.	125

第一章 序論

1.1 研究動機及び目的

かつて日本語を学んでいた頃、日本語には多彩な副詞が存在し、いろいろな意味を談話及び文章内容に添加するのに役立つことが印象的である。副詞の働きによって我々は自分の考えることをより細かく表現することができる。ところが、日本語を学んできた外国人として非母語話者であるため、使えようとする時に思わず迷ってしまうのが現状である。副詞というものはほかの品詞、例えば名詞、動詞などより意味がいつそう朦朧としているので、理解するのに困難が多々ある。

あらゆる副詞の中で、よく「投げやり」「見下ろす」などのマイナスニュアンスを感じさせるものがある。それは「どうせ」と「しょせん」という副詞である。中国語では「反正…」という言い方が通じるようであるが、実際そういうふうに解釈されない場合も存在する。意味がよくわからないから「どうせ」と「しょせん」の相違について母語話者である日本人の友達に尋ねてみた結果、意外なことに、人によって解釈も異なってくるのである。しかも適用する場面も混同されてしまうことがある。例えば以下のようなものである。(下線は筆者)

- (1) どうせ人間はいつか死ぬ。
- (2) しょせん人間はいつか死ぬ。
- (3) どうせまじめに勉強しても点数が上がらないんだ。どっかへ遊びに行こう。
- (4) しょせんまじめに勉強しても点数が上がらないんだ。どっかへ遊びに行こう。

上記の作例はいずれも正しいと認める日本人母語話者がいる。ということは、副詞「どうせ」「しょせん」の抱える意味が近く、意味的に重なり合った部分が存在するといえよう。そのため、一体この二つの副詞にどのような違いがあるのか、使用上の制限はどこにあるのか、といった疑問を生じ、興味を抱くようになったのである。この論文を機に、筆者の微力を通して「どうせ」「しょせん」の持つ意味と機能を明らかにすることに、本稿の目的がある。

1.2 先行研究から見る問題点

日本語学の諸分野を見渡せば、副詞（副用語）という品詞の分野においては、雑多なものがその副詞の枠に入っており、未だに整然とした分類標準が見られないが、他の分野ほど早くも研究者の手が入ってこなかったので、比較的に研究成果がそれほど出されていないと言えそうである。それと同時に、研究の目を惹かれる学者の数がますます増えてきたのも、副詞（副用語）に関心を持つ論文が以前より多く完成されたことから伺える。副詞論の先駆といえ、山田孝雄であることは、紛れもない事実であろう。その後橋本進吉、時枝誠記、松下大三郎などの大学者を代表として、副詞を定義するに多大な努力をし、この分野の内容が徐々に細分化されてきて、今日に至ってなお諸賢が副詞という領域の全貌を明かすことに力を貢献している。研究の内容も、定義することからはじめ、あらゆる言葉が副詞としてどう機能するか、文中でどういう役割を持つかといったことまで、大きな方向からピンポイントに注意力を集中し、いろいろな説が次々とできあがってくる。その中に「どうせ」「しょせん」の姿が見える。

「どうせ」「しょせん」の属する副詞の系統に新たな区画を施したのが工藤（1982）である。工藤（1982）では山田（1908）にある「陳述副詞」の概念を生かして《叙法副詞¹⁾》という新しい分類を指摘したが、「どうせ」をその下位分類「擬似叙法 (quasi-modality)²⁾」の二箇所に置き、また「所詮」も同じ分類に入れられた。「どうせ」の属する項目が①「現実認識的な叙法」→「擬似叙法」→「否定」→「否定的傾向」(所詮 どうせ どだい なまじ へたに) と、②「下位叙法」→「まとめ」→「はしより」(どうせ どっちみち いずれにせよ 所詮 とにかく) (下線は筆者) であるが、氏の論文は「ぜひ」「きっと」「かな

¹⁾ 工藤（1982）は自分の言う「叙法性 (modality)」を「話し手の立場からする、文の叙述内容と、現実および聞き手との関係づけの文法的表現」と定義し、こうした性質を持つ副詞を叙法副詞という。

²⁾ 叙法副詞はさらに2分類することができ、すなわち「基本叙法」と「擬似叙法」の副詞である。擬似叙法とは、「らしい」のように、「過去形をもち、連体形・条件形など文中の位置に立つ語形（または機能）をもち、また、判定作用の主が必ずしも話し手ではない、といった性格をもつ」ものをいう。その擬似については、「話し手の立場からする」という部分が間接化されたからそう呼ぶのである。(工藤 1982 : 51)

らず」などの副詞に重点が置かれ、本研究で取り上げる「どうせ」「しょせん」二語については別段深く論じることはしなかった。

「どうせ」を「しょせん」と並べて考察するもう一人の学者が森本である。森本(1994)は「話し手の主観を表す副詞」を29個抽出して基本的な構文・意味の面にわたって分析を試みた。そこで「どうせ」と「しょせん」を同じ類に分けて、各自の特性を指摘してみたが、「どうせ」の担う機能が①現在の状況に判断評価を与えられる、②当事態の真実性は状況を問わず既定である、③例の既定性を前提にした場合、対応できることの範囲は限られる、との三つであると結論づけたものの、森本からも例の「どうせ」の三点目の特性についての説明が足りなくて、「暫定的な解決」と明言しているように、まさに検討の余地が残される。なお「しょせん」の持つ働きについて、①ディスコースにおける話し手の最終的結論的意見である、②意見内容は否定的なものに限定し、諦め、軽視などの気持ちを添えることが多い、③文の外部に言及して最終的発言をする、との三点を森本氏が挙げている。しかし他の成立条件や述部の傾向、または二つの副詞の比較などについては触れていない。

森本の説を興味深く検討したのが杉本(2000)である。杉本(2000)は、「どうせ」についての分析から言えば森本(1994)よりいっそう細かく行った。「どうせ」の基本的性格、形態上の類型、述部の類型、機能、さらにムード、中立イメージの語と共起する場合などを一応取り上げてみたが、「既定性」の定義や「どうせ～なら」についての説明に不足が見られる。

小矢野(2000)では、「どうせ」を文構成の面から進んで、渡辺氏の主張である「評価の副詞」をもとに、モダリティとの関連を見つめた。氏の論は主に複文・連文の観点から出発して「どうせ」の出現する場合、主節と従属節がどう影響されるかについて考察し、さらに評価的な意味という意味上の場合も視野に入れて見た。川端(1983)の説を提起し「所詮」「どうせ」について分析したが、

- (5) 男は人生の賭けから逃げた。あの男は所詮弱虫なのだ。(小矢野 2000 による例)

との文を挙げて、「第2文が第1文の根拠」で「決定的」とし、「どうせ」

にもあてはまる、すなわち「どうせ」「しょせん」両者は連文機能において同様であるように主張している。が、武内（2005）によるその両者を対象としての比較研究が現れ、認知語用論の立場から見ることはともかくとして、簡潔に結論をいえば、「しょせん」は前提であり、「どうせ」は他の命題を前提に導いた結論であるというそれぞれの働きを持つことが説かれ、つまり同じ研究標的から二説が主張されているので、あらためて検討するに値する。

以上述べてきたとおり、副詞の一員である「どうせ」「しょせん」をめぐって行われる研究は確かに存するが、構文上・意味上の把握が定めておらず、しかもその定義に関しても違う立場を据える異なる方向からの論説が存在しているため、定説が未だに成り立っていないのが自明の理であろう。よって、本研究において以上を研究課題として論を進めることにする。

1.3 研究方法及び本論の構成

上にも触れたように、「どうせ」の周りには「しょせん」など意味上の近接性を有する副詞が存在しており、しばしば比較の標的として用いられているので、「どうせ」「しょせん」を同時に取り立てて相違を比較すれば、この二語の容貌を明らかにするには大いに役に立つだろうと思われる。そのため、本論では工藤（1982）の分類法に従って「どうせ」「しょせん」の二つの副詞を叙法副詞の一員とし、二章においてまず研究標的とされる「どうせ」について、先行研究を総括した上、より明白な問題意識を表明する。そして辞書の記述を通しておよその傾向を見、構文的・意味的特徴について分析し、先行研究の補足を目論む。方法としては工藤（1997）の研究法を参考に取り上げてその考察項目をピックアップして用いるので、全く同じような仕方で検討するのではない³。構文的特徴においては主語、対象語、動作主の相互関係が映るヴォイスをはじめ、「どうせ」がつく文の描写する時間性と継続性を表すテンス・アスペクト、話し手の心理・心的態度を示すムード、意味的にムードの表現に近いとりたて

³ 工藤（1997）では評価成分を自分なりにとらえて論じるが、その2章「構文的な諸特性」において選出された評価成分を3方向へ論を展開している。①「文の意味的な構造との関係」そのなかにまた a.「叙述内容の意味的なタイプ—述語の種類」 b.「評価対象としての、〈主語〉と〈動作主〉—ヴォイス」がある。②「文の陳述的なタイプ—テンス・ムード」③「複文—従属節における用法—「陳述度」」。本論ではそれぞれの項目を筆者なりの呼称で取り扱うことにした。

詞、「どうせ」とともに出現する述語や仮定、理由表現などといった共起成分の五項目を中心に分析し、先行研究で議論された「既定性」「原因・理由」などの意味的特徴を同時に観察していく。三章において、二章と同じ研究方法をもって「しょせん」の構文的・意味的特徴を考察していく。さらに四章においては、先に論じた「どうせ」と「しょせん」の二つの副詞を併せて、全面的に互いの相違比較をした上で、最後に五章にて結論をつける。以上をもって、本稿の研究方法とする。

なお、研究範囲については、杉本（2000：17）の指摘するとおりに、「どうせ」が出現する場合はほとんど会話もしくは独白の文であり、要するに主観性の強い文体であるため、客観性の強い新聞報道や学術的な文章の地の文で使用される可能性はない。かつ「しょせん」も主観性を持ち「どうせ」と同じ類別に置かれているため、用例の収集に関しては小説などの書籍をもとに作成された『現代日本語書き言葉均衡コーパス』⁴を使用することにした。



⁴ 当コーパスに収録されている文章は、概して国会会議録、書籍、白書と Yahoo!知恵袋など四種類のリソースがある。筆者はその中、インターネットにおける情報は信憑性が低いと見て、Yahoo!知恵袋一類を除外することにした。なお一見コーパスの名前が「書き言葉」であるが、実は小説などの内容には会話文が出るので、確実に主観性の文を有していることを断っておきたい。

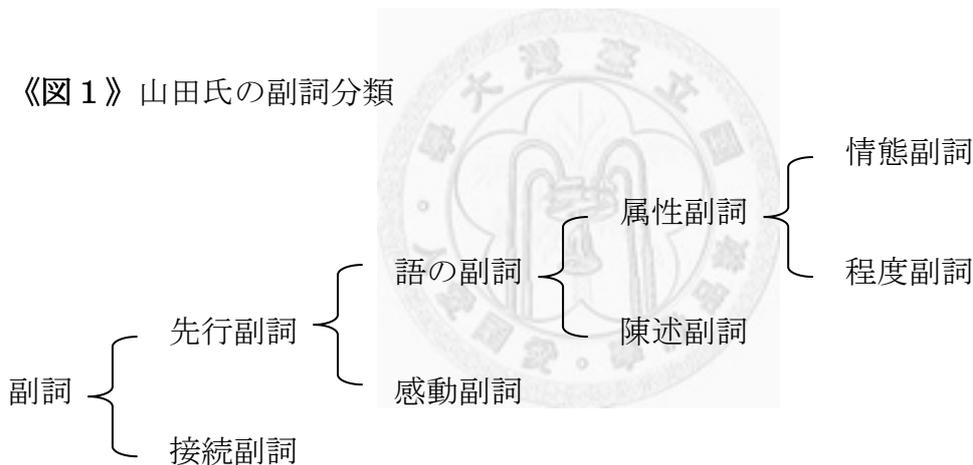
第二章 副詞「どうせ」の諸相

2.1 先行研究

2.1.1 位置づけ

ここで、副詞「どうせ」は日本語学においてどのように定義・分類されているか、まず提起しなければならない。

「どうせ」の語学における位置づけはどこにあるのか、という質問を考えるに際しては、まず副詞の統括分類をめぐる研究を見ていくべきであろう。最初に「陳述副詞」というカテゴリーを設定したのが、山田孝雄である。山田（1936）によると、副詞を次の関係図で示すことができる。



そして陳述副詞の定義について、次のように述べている。

述語の陳述の方法を修飾するものにして、述語の方式に一定の制約あるものなり。この陳述の副詞は用言の実質の意義即ちその示す属性には関係なく、この陳述の方法のみを装定するものなれば、用言が述語としての用法に立たぬ時には装定することなきものなり。（山田 1936）

この陳述副詞の概念は、渡辺（1974）によっていつそう詳しく定められ、「誘導の職能」という性格を提起し、「誘導副詞」の一類を立てた。その包括範囲は陳述副詞とは大別がないが、誘導の職能を有する副詞は呼応現象が起きるとさ

れており、下位分類として「態度の誘導副詞」と「注釈の誘導副詞」が存在すると認められる。その後、山田と渡辺の見地を踏まえて、工藤（1982）は山田孝雄の説による「陳述副詞」を取り立てて、陳述副詞には下位分類されるものがあるべきだとして「a. 叙法（のべかた） modality / b. とりたて focusing / c. 評価（きもち） emotionality」という三つの項を挙げ、自ら「叙法副詞」という新しい名称を創出して山田氏と違った分類を試み、陳述副詞の一部として取り上げて検討した。「とりたて副詞」を「限定副詞」、「評価副詞⁵」を「注釈副詞」の一部として言及したことがあるが、叙法副詞について、自らがかつて論じた「注釈副詞」に混乱があるとして、そのうちの評価的・感情的なものだけを評価副詞として残し、その他のものは叙法副詞の下位叙法に繰り入れた、との説明がある。

1.2 においても触れたように、工藤氏は、叙法には「基本叙法」と「擬似叙法 (quasi-modality)」があるとし、叙法副詞を以下の四類に分ける。

- A. 願望—当為的な叙法
- B. 現実認識的な叙法
- C. 条件—接続の叙法
- D. 下位叙法 sub-modality

上で並べた四分類は大筋であり、各分類にはいろいろな下位項目が据えるが、その構成を次に簡潔に提示する。

《図 2》 工藤氏の叙法副詞の構成⁶

- A. 願望—当為的な叙法
 - a. 基本叙法 ①依頼 ②勧誘・申し出など
 - b. 擬似叙法 ③希望・当為など
- B. 現実認識的な叙法
 - a. 基本叙法 ④感嘆・発見など ⑤質問・疑念 ⑥推測 ⑦伝聞

⁵ 工藤（1978）において、C「叙述内容に対する話し手の価値評価」との一項に立てたものである。（例：あいにく、さいわい、不思議にも、ありがたくも、おどろいたことに、失礼にも、親切にも...）それに対して、「どうせ」「所詮」などはD「叙述のしかたについての注釈」との類に置かれている。

⁶ 工藤（1982：53）によるものである。

- b. 擬似叙法 ⑧推定 ⑨不確定 ⑩習慣・確率など ⑪比況 ⑫否定 ⑬肯定
- C. 条件—接続の叙法
 - ⑭仮定条件 ⑮仮定逆条件 ⑯逆条件（仮定～既定） ⑰原因・理由 ⑱譲歩 ⑲譲歩～理由
- D. 下位叙法 sub-modality

陳述副詞をはじめとする脈絡から見てくると、工藤の叙法副詞が最も詳しい分類であるといえよう。そのうちの二項に「どうせ」が置かれているが、まずは「現実認識的な叙法」→「擬似叙法」→「否定」→「否定的傾向」、そして「下位叙法」→「まとめ」→「はしより」の項目である。

2.1.2 構文的及び意味的特徴

2.1.2.1 工藤（1982）

2.1.1 位置づけの節において言及したように、工藤（1982）は、こうした叙法副詞の一員として「どうせ」を分類の中で二箇所に置くことにした。繰り返しになるが、それぞれ「現実認識的な叙法」→「擬似叙法」→「否定」→「否定的傾向」（所詮 どうせ どだい なまじ へたに）と、「下位叙法」→「まとめ」→「はしより」（どうせ どっちみち いずれにせよ 所詮 とにかく）とにある。A～Dの四種類の副詞がもつ一般性について、

A B Cの三種はいわゆる呼応現象をもつものでありDは広義の平叙文に限られるという叙法的な共起制限はある（から叙法副詞の一種なのだ）が、積極的に一定の述語形式と呼応する現象が見られないものである。次に、A B Cのうち、AとBが主文の述語と呼応する（しうる）ものであるのに対し、Cは原則として従属節の述語と呼応するものである。（中略）最後に、Bが話し手または動作主の意識や行動には関わりなく、存在しているまたは実現する事態の認識に関するものであるのに対し、Aは話し手または動

作主の願望や意志などの情意に関するものである。(工藤 1982)

との一段落が指摘してあるが、明らかにD類に関する説明はわずか「広義の平叙文に限られる」との一行であり、その論の5節において下位叙法に集中して論じられたが、やはり多目標に対しての概観的なものであるため、「どうせ」については「どうせ、負けるにきまっている」と一例を挙げてその共起の傾向を触れたのにとどまり、格別取り上げて論じることはなかった。言い換えてみれば、叙法の次元からその意味と機能は大別されたのであるが、さらなる深入りはないといえよう。

2.1.2.2 森田 (1992)

「どうせ」という副詞を論じることになると、森田 (1992) が「どうせ」を定義する先駆的な存在であると見なされるようである。森田によると、「どうせ」は「細かな問題をあれかこれかと詮議している場合、そのような問題設定以前に、すでにより基本的な大前提が定められていて、いずれにせよ結局はその前提通りに事が落ち着くのだという発想」によって使われる副詞であり、二つの意味を持つとされる。一つは「人間どうせ一度は死ぬのだ」のように「結局なるようにしかならないのだから、そんなことに心を煩わすのはむだだ」という感覚であり、もう一つは「どうせ死ぬなら笑って死のう」のように「結局Zになるという運命の大前提がある以上、避けようとしても避けきれない。ならば、観念して立派にZに至れるよう最善を尽くすべきだ」という気持ちが表される。回避することができないからあきらめて結局を迎えようという、マイナスニュアンスの示唆役であるといえよう。要するに、後に来る結果がもはや自分の心のなかに出来ているから、できるだけ力を尽くすことによってよりいい結果を求めるという考え方が、後の杉本氏らに影響を与え、「既定性」「最善の事態の選択」など後出する他学者の論点発想の源であると見てよかろう。しかし、「基本的な大前提が定められていて、いずれにせよ結局はその前提通りに事が落ち着く」や「観念して立派に最善を尽くす」など氏の指摘した基本的精神について不審に思われる。

2.1.2.3 森本 (1994)

森本 (1994) は、広範囲に話者の主観を帯びる副詞群を選出し、29 個の副詞を挙げて「SSA 副詞⁷」として命名し、話し手がそれらの副詞をどのように利用して主観を表すか検証した。主観性の面にて一席を占める「どうせ」が「しょせん」とともに森本が分類した「グループ A12」の枠に入り、その特徴として「基本的平叙文（行為文）で現れる」上で、「その副詞の付く文の外にある文脈に言及する傾向がみられる」ということが指摘された。森本が検討した内容の量が極めて膨大なので、本論にかかわりのある部分のみ抜粋して、主な内容を次のように自分なりに整理しておく。

《表 1》 森本氏の「どうせ」に関する研究結果

基本的文タイプ	平叙文		疑問文		命令文	
	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定
	+	+	-	-	-	-
否定	否定文に現れるもの		否定される可能性のあるもの			
	+		-			
共起関係	平叙文		だろう	らしい	う／よう構文	
	現在	過去				
	+	-?	+	+?		-

※「+」：その現象が存在すると認める。「-」：その現象が存在すると認めない。

「+?/-?」：一応+、-と認めるが、判定困難の場合。

「どうせ」について分析するその節の最後に、森本氏が「未来の予測」と「既定性」などの述べ方を見せて、「どうせ」のメカニズムを①ある行為に関係する現在の状況に、ある一定の判断評価を与えられるということ、②その行為の

⁷ SSA 副詞 (a speaker's subjective attitude) は、森本 (1994 : 26) では「話し手が自分の言うことに対し、主観的／心理的態度を表現するものであって、文の主語として表される行為作用主体の主観的／心理的態度を表現するものではない」という意味的条件を満たす副詞をいう。

真実性（その行為が起こるかどうかということ）は状況にかかわらず決まっているということ、③この既定性を前提にすると、対応可能なことの範囲は限定されるということ（森本 1994 : 129）と帰結している。ところが、「因果関係」を「どうせ」の成立条件にした上、複文の場合主節に現れるものとして取り上げたのは「許容表現」だけで、考察が不完全な形で終わっている。なお「既定性」の定義についても説明していない。

2.1.2.4 杉本 (2000)

森本 (1994) の成果を踏まえて、さらに細かく「どうせ」の性格や機能、ムード、中立イメージの語と共起する場合による現象を分析したのが杉本である。「基本的性格」として①既定性、②短絡性、③見くびりのムード、形態上では「どうせ+述語」「どうせ～なら」との二通りを列挙し、森本氏が示した「未来予測」と「現状認識」に自分なりの説明を加え、「プラス・中立・マイナス」という三つのイメージを念頭に置いて分析した。ところが、文中に疑問に思わせる箇所が見られる。例えば、「既定性」と「見くびりのムード」の定義がおおざっぱで細かく設定されておらず、なお「形態上の類型」について「どうせ～なら」の場合は「意志動詞が入り得る」と指摘されたが、実のところ無意志動詞も入ることが可能なので、氏の論に不十分なところが見られる。

2.1.2.5 小矢野 (2000) 、武内 (2005)

小矢野 (2000) では、「複文構成機能」「連文機能」と「評価的な意味とそのレベル」三つの方向から手を加え、「どうせ」の特徴を剥き出すよう試みた。複文の場合、順接確定条件づけタイプ「どうせ～(のだ)から」と、順接仮定条件づけタイプ「どうせ～(の)なら」との二種類が顕著であるが「どうせ～したって/したところで」のような逆接仮定条件づけタイプも数少なく存在しているとされている。評価的な意味について、その意味が「強く現れるのは」①順接確定条件づけを表す「～(のだ)から」の形の従属節に現れる、②連文が根拠・理由づけの関係で結ばれている、という二つの場合であるとしている。

ところが、ここで特に注意されたい部分が、連文の場合、「所詮」と「どうせ」に対する指摘である。根拠を表す特性について説明する段落で、1.2にも挙げた例(5)を見せながら、こういう説明がある。

(5) 男は人生の賭けから逃げた。あの男は所詮弱虫なのだ。(同 1.2 例)

第1文が判断・評価の前提となる「個別的事態」を表し、第2文が「包括的乃至端的な根拠」を表す、という関係である。第2文に「所詮」がなくても、第2文が第1文の根拠を表すことは、連文の構造から明らかだが、その根拠が決定的である、動かしようがないといった判断が、「所詮」を加えることによって生じるのである。同じことは「どうせ」にも当てはまる。(小矢野 2000)

このセクションを通して、すなわち二つの文が存在する場合、「どうせ」は「理由・根拠」を表し、かつ「しょせん」もこの機能において同様であるという意味が見て取れよう。この点、武内(2005)が認知語用論における意味論を用いて分析した結果、小矢野氏の結論とはほぼ一致している。《表2》をもって説明する。

《表2》 武内(2005)の主張—「しょせん」「どうせ」の異同

「しょせん」 & 「どうせ」	武内(2005)の主張
共通点	1. 非真理条件的である。 2. 手続き的情報を記号化している。 3. 2命題間を関係付ける談話連結語である。「しょせん／どうせP、Q」というスキーマにおいて、PがQの説明、理由となる。つまり広い意味での因果関係を表明する。 4. Qによって伝達される命題、あるいはQから呼び出される想定は否定的な意味合いを持つ。

相違点	認知効果において、「しょせん」が「既存の想定強化」、「どうせ」が「文脈含意の導出」という働きを持つ。
-----	--

共通点の第3点からわかるように、「どうせP、Q」の場合、「PがQの説明、理由」という構造になっているため、両氏の論点が合致している。

そのほか、「前提」「結論」の機能を持つかどうかという問題について、小矢野氏は特に議論することをしなかったが、武内氏は見方を明らかにしている。武内氏の説によれば「どうせ」の機能を論ずる際、次の文を例にして説明している。

- (6) どうせ、アメリカ人の作ったものだ。b. いい映画とは思わない。(武内 2005 による例)

「どうせ」の場合、「aの表出命題がbの表出命題が前提であるという推論からの結論」と指摘されている。すなわち「どうせ」のほうが結論の機能を持つということである。以上をもって両氏の「どうせ」について異なった主張を掲示した。

以上を通して、先行研究における各学者の論説について疑問点を挙げてきた。次節により問題提起を掲示する。

2.2 問題提起

以上、「どうせ」について先行する諸研究を定義または構文的・意味的特徴といった側面から見て相違点を提示した。本節ではそれらの研究成果の異同を次にまとめた上で、問題提起につなげることにする。

《表3》 先行研究—「どうせ」構文的特徴

特徴		学者	工藤	森本	小矢野	武内
基本的 文タイプ	平叙文		+	+		
	疑問文		-	-		
	命令文		-	-		
共起関係 (ムード)	だろう			+		
	う/よう			-		
	のだ			+	+	
連文機能	前提				-	-
	理由・根拠			+	+	+
テンス	現在			+		
	過去			-?		

※「+」：その現象が存在すると認める。「-」：その現象が存在すると認めない。

「+?/-?」：一応+、-と認めるが、判定困難の場合⁸。「空白」：未検討の項目。

⁸ 森本 (1994 : 56)

《表4》 先行研究—「どうせ」意味的特徴

特徴 \ 学者	森田	森本	杉本	小矢野	武内
既定性	+	+	+		
見くびりのムード			+		
マイナス評価				+	
原因・理由・根拠		+	+	+	+
前提	+			-	-
結論					+

※「+」：その現象が存在すると認める。「-」：その現象が存在すると認めない。

「空白」：未検討の項目。

筆者の作成した《表3》《表4》を通して、そして上掲各研究の問題点のまとめとして、問題提起を次のように提示する。

- ① 構文上の側面から、「共起関係（ムード）」に属する「だろう、のだ」以外に他の共起するムードがあるのか。あるとしたら、どのような現象を示すか。「テンス」において果たして「過去形」との相関関係がどうなっているのか。また、先行研究にて未検討の項目「ヴォイス」「とりたて詞」と述語、複文分野の接続助詞といった「共起成分」そして「テンス」に関わりの深い項目「アスペクト」が「どうせ」の成立条件に影響するか。
- ② 意味上の側面から、「どうせ」の所有する意味的特徴とされる「既定性」「マイナス評価」「原因・理由・根拠」「前提」「結論」などについて、それらの特徴は確実に成立するのか。また、他の特徴が存在するのか。

上掲二点を解明して先行研究の補足を図るために、より全面的に考察を行うことにする。

2.3 辞書による記述

副詞の定義を探るには、まず辞書がひとつの参考になろう。「どうせ」について言及した辞書を調べた結果、『広辞苑』、『新明解国語辞典』、『基礎日本語辞典』と『現代副詞用法辞典』を挙げてみる。

『広辞苑』では、

『副』（断定的な気持または投げやりな気持を伴う）どのようにしたところで。いずれにしても。つまりは。所詮。柳樽七「—もう知れたと下女のいけづるさ」。「—やるなら今すぐ始めよう」「—二人はこの世では花の咲かない枯れ芒すすき」

との一行が載せてあるが、「どうせ」を「いずれにしても」「しょせん」と同じ意味にとらえている。それと同じく、『新明解国語辞典』にも「いずれにしても」そして「結局」などの対応の語が出ている。

（副）〔「どう（にも）せよ」の圧縮表現〕宿命的にそう決まっておき、それ以外に選択の余地は無いことを表わす。〔多く、あわてたり特に構えたりするには及ばないという気持で使われる〕「人間は—〔=いずれにしても〕死ぬのだ/—〔=結局は〕まにあわないのだからゆっくり行こう/—〔=疑いも無く〕われわれが勝つに決まっている」

『広辞苑』『新明解国語辞典』のような簡略な定義と相對して、『基礎日本語辞典』と『現代副詞用法辞典』のほうが、より細かくいくつかの場合によって生じる意味の違いについて説明が加わっている。先行研究の節でも触れたが、森田の『基礎日本語辞典』には「どうせ」の定義を以下のように述べている。

細かな問題をあれかこれかと詮議している場合、そのような問題設定以前に、すでにより基本的な大前提が定められていて、いずれにせよ結局はその前提通りに事が落ち着くのだという発想。

この定義をみると、「どうせ」の意味的要素として第一に提示されたのが<前提>であることがわかる。そして次に出た分析のなか、例示された「泣いたところでしょうがない。どうせ実らぬ戀だもの」や「どうせ受けるなら一流校に挑戦しよう」などのような場合に、また要素が二つ現れる。前者は「投げやりで無責任な意識が潜」んでいて「一足飛びに終着点に結論を持っていく」意味を持つのに対し、後者は「運命の大前提」の控えているある結論が必至であるから、避けるよりむしろ「最善を尽く」して状況を全うするほうがいい、という思考が存するとされている。

それに比べて、もっぱら副詞を中心に編纂された『現代副詞用法辞典』は意味の細部までいっそう分析の足を踏み入れようとしている。その辞典によると、「どうせ」の意味は二通りに大別している。しかも、「しょせん」との相違についても説明を添えている。

- (1) ① お前じゃどうせろくなざまにできやしない。
② あいつはどうせ遅刻するに決まってるさ。
③ 「ごめん、一時間寝坊した」「どうせそんなことだろうと思ってたわ」
- ③ ぼくなんかどうせ落ちるに決まってるんだ。
- ④ ⑤ ええええ、どうせわたしはバカですよ。
- (2) ① どうせやるんなら、徹底的にやったらどうだ。
② そんな古い家具、どうせ捨てようと思ってたんだ。いるんなら持ってっていいよ。
③ じたばたしても始まらないな。どうせ手術はしなきゃならないんだから。
④ せっかく小田原まで来たんだから、どうせのことに箱根へ行かないか。

【解説】 (1) 必ず一定の結果になることを侮蔑^{ぶべつ}または自嘲^{じちょう}する様子を表す。マイナスイメージの語。述語にかかる修飾語として用いられる。条件によらず必ず一定の結果になることをあらかじめ予測する文脈で用いられ、いつも同じ結果にしかならないことについて、強い侮蔑の暗示がある。①～

③は相手の行為について用いた場合で、相手に対する強い侮蔑と慨嘆の暗示を伴う。①は反語で、相手の成果が好ましくないことを予測して侮蔑している。④⑤は自分の行為について用いた場合で、自嘲や自暴自棄の暗示がある。

この「どうせ」は「しょせん」に似ているが、「しょせん」はさまざまな条件にもかかわらず、結果が予想どおり好ましくないというニュアンスで、あきらめと慨嘆の暗示がある。

× お前じゃ所詮ろくなざまにできやしない。

(2) 同じ行為や結果を認める様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語。①は条件句に用いられた例、②～④は「どうせ」「どうせのことに」の形で述語にかかる修飾語になる。(後略)

以上四冊の辞書を参考にした結果、意味の面において「どうせ」の大体の姿が浮かび上がってくるが、それだけで必ずしも全面的説明とは言えないのが先行研究の紛れから見ても確かなことであろう。よって、次の節には構文の角度から五つの項目を設け、「どうせ」の持つ特徴をより全面的に検討する。

2.4 「どうせ」の構文的特徴についての考察

2.4.1 ヴォイス

ヴォイスといえば、受身、使役、可能と自発などといった表現である。それら四種類の表現は「どうせ」との共起が許されるのか、本節で検討する。

受身表現

- (7) 敵の乱破の指導者とおぼしき者を捕えたという報告があった。信玄はその者を庭に引き出して訊問した。

「浅間神社の宮侍楠田小藤太」

と答えただけで、なにごとも云わなかった。死を覚悟している顔だった。信玄は楠田小藤太を仮牢に入れるように命じたあとで、側近の者を呼んで、策を与えた。

信玄のお側衆で口達者で有名な、真田昌幸が牢番に化けて、楠田小藤太に云った。

「お前は、どうせ明日の朝は殺される。お祭りの前には、不浄な者はすべて始末してしまえというお館様の御意向だ」(新田 次郎『武田信玄』)

- (8) 女からパッケージを受けとり、カウンター内のラックにそのナンバーを探す。ナンバーは一〇二、タイトルは『淫美ジュアル』、出演女優は首藤李沙で発売元はアーバン映像という大手メーカー、サブタイトルには「究極の美少女がこんなことまで…」と打ってある。ビデ倫物では回転のいい作品で、首藤李沙も人気のある女優らしい。もともとAV女優の生命は長くて二年、この首藤李沙もどうせ一、二年で飽きられる。(樋口 有介『雨の匂い』)

- (9) 「長官。戦争が終わったら、何をされます？」
何でも無い質問だが、山本には不思議に思えた。
なぜそんなことを、と。だが、こう答えた。

「俺はこの戦争を始めた男だ。どうせ、ギロチンかセント・ヘレナに送られるだろう。先のことは深く考えないようにしている」

半分冗談、半分本気だった。

「じゃあ、自分がそうならないようにします」

松阪はさっと敬礼をすると、背を向けて行ってしまった。その姿を見送りながら、山本はひとりつぶやいた。

「あいつ、この前からおかしいことを言う」(稲葉 稔『スーパー・ハイテク艦「大和」』)

- (10) アルコールを飲んでいるうちに自制心が少しずつ戻ってきた。それから彼は善後策を一人で考えた。もうフレッチャーもゴームリーも役に立たない。

全てのことはハワイのニミッツに報告してあるから、いずれ二人の処分に関してはなんらかの指示があるはずだ。

なに構うもんか、やつらはどうせどこかに飛ばされるだろうー。(稲葉 稔『戦艦大和修羅の航跡』)

例(7)から例(10)までは「どうせ」が受身表現と共に現れるものである。例(7)は話し手・真田昌幸が虜になった楠田小藤太に話しかけるシーンであるが、楠田に対して「お前は明日の朝処刑されて死ぬことになっているから、どうあがいても無駄だ」と死期を告げる。ここでは「どうせ」の働きにより、後ろの言葉が談話の過程において隠れても意味が簡単に伝達できる。

例(8)の話し手はAV女優の業界の生態について述べているが、たとえどのように人気があっても有名になっても、多ければ二年くらいで客に飽きられてしまうとということが免れないと、話し手が断言している。

例(9)は長官と部下の対話であり、長官の山本が部下の松阪に戦争終了後の予定について聞かれ、自分はその戦争の発生を促した人間だから、戦争が終わったら必ず罪を問われて惨めな最期が待っているのだと確信している。そのため、無力感というか諦観した予想の伴った「どうせ+受身表現」があった。

例(10)の場合、話し手はある二人の存在が自分にとって不安に思っており、そのため何かの手を打ったらよいか思索している。ところが、あの二人にはい

ずれ処分が下されもはや話し手の脅威にはならないので、<飛ばされたら自分の計画に介入することができないから、別に心配することはない>との意味が「どうせ（どこかに）飛ばされる（だろう）」を通じて読み取れる。

使役表現

(11) 「あの…このお部屋はどうなるんですか」

なつみが尋ねると、ゆきはこともなげに答える。

「借りてるんだから、私たちが出さえすりゃいいのよ」

「家具は？」

「社長がなんとかするでしょ。置いてくつもりかもね。大家さんは喜ぶわ」

「こんなにお部屋をすてきにしたのは社長なんでしょう？ もったいないですわねえ」

「いいのよ、どうせただでやらせたんだから」

「ただで？」

「そう。そのころの社長のカレがインテリアの会社の社長でね。ドアの飾りもその人のデザインなの」（永井 路子『茜さす』）

(12) ムロイ

気にしない、気にしない。 あたしなんかさ、結婚相手は十五歳年下がいいなあと思ってるぐらいなんだから。

アカネ

十五歳年下って、高校生じゃない！ それ犯罪だよ。何考えてるのよ！

ムロイ

うちの息子が生まれたのが、あたしが三十歳のときでしょ。だからダンナがあたしと息子の中間にいるとおもしろいじゃん。

アカネ

どうでもいいじゃん！ そんなこと（笑）

ムロイ

だって、どうせあたしが食べさせていくんなら、若い男のほうがいいじ

ゃない。一家のリーダーはかあちゃん。全員従うのだ！

「整列！ 番号！」「イチ」「ニ」「サン」って！ いいでしょおー（丸山あかね/室井 佑月『プチ美人の悲劇』）

使役表現と共起するものが例（11）（12）である。例（11）はゆきとなつみの会話であり、ゆきが引っ越しするために返上することになった部屋の家具について、なつみはそれをそのまま置いて持っていかないことを残念に思っているものの、ゆきはそれについて自分の意見を示した。「社長がただでやらせた」とのわけに対して「無料だったから別にもったいないことはない」という意見を「どうせ」によって表明することができたのである。

例（12）は二人の冗談めいた雑談である。ムロイがアカネに自分の想定した結婚相手の年齢層について教えていたが、アカネの驚きをよそに、さらに面白い場面を勝手に想像して話している。「あたしが食べさせていく」ことがすでに決めつけられたので、「結論がとっくに出ているから、思う存分条件を設定しよう」とのニュアンスが「どうせ」を媒介に洩れる。

可能表現

可能の意味を表す表現形式をいうと、「～れる・られる」「～することができる」「可能動詞」「できる」などといったものを指す。

- (13) 「いいえ、あとでわずらわしいことになるこんな手紙を、どうして残しておきましょう。どうせわたくしは長くは生きていられそうもないのだから。死後にこんなものが残っていては、あの方のお為にも御迷惑になりましょう。いい気になって、こんなものも取っておいたのだなどと、お耳に入れば、恥ずかしいでしょう」
とおっしゃいます。（瀬戸内 寂聴『源氏物語』）

- (14) 高校教育の改革というのは本当に大事になってくると思いますね。（中略）今まで偏差値で輪切りされてきた子供たちがどういうことになってきたかということはもう御存じだと思いますが、私も学校現場におりまして、

やっぱり無気力がまず一つ出てまいりました。どうせと言うんですね、どうせ僕はもう数学もできないし英語もできないしと。あきらめですね。そうすると、どこへ自分の存在感を示していくかということがいろいろな形であらわれできます。(『国会会議録』)

- (15) 「それは、実際に彼女に手を下したものをさすのか。それとも、彼女をそこまでおとしめ、利用した男たちのことか？」

「できれば両方。でも…さしあたっては実際に手を下した男ね。どうせ法的に裁くことなんかできやしないんだから、私がこの手で始末をつけてやるわ」

色気も素っ気もないシャルルの問いに、けれどマリィは即答した。つぶらな、宝石みたいにあざやかな瞳が妖しい光をたたえる。ちょっと俺はどきとした。まるで、復讐の女神みたいだったから。(藤原 万璃子『上海小夜曲』)

- (16) それからもう一つは、年金というものについて全然信頼していない。つまり、幾らかけたって、どうせかけたって、老後にはもらえないんだろうという年金制度に対する不信感もあるかもしれません。しかし大部分は、年をとって困ったらば、いいや、何とかだれかが、国が面倒見てくれるんじゃないかという甘えが実はあると僕は思うのです。ですから、教育が大切だということを申し上げたかったわけでございます。(『国会会議録』)

- (17) 邦子は、私の肩を叩いた。

「危いよ！ バランス悪いんだから気を付けて！」

—私たちは、駅の方へと歩き出した。

「いつまで？」

「夏休みまで」

「じゃあ、要するに、ずっと休みだ。羨しい！」

「でも、テスト受けられないんだから、二学期の成績が問題よ。自宅学習のノートも、提出しなきゃいけないし。—まあ、どうせこの足じゃ、海水浴にも行けないけどね」(赤川 次郎『早春物語』)

可能表現と共起するものが例(13)から(17)であるが、(13)の「～れる・られる」以外に、(14)から(17)は動詞の「できる」と「可能動詞」二例ずつであり、すべて否定形で現れている。可能表現の場合、話し手は自身や他人が話題における事態を実行する能力を具有しないことに対し、「どうせ」をもって確定した事実として能力の不足についてマイナス的な意見を示している。

ヴォイスについて調べた結果、受身表現がその中でかなり目を引くであろう。受身形で直接に文末をしめる場合もあれば、ムード表現とともに出現する場合もある。割合をもって分析すると、受身表現の数が最も多く、可能表現が次ぎ、使役表現がまれであるが、「どうせ+自発表現」の例文が全く見つからないのである。

2.4.2 テンス・アスペクト

非過去形

- (18) 不意に老人が咳きこみはじめたのは、十分ほどそうしていてからだ。老人は上体を起こし、慌ててソファの背にかけた上着のポケットを探った。白いハンカチ。口に当てられる。口から出てきたのは、苺ジャムのように見える、痰だった。苺のかたちが、まだ崩れきらずに残っているような、幼いころによく口にしたジャム。それが二つ三つ出てきて、ハンカチを赤黒く染めた。

「吐いてしまった。だけど、気分はよくなったよ」

痰か吐瀉物かは、吐き出す時の仕草でわかる。間違いなく、痰だ。

「病院には、行った方がいいかもしれないな」

「どうせ、火曜日には医者に会う。古い付き合いの友人でね」

それ以上、老人は何も言わなかった。(北方 謙三『罅・街の詩』)

- (19) ジャーネのお父さんは、むすこの直感を信じていたから、先頭に立って、あちらこちらときいてまわった。

すると、第三診察室のとなりにあるレントゲン受付室のセロハンテープが、一個なくなっているのがわかった。

「やっぱりそうだ。第三診察室には行って、診察を受けたのは、ここに
いるわたしたちと、あの機長だった…」

アッチちゃんのお父さんは、重大な発見をしたのだった。

「いちおう、あの人物はマークしているから、だいじょうぶ」
と、赤星がいった。

「どうせ、犯人はすぐには逃げません。もうすこし、調べを進めてから、
結論を出したらいいと思うんです」(斎藤 栄『少年探偵ジャーネ君の冒
険』)

例 (18) (19) は「どうせ」と動詞非過去形の組み合わせである。(18) での話し手・老人の「火曜日には医者に会う」という言葉は未だ実現していないが、その行動を実行するつもりでいるから、「どうせ」を加えて確定的事態と見る一方、<医者を見に行くから病状に大したことはない>という意味が暗に伝達している。(19) の話題に出た犯人のこれからの行動について、「どうせ」を通して話し手はすでに心当たりができていると主張し、次のステップへ進むことを勧めたのである。

過去形

(20) 「忍さんには、二人息子がいる。二人とも東京で、大学生と高校生だ
そう。この街に戻ってきたのは、見たことがない」

「女房は？」

「いるよ。息子たちと一緒にさ」

「本人はこの街で、愛人と暮してるわけか」

「愛人って？」

「サンチャゴ通りの『パセオ』ってクラブの歌手が、愛人じゃないのか？」

「知ってるのか。どうせ、群秋生あたりが喋ったな。知っていても、誰
もなにも言わないが、群秋生だけは別だ」

「お喋り男か」

「そういうことじゃなく、あの人にとっちゃどうでもいいことなんだ。なにかもっと大事なものが人間にはある。男女にもある。眼で見える関係なんてものは、所詮夢みたいなものだ、と思ってる男さ」(北方 謙三『死がやさしく笑っても』)

- (21) 「年上の女にそういうよけいな気を遣われるのは、男の側からすればただ情けないだけで、むしろ侮辱以外の何ものでもないって、そう言ってやったよ。一応、経験者としてさ。ま、どうせこれもよけいなお世話だったろうけど？」

ぶすっと黙りこくっている俺を面白そうに横目で見ながら、一本槍はまたひとくち酒を飲んだ。(村山 由佳『天使の梯子』)

- (22) 「実験してみよう」

と黒沼健一が言った。

「どうするの」

「方程式を黒板に書くんだよ」

「死んじゃうぞ」

「どうせ、きのうあの方程式を知っちゃったんだよ。だから、死ぬんだとしたら今書いても書かなくても同じことだ。いっそのこと方程式を書いて、その秘密を知ったほうがいい」

そう言うとき健一は、黒板の前へ行き、チョークを手にとった。

チョークで、黒板に書きつけていく。(清水 義範『ゴミの定理』)

調査した結果「どうせ+過去形」という場合は三種類あり、第一は例(20)「どうせ+過去形のみ」の形であり、第二は例(21)「どうせ+過去形+だろ」の形であり、第三は例(22)「どうせ+動詞過去形+のだ」の形である、とでも言いたい、第一種の場合、数百個の例の中にはほんの一例しか存在しないのである。ここで森本(1994)での指摘を想起させる。主観を表す副詞を取り立てて分析した末、「どうせ」が「基本的な過去平叙文に現れるのはまれであるが、他方、「のだ」がそのような文につくと許容度が増す」という性格を帯びるが、なお完全な解決が得られないと森本が指摘している。問題とされるのは、「どう

せ」はいかなる場合において過去形と共起できるかということである。「どうせ」と過去形との共起制限が例を通してまとめると、第一種の場合は存在しないに等しいといえよう。では、第二種と第三種の場合において果たして過去形は共起することができるかどうか、という疑問への回答は2.4.3節の「ムード」に委ねる。

続いては、「～ている」「～ていた」という一般に「継続相」といわれる<現在・過去における動作の持続>と<動作完了後の結果の持続>二つの意味で大別される形式について、「どうせ」との共起状況を見る。

「～ている」

(23) 報告によれば、校長は、

「わが輩も諸君の信望を失った以上、もはやこの学校に長く居ようとは思わぬが、退く前に処分しておきたいこともあるから」とのことであった。

「処分とはきっと我々を退学に」ではないか、どうせこのようなことをやる者は、もうとっくに校長のリストに乗っているよ。ここにはブラックリストに乗っているような者が集まっているのだからと話は早い。

「明日の朝、作戦開始にしよう」

翌朝、学校の始まる前に、嘆願書と連判状とを知事に提出した。(曾我部 泰三郎『二十世紀の平和論者水野広徳海軍大佐』)

(24) 長老は、そこで、つい真剣になりすぎた自分を諫めるように言い淀んだ。そしてまた、自嘲の笑みを浮かべ、朗読でもするように言った。

「どうせ、わしは、この戦いが負け戦じゃということは最初からわかっとる。悲しいな。わかっておつても、わしはやりたいんだ。ソ連は崩壊、中国人は総ブルジョワ化、世界はアメリカの手に落ちた。その今世紀にこそ、わしは、アイロニーに満ちた強力な爆弾を手にしていたいんじゃ。われわれ一人一人の食卓から始まる革命をな」

長老の言葉は、スローフード運動に悲壮な彩りを添えたようでもあり、力強い何かを与えてくれたようでもあった。(島村 菜津『スローフードな人生!』)

(25) 「岩屋城はどこにありますか」

編集部のHさんがきくと、一人が、

「この上や」

と、頭上を指した。勾配のきつそうな雑木山である。ところが個人の所有地で、山道に柵をして登れぬようにしてあるという。

「あの家の持ち山や」

路傍の一軒家を指さしてから、

「登るのかいな。あかん。登らっしゃらへんやろ」

手をふった。Hさんも、あきらめた。どうせ、上には土塁も残っていないという。(司馬 遼太郎『甲賀と伊賀のみち、砂鉄のみち』)

例 (23) から (25) は「～ている」で終わっている例文である。その中の動詞述語はそれぞれ「乗る」「わかる」「残る」であり、いずれも結果を表す自動詞のものである。(23) ではブラックリストのあることが予想され、それを確実に存在しているという意味で「どうせ」が使われ、「乗っている」という結果の持続に対する確信が表されている。(24) の場合、話し手は「負け戦」になることを最初から思っており、そうなることを確信した態度をとっているが、それにもかかわらず革命したがっていることを述べている。(25) も同様に、山を登りきれない人が山頂の様子を予想して言うことであるが、「土塁が残らない」ことを決定的だと捉え「～ている」をもって結果を示したのである。

(26) 「怪人物の正体が二宮校長だと、なぜわかったのか。その点をもう少し説明してほしいんだけど」

愛が先を促してくる。こうなったら、まな板の上の鯉だ。真相を隠しておくことはもうできないし、またわざわざ隠す必要もなかった。

「そもそも、あれだけ上背のある人間はそんなにいないし、実際に組み合ってみて、体型も似通っていることがわかった」

「あら、それはおかしいんじゃないかしら。結局、わたしは一度も会わなかったけれど、校長先生は体重こそ極端に重いものの、決して肥満体ではなかったはずよ。顔だって、まさかのっぺらぼうのはずがない」

「からかうのはよしてくれよ。どうせ、何もかもわかった上で言ってるんだろう」

右手の甲で、押し払うような仕種をする。(愛川 晶『網にかかった悪夢』)

(27) (前略) 満典は、クレオに話すべきかどうか迷ったが、プラーカで日本人も一緒に殺されたとなれば、誤魔化しても仕方があるまいと考え、日本から持って来た十二万ドルの小切手をテーブルに置いた。そして、ゆっくりと一部始終をクレオに説明した。

「仕方がなかったんだ。あのころ、俺には、そうする以外に、収入の道はなかった」

クレオは、指でしきりに額をこすりながら、満典の話に耳を傾けていたが、やがて、ワインの入っているグラスを持って、部屋の中を歩き廻り、「新聞には、事件のことは、あれっきり何も出ないんだ、それに、警察もやってこない。どうせ、ならず者の仲間割れだと思って、本気で調べてないんだろう」

といった。(宮本 輝『海辺の扉』)

例 (26) (27) は「～ている」と他動詞述語の共起例である。ここでは「言う」「調べる」が<動作の持続>という意味での叙述であろう。(26) の場合、話し手は相手の口調から「何もかもわかった」ことを匂ったので、「どうせ」によってそれを確実な事実として相手の行動を述べている。(27) では、話し手・クレオは警察の様子について自分の推測を話しているが、「どうせ」の関与により<軽く見ている>という含意が伺われる。

「～ていた」

(28) 「翼、料理でもなんでも、段取りよくするのが大事。こうして、魚を煮てる間に、まな板やバットを洗って片づける。そうしたら、あとが手間いりませんやろ」

いつもうるさいくらいに、ばあは言う。私は、あとで全部まとめて洗った方がずっと楽な気がするけど、

「物事を先へ先へ延ばすのは、私はもういや」だと。

重いなら、男をもう一度しゃがませればいい、と思った。どうせさつきまでそうしてたし。鍵を開けて、ふり返ると、女は、ちょっとふらつきながらも、ずっと男を抱えていた。(ひこ・田中『カレンダー』)

(29) 一人の刑事と立話していた橋口は、

「このスクラップ工場の係員にきいたところ、この車の持主は、海外赴任するとかいって、ポンコツにするため持って来たということで、車検もあと二カ月あるし、係員たちも、まだ使えるから乗りたいといい合っていた車なので印象に残っているそうです。そのとき、中には、何も乗ってなくて、夜の内に、場所が移動していたといえます」

「じゃあ、間違いないわね」

「どうせ手袋をしていたでしょうが、指紋が検出されるかどうか、府警本部へ持って行って調べます」

そういうと、もう一人残っていた刑事が、エンジンをかけ、車を運転して行ってしまった。(山村 美紗『京都・金沢殺人事件』)

最後、例(28)は「どうせ+ていた」形式の例であるが、「～ていた」の後には「～し」という表現がつき、原因・理由の用法として使われている。ほかには(29)「～ていた+だろう」という場合もあるものの、直接「～ていた」の形で終わる例文が見つからないのである。「どうせ」は「～ていた」と直接共起せず、その代わり、理由・原因・説明を表す「～だから」「～し」「～のだ」などの表現が後に接続しない場合、文が不安定になり成立しなくなってしまうようであるが、その理由は恐らく、「どうせ」が原則として未来に起こる事態への推測・想定を担っていることにあると思われる。

2.4.3 ムード

ムードとは、述語のあとに付けられ、話し手の「心的態度」を表すものを指す。つまりそれを通して話し手の気持ち・判断・好悪などが察知されるものと

もいえよう。いわゆる「心的態度」であれば、主観性とは必ず関わってくるが、森本が称した「主観性を表す副詞」という名の下に所属するとされる副詞「どうせ」との共起状況は当然なことに注目を浴びるだろう。

調査によると、いくつかのムード表現がよく「どうせ」と共に姿を見せる。本節で考察する項目を列挙すれば、「～だろう」「～のだ」「～にちがいない」「～にきまっている」「～てしまう」などがある。

2.4.3.1 「～だろう」

(30) 家のなかに閉じこもってばかりいたのでは、世界が広がりません。子どもが小さいときこそ、いろいろな所へ出かけて行って、さまざまな景色を見たり、乗り物に乗ったり、植物や動物に触れたりしたいものです。子どもは、初めて目にするものに対して、興味津々でしょう。

子どもが興味を示した対象については、できるだけ詳しく説明してあげましょう。「どうせ、いってもわからないだろう」と決めつけずに、なるべく正確に話してあげることが大切です。(宇治 美知子『理科ができる子の育て方』)

例(30)は「どうせ+だろう」構文の場合である。例(30)の内容は親への子どもに対する育て方について説明する段落であるが、この場合、「どうせ」につく文全体が独り言のように、いわば独白の文と把握することができよう。隠れた部分をもとに戻せば「どうせ、(私が)いっても(子どもには)わからないだろう」に相当すると考えられるが、そこで主語・私が対象語・子どもに対する考え方を推測のムード(だろう)で表し、「どうせ」を加えてもともとの叙述内容「いってもわからない」に意味を重ね、話し手の立場が出来たのである。では、「どうせ+だろう」構文で出来た文の場合において「どうせ」がどういう役割を果たしているのかということ、まず「だろう」の性質を考えなくてはならない。

(31) 放課後、ゼミの教室に行った香子は、今まで大宮がやっていた責任者の仕事を、明石が代行しているのを見て、おやっと思った。

明石は、いきいきとして、リーダーシップを発揮している。

しかし、どうせ、大宮が卒業してしまったら、彼が責任者になるだろうと思っていたので、そのために、明石が、大宮を殺したりする筈はないと思った。(山村 美紗『紫式部殺人事件』)

例 (31) の「どうせ+だろう」構文を見てみよう。ここでは「どうせ」の位置が移動されても文の意味に影響を与えないと思われるので、「大宮が卒業してしまったら、どうせ彼が責任者になるだろうと思っていた」と捉えて説明する。前例と比べて、こういう構文において「だろう」の前に来る述部の内容、つまり「いってもわからない」と「責任者になる」から見ると、述語と「だろう」の帯びる属性がかなりニュートラルであることが難なく受け入れられよう。肯定であろうと否定であろうと、プラスであろうとマイナスであろうと、結びつく内容自体は通用しているわけである。しかし、「だろう」がニュートラルな性質を帯びるにもかかわらず、例文を読めば何らかな中立的でないニュアンスが感じられる。その理由はどこにあるのか。

(32) 松島の町の中を通り抜けて天竜川の橋の上に出たとき、彼は天竜川の水がいつになく濁っているのに気がついた。降雨があったのは一昨日である。上流からの濁り水が入りこんだとしても、もう澄んでいい頃であった。上流で工事でもしているのだろうか。そんなことを考えながら通りすぎようとしたとき、橋の向うからやって来る小沢銀兵衛の姿を見かけた。銀兵衛は親戚の一人で春子との結婚に強く反対している一人であった。まずいなど思ったが逃げ出すわけにも行かなかった。

「どうせ、この近くに隠れているだろうと思っていた。だがね裕一さんよ、もう隠れおおせることはできないぞ」

と銀兵衛は裕一の目の前に来て云った。裕一には銀兵衛の強い口臭が毒気のように感じられた。(新田 次郎『聖職の碑』)

例 (32) をもって「どうせ+だろう」構文のより詳しい説明をしよう。例 (32) では、裕一が不意に銀兵衛に会ってしまい、会うつもりがなかった相手が自分の姿を見かけ話しかけてきた。思考内容としての「どうせ、この近くに隠れて

いるだろう」一文を通して見よう。この例には同じく「この近くに隠れている」というニュートラルな述部の内容があり、文全体の構成も簡潔である。さて、「どうせ」はどういう役割を果たすかという疑問を解くために、「どうせ」の含んだ場合をそれを取り除いた場合と比較する必要がある。

(32A) この近くに隠れているだろうと思っていた。

(32B) どうせ、この近くに隠れているだろうと思っていた。

例(32A)と(32B)は元来の例(32)を一部だけ切り取ったものである。例(32A)は単なる「だろう＋と思う」構文のものであり、例(32B)は例(32A)に「どうせ」を付け加えたものである。では、上の(32A)(32B)には何の違いがあるかということ、「どうせ」の一語が関与するかしないかということによって意味の行方が違ってくる。具体的に言えば、二つのセンテンスの差異が<単なる推測>と<推測というより確信に近い判断>という心理面から来たのだと思われる。例(32A)の場合、話し手(銀兵衛)は主語(裕一)が近くに隠れている可能性が高いと推測しただけで、この事態に対する気持ちがほとんど察知されない。それに対して、例(32B)の場合はその可能性をいっそう高く感じさせるのみならず、その文を見ると自然に<また後ろに何の話が来る>ような期待感が生じられる。例えば「捜せばすぐ見つかるに違いない」のような話が待たれるのではないと思われる。この場合ならば、「だろう」のムードとしての意味が薄くなり、ほぼ断定の「だ」と捉えられても差し支えないであろう。というわけで、なぜ文中の銀兵衛が「どうせ」を言い出したのか、理由がすでにあつたのではないか。それは、話し手の銀兵衛がすでに裕一が「この近くに隠れている」という事態が必然的だと想定していたため周りを捜し回ることになり、そして最後に見つかったのであろう。

それ以外に、「どうせ」の特性がもう一つ伺える。前に述べたように、上掲の3例は述部の性質が中立的であることがわかった。しかし文全体の意味を吟味したら、中立的でないニュアンスが汲み取れる。述部自体が中立的であつたら、文の意味を左右したものが「どうせ」であるとしか考えられない。「どうせ、いってもわからないだろう」「どうせ、大宮が卒業してしまつたら、彼が責任者になるだろう」「どうせ、この近くに隠れているだろう」いずれもニュートラルな

述部がついているものの、文脈から見るとマイナス的に捉えられてしまう。ということは、個別の事態をマイナス的な雰囲気をもって包み込んだのが「どうせ」であると考えられる。こうした「どうせ」の特性を「マイナス性付与」と命名する。

では、「どうせ」のこの「マイナス性付与」という特性はニュートラルな述部と共起する場合に限って出現するのかというと、そうでもない。ニュートラルな述部の場合以外にも、「どうせ」はその特性を帯びている。

次の3例を見ていこう。

- (33) 社内ではおとなしくせに、取引先に行くと、自分をやたらと大きく見せようとする人がいる。商談を自分のペースで進めようという肚なのかもしれないが、聞いているほうが恥ずかしくなってくる。

「そのプロジェクトも私が担当しました」「今度、アメリカ支社から、ぜひ来てくれと誘われているのですが…」などと、得々と自慢するのは相手の反発を招くだけである。たとえ、それがある程度本当のことであっても、相手は感心するどころか、「どうせ、話の半分は脚色だろう」と思うだけだ。

(堀場 雅夫『仕事ができる人できない人』)

- (34) 母の部屋は最上階の四階である以外、なんの取り柄もなかった。部屋に入った里美はまず公園に面している窓を開けた。六畳間は厚手のじゅうたんで敷きつめられている。

「どうせがらくたばかりだろうよ、適当に始末しておいで」

祖母がいうように、母は驚くほど粗末な住居に寝起きしていた。(和田 はつ子『密通』)

- (21) 「年上の女にそういうよけいな気を遣われるのは、男の側からすればただ情けないだけで、むしろ侮辱以外の何ものでもないって、そう言ってやったよ。一応、経験者としてさ。ま、どうせこれもよけいなお世話だろうけど？」

ぶすっと黙りこくっている俺を面白そうに横目で見ながら、一本槍はまたひとくち酒を飲んだ。(村山 由佳『天使の梯子』)

例 (33) (34) (21) においては叙述自体がいずれもマイナス的に認められる内容のものである。ニュートラルかプラスかマイナスか認定する際、単に動詞述語を見るだけでは見当がつかなくなってしまうため、文脈と述部を通して全般的に見るほうがいっそう話し手の発話意図、語意がはっきりする。「話の半分は脚色」「がらくたばかり」「これもよけいなお世話だった」という三つの叙述内容から見て、それぞれ「脚色」「がらくた」「よけいな」という言葉が文中に据わり、〈必要のない・余った事物〉を中心意味として文の方向に影響を及ぼしている。こうして叙述内容のみの意味がマイナス方向へ傾いてくるが、傾く具合を査定しようとして元来の文例を振り返って見れば、「どうせ」のつくもとの文例が帯びるマイナス性は叙述内容よりもかなり程度が上がってくるように感じ取れる。しかもそのマイナス程度を意味に転化させて読み取るとしたら、〈大したこと・ものとしなくて軽く見る〉という意味が出来る。対象によっていわゆる「軽視・余計・放棄」などの意味を「どうせ」が発散するといえるであろう。上掲二つの意味的特徴は「どうせ」について思考する際に見逃してはならないところだと思われる。

ちなみに、収集した例文の中に「どうせ+のだろう」構文も存在するが、次の例 (35) のようである。

(35) 涼子先輩と真知子は僕らから離れて、何となく気まずそうに岩に腰を下ろしていた。

「鴫田君も、まだなんかよ」

一瞬答えを選ぶようにして、鴫田君は猥褻な感じのする唇を歪めた。

「へっへっ。これからだよオ。ほんとはおめえの車みつけたんじゃないんだ。ここでちょっとムードを高めてから江の島のホテルにと思ってたら、おめえらがいた」

だとすると、これは偶然であろうか。いや、やっぱり必然だと僕は思い直した。

「どうせおめえらもこれから行くんだろ。だったら車並べてこうぜ」

「いやだよ。何でそっちと一緒にホテルに入んなきゃならねえの。こっぴどかしい」(浅田 次郎『霞町物語』)

例(35)は「のだ+だろう」という、基本的には「どうせ+だろう」構文と似通っている組合でしかないと見て、何か相違点があるかと強いて言えば、「～のだ」の含意が関与するゆえ、話し手の表明した事態がさらに確定しているような気がする。こうした場合、「どうせ+だろう」構文の働きがほぼ同様なので、本節では特別に「どうせ+のだろう」という項目を立てて論ずるのにしないことを断っておきたい。

2.4.3.2 「～のだ」

続いて「どうせ+のだ」構文を調べてみよう。ムードに関する例文の中で最も多かったのがこの種の構文形式である。森本(1994)の指摘には、「どうせ」は「文脈中で、理由・原因、または根拠として働く文の中に現れる傾向が非常に強い」とあって、実際「～のだ」構文は周知の通り、<理由についての説明>が主な役割であるとされているので、森本の指摘は例文の数の割合と呼応しているようである。だが意外にも、森本であったり杉本であったり小矢野であったり、「どうせ」の含んだ文中に理由・根拠の意味が如何に顕著であることを再三言及したものの、この「どうせ+のだ」という極めて目立つ組合について特に取り立てて論じることはなかったのである。故に、本稿では一大項目として取り上げることにする。

(36) 「どうした、立てないかね」

その前へしゃがみこんで、左久馬はやさしく娘の肩へ手をおく。

「いいんです、あたし、どうせ、あたしは金貸し座頭の娘なんです」

その肩の手を振り切るようにして、お沢は意地悪くぽつんといった。恐らくこの娘は今まで、誰からも他人にやさしい言葉をかけられたことがないのだろう。

「そうか。そんなことを気にしているのか」

「気になんかしちゃいけません、気にしたってしょうがありません」

「うむ、しょうがないことは、気にしない方がいいんだ」(山手 樹一郎『三郎兵衛の恋』)

(37) 「—おい、もう少しビール、あるか？」

と、圭介が顔を出し、「何だ、郁子も逃げて来たのか」

「逃げたんじゃないわ、飲みものがほしかっただけ」

と言り返すと、和代が、

「逃げたくもなりますよね。男の人たちは飲んでばかり」

「いいから、何本か持って来てくれよ」

「はい、すぐに」

圭介は、少し足もとも危なっかしい感じで戻って行く。

「—郁子さん、もう寝た方が。どうせあの人たち、夜中まで飲むんですよ」(赤川 次郎『怪談人恋坂』)

(38) それはなぜ集諦というかという、ものごとを物質的に考えるからです。この世の中は物質的なものの集まりです。原子とか、分子とか、そういう細かい微粒子の集まりででき上がっています。原因・結果の関係の集積に縛られているのです。だから人間が良心的に一生懸命に努力することよりも、現実がどうなっていて、どういうことしかできないかという、現実そのものをよく見るという点では優れているけれども、人間の努力というものにあまり信頼を置かない、どうせなるようにしかならないんだという考え方があります。これも世の中に非常に盛んに行われている考え方です。(西嶋 和夫『自宅でできる坐禅の心得』)

上掲3例は「どうせ+のだ」構文の文例であるが、まず述部の性格を見てみよう。「あたしは金貸し座頭の娘」「あの人たち、夜中まで飲む」「なるようにしかならない」といった三つの文が会話文2例、平叙文1例でありながら、程度が多少違うにもかかわらずマイナス傾向を帯びるという共通性が察知される。例(36)では左久馬がお沢という女の子に気を遣ったとき返された一言であるが、女の子は自分の身分が嫌われると思ったか、もしくは自分自身がその身分の持ち主であることを嫌ったからその言葉を出したのであろう。しかも、後に来る文脈の中に「意地悪く」という言葉が「肩の手を振り切るように」する動きとともに出たことに目が引かれる。人間がこういうボディランゲージを繰

り出すということは、一般的に言えば<ある状況に対する拒否・嫌悪>という意味が読み取れるが、ここではまさにその通りである。こうしたマイナス的な事態に対して「どうせ+のだ」構文が現れて文全体にどういう働きをもたらしたのか、同じく「どうせ」の有無を通じて見ていこう。

(36A) いいんです、あたし、どうせ、あたしは金貸し座頭の娘なんです。

(36B) いいんです、あたし、あたしは金貸し座頭の娘なんです。

前者(36A)は元来の文例からそのままカットしたものであるに対し、後者(36B)は「どうせ」を取り除いたものである。左久馬の手を振り切るようにしながら言う場面ならば、それぞれどういう意味が伝わるのか。まずは例(36A)である。この場合は前節における考察と同様に、マイナス的な述部内容が「どうせ」の増幅するような働きを通してさらにマイナス性を強化させた文意が得られる。しかもこの例では話し手・お沢がマイナス的な考えを当てる相手が誰でもなく自分自身のことなので、前掲した「どうせ」の持つ「軽視・余計・放棄」といった意味の中で、特に「放棄」(ここでは、つまり自暴自棄)の意味が鮮明に感じられる。一方、例(36B)の場合はただの「~のだ」構文であるから、自分の素振りについて理由・説明を付け加えるために言い出した言葉だということがわかるものの、説明以外には別に何かの文意が共存しているような読みが成り立たないと思われる。「あたしは金貸し座頭の娘なんだから(気を配ってくれるのは)いいんです」と率直に順序を変えて理解することができる。しかし理由は説明しているものの、「自暴自棄」のような意味合いはあまり含有していない、たとえ含有するとしても微弱でしか言えないと思われる。よりはっきりした結論が得られるように、次の例をも検討していく。

(37A) 一郁子さん、もう寝た方が。どうせあの人たち、夜中まで飲むんですよ。

(37B) 一郁子さん、もう寝た方が。あの人たち、夜中まで飲むんですよ。

(38A) 人間の努力というものにあまり信頼を置かない、どうせなるようにしかならないんだという考え方があります。

(38B) 人間の努力というものにあまり信頼を置かない、なるようにしかならな

いんだという考え方があります。

例(37)の和代が話したものを例(37A)と(37B)に、例(38)の話し手の発話内容を例(38A)と(38B)に抽出した。こうして比較しながら見れば、前掲した(36A)(36B)の相違と同じように捉えることができよう。「どうせあの人たち、夜中まで飲むんです(からやめさせようとしても無駄です)。もう寝た方が(いいです)」「どうせあの人たち、夜中まで飲むんです(からアル中の奴らをほっといて)。もう寝た方が(いいです)」などのような文を作っても意味に抵抗がないであろう。すなわちここで、話し手は「どうせ」によって「余計・軽視」の気持ちをあらわにしている。しかしながら「どうせ」の関与しない(37B)にはこういう傾向が見られず、ただ和代が「あの人たち」の夜中まで飲むことを知って郁子に告知しているだけの文意が伝達されるのである。この会話の文脈から見ては特に支障はないが、例(38B)の場合であったら、文のつながりややおかしくなるようである。もとの例文の文脈が人間の努力について考え方を列挙するもので、「(努力があってもなくても物事は)なるようにしかならないんだ」という意味を表現しようとしていると捉えることができる。が、ここでは主語が省略されたため、「どうせ」を取り除いたら文がなんとなく不安定になるように思われる。言い換えると、話の受け手が「どうせ」をヒントにある想定された事態の存在を察知でき、それを通じて「余計」の気持ちが伝達されるのである。ということは、「どうせ」という一言だけでも、受け手が直ちに「ある事態の存在」及び「話し手のマイナス的情緒」を感知することができる、つまり一文として単独で現れる場合もコミュニケーションの意味が伝達できると思われる。また、「どうせ」はある一定の道理・現象を述べる場面と共起しやすいと帰結できるであろう。

次に述部内容がニュートラルである場合を見てみよう。

(39) 「—じゃ、お先に」

とは言ったものの、聞こえたかどうか。

どうだっていい。どうせ、言った方も、ほとんど無意識に口から言葉が出ただけのことなのだ。

井川久司が、がっくりと肩を落とし、エレベーターのボタンを押して待

っていると、

「おい、井川」

と同僚が顔を出した。「電話だぞ。どうする？」

井川はため息をついた。(赤川 次郎『三毛猫ホームズと愛の花束』)

例 (39) のニュートラルな場合、話し手の井川が相手に挨拶をしたものの、返事がなかったから「聞こえたかどうか」という思いがまず浮かんだが、あくまでも自分が「ほとんど無意識に口から言葉が出ただけのこと」なので、気にすることは「余計」であると話し手は思っているであろう。

(22) 「実験してみよう」

と黒沼健一が言った。

「どうするの」

「方程式を黒板に書くんだよ」

「死んじゃうぞ」

「どうせ、きのうあの方程式を知っちゃったんだよ。だから、死ぬんだとしたら今書いても書かなくても同じことだ。いっそのこと方程式を書いて、その秘密を知ったほうがいい」

そう言うと健一は、黒板の前へ行き、チョークを手にとった。

チョークで、黒板に書きつけていく。(清水 義範『ゴミの定理』)

(40) 彼女がやってきたのは九時五分前だった。

「ごめんなさい」と彼女は早口で謝った。「仕事のがびちゃったんです。急にたてこんだうえにかわりの人の来るのが遅れたもので」

「僕のことならかまわないよ。気にしなくていい」と僕は言った。「どうせどこかで時間を潰さなくちゃならなかったんだ」(村上 春樹『ダンス・ダンス・ダンス』)

(41) 黒人の活躍は多方面にわたる。まず音楽。サンバ、ルンバ、ボサノバ、チャチャチャ、マンボなどラテンのリズムを作り出し、カーニバルで主役を演ずるのも彼らである。アメリカの黒人はジャズを世に出し世界中に広

めた。ブラジルの伝統的食べものフェイジョアーダも、どれい時代の日常生活の知恵から生まれた。スポーツ界でも顕著だ。プロサッカーの選手に至っては半分以上に彼らの血が通っている。

半面、下層階級や犯罪者の多くが黒人ということも事実である。どうせ自分たちの祖先はどれいで卑しい身分だったのだ、という諦観からくるのか。それとも民族特有の価値観の差異によるものか。(日下野 良武『ボンディーア』)

(42) 車に戻ると、婦人警官がチョークでタイヤに印をつけているところだった。私は靴の底で擦ってそれを消し、車に乗りこんだ。車内は蒸暑く、窓を全開にしても、それは収まらなかった。

宵の口の渋滞の中を、広尾のマンションまで行った。私の住居兼事務所は恵比寿で、どうせ通り道だったのだ。(北方 謙三『罅・街の詩』)

最後に、過去形との共起状況を見よう。(22) (40) (41) (42) は「どうせ＋過去形＋のだ」構文の例であるが、こういう組み合わせがわずか四例にとどまる。もし「どうせ＋過去形のみ」という組み合わせより多いという点から考えるとしたら、森本(1994)の指摘が納得されるかもしれない。しかし、「どうせ」文全体という広い視点から俯瞰するとしたら、極めてまれなことを認めざるを得ないであろう。すなわち、「どうせ＋のだ」構文の場合、非過去形が最も適用されているものであるといえよう。

以上をまとめることにする。「どうせ＋のだ」構文の場合、述部に現れうる属性はマイナス・ニュートラルの二種類がある。その中、マイナス述部の場合、主語が話し手そのものであれば「放棄」(ここでは自暴自棄に等しい)、主語が話し手でなく他人であれば「軽視・余計」の意味を表すことになる。一方ニュートラル述語の場合、主語が他人・他物であれば「余計」の意味をほのめかすことになる。また述部のテンスに関しては、やはり非過去形が一般に使われることがわかる。

2.4.3.3 「～にちがいない」

次に検討する「～にちがいない」と「～にきまっている」の場合は、他のモード表現に比べると、主観性のニュアンスという側面から言うならば「どうせ」との相性が最もよさそうかもしれないが、実際例文の数が少ない。小矢野(2000)では上記二項目の述語形式が言及されたものの、氏の論はもっぱら述語内容を列挙して見せたままで、深く踏み入れることはしなかった。筆者の考えでは、その両表現の有する共通点が＜事態がすでに話し手の心の中で動じない現実となっている・見なしている＞というところにある。客観的ではないので、そのまま真の結論だと捉えることはできず、発話後は誰かに反論されてしまうこともあり得るが、それをともかくとして、話し手の脳中では発話時からその考えを＜永久的に決めつけている＞姿勢が見られる。以下をもって二通りの例を掲示しながら論を進めていく。

(43) 「去る者は去り、残る者は残った。これでさっぱりしたわい」又兵衛は言い放った。「あしたになれば、さて、この半分かのう」

伊織はどきっとした。(おらのことさ言うてんだべか。…伊織め、鉄砲磨きば二十年、さぞ、お屋形さまに憾みば抱いておろう。まんだ立たねえのは妙げだ、どうせあしたになればあの小者はすたこら逃げるに違えねえ。と、又兵衛どのは思っておるんだべ。…まっこと凶星じゃが、はあ、どうすればいいかのう、よき) (山本 音也『あの世この世の軍立ち』)

(11) 私はモンテクリストとロス・スタートスを二本ずつ買い、ロス・スタートスを一本ブラインド・フェブリーにやった。どうせ、昼寝のあとの一杯のビールを私に奢らせようと、ここで待っていたにちがいないのだ。(北方 謙三『いつか光は匂いて』)

(44) 犬のことを思って、アイリスの心が大きく揺さぶられた。高齢の両親は、どうせもうろくしているに違いない。ショックを受ければおそらくどちらでも死んでしまうだろう。ふたりは深く慈しみ合っているか、互いの存在に慣れすぎているかで、ひとりきりでは生きていけないだろうから。そうならば、田舎の家に取り残され、おなかをすかせた犬はどうなる？ (近藤 三峰『バルカン超特急』)

- (45) 『小児出産後命名の件承知致候（略）名前も考へると無づかしきものに候へどもどうせいゝ加減の記号故簡略にて分りやすく間違のなき様な名をつければよろしく候今度の小児男児なれば（略）親が留守だから家の留守居をする即ち門を衛ると云ふので衛門杯は少々酒落て居るがどうだね門を衛るでは犬の様で厭なら御止し己と御前の中に出来た子だからどうせ無口な奴に違ひないから夏目黙杯は乙だらう夫とも子供の名前丈でも金持然としたければ夏目富がよからう但し親が金之助でも此通り貧乏だからあたらない事は受合だ』（村田 有『漱石犬張子』）

「どうせ+にちがいない」構文の数が調べたところ4例しかなく極めて少ないため、この種の構文について詳しい情報を求めるまではできないかもしれないが、限った例文から大概の傾向が見られる。述部内容はそれぞれ「あしたになればあの小者はすたこら逃げる」「昼寝のあとの一杯のビールを私に奢らせようと、ここで待っていた」「もうろくしている」「無口な奴」である。従属節にも主節にも現れる場合はあるが、「どうせ」が修飾する部分に大別はない。その中で(43)と(11)はマイナス的な、(44)と(45)はニュートラルな表現である。(43)の場合は話し手の思考を文字にした内容であり、話し手がくある者は逃げるという決定をする>ことが必至だと思い、この必至の事態に対して主観的態度を下したのである。(11)の場合も同様に、ブラインド・フェブリーという人の行動に対して<自分におごってもらうのが狙いで早くからここで待っていた>という予想を確信の態度をとって断定したのである。

(44)「もうろく」と(45)「無口」の属性について疑いたくなるかもしれないが、二つの単語自体の根源的な意識がただ人間のある状態を描写するものに過ぎないと思われるゆえ、属性がニュートラルであると認定する。この種の構文形式においては、いずれも「どうせ」によってマイナスの意味が汲み取れるが、わりと属性がそのままニュートラルを保っているかのように、マイナス性は付与されているものの、他と比べて「軽視」という含意がかなり弱化したのではないかと思われる。この場合、「マイナス性付与」よりも、むしろ「既定性」のほうがフォーカスなのであろう。

以上を通して「どうせ+にちがいない」構文の特徴についていえば、マイナ

ス述部であれば「軽視」を意味するが、ニュートラル述部の場合、「既定性」の重要さが増し「軽視」の意味が薄くなる、ということがわかる。

2.4.3.4 「～にきまっている」

次は「どうせ+にきまっている」構文である。そもそもの含意をさかのぼるには、元来の「決まる」である単語の意味を通して見ればすぐにわかる。大辞林によると、「結果・結論が出て、変わらない状態になる」「いつも変わらないでいる。一定している」⁹との定義がある。すなわち話し手は、ある事態が一定な結果をもたらすと判断する際使われるムード表現であろう。上掲の「～にちがいない」とは近似の表現と言ってよかろう。

- (46) バイトに応募した僕に社長は、
「ニーズに応え、欲しい人へ、欲しいモノを提供する、現代ならではのスキマ産業です」
なんて胸を張ったけど、まあ立派な犯罪会社。しかも万一、おカミが目をつけても、つかまる現場はすべて高校生という頭のよさ。
レンタルオフィスの契約も、どうせすべては偽名で嘘の住所と電話番号で交されているに決まっている。早い話、“悪人の、悪人による、悪人のため”産業。(大沢 在昌『帰ってきたアルバイト探偵』)

- (47) 第一回留学生の選考においては、多分に本人達の自薦に左右されたきらいがあった。これに対する批判は当然あったであろうし、文部省としても再びこうしたことを繰り返すわけにはいかない。それが「全国に布告を出して希望者を募った」理由であろう。結局「一人のその撰に挙る者なし」というのが、希望者が一人もなかったのか、選考の結果全員失格ということになったのかはわからないが、いずれにせよ開成学校の生徒は別枠とされていたわけで、おそらくは「どうせあの連中から選ばれるにきまっている」という評判もあり、応募者がきわめて少なかったか、あるいは本当に

⁹ 大辞林第二版による「決まる」の検索結果の内容である。

一人もいなかったことさえあまり無理なく推測されそうである。(穂積 重行『明治一法学者の出発』)

- (48) 解剖室から出て以来、早瀬はくり返し解剖所見のコピーをめくっていた。どうせあの空っぽの脳について小難しいことを考えているに決まっている。飛鷹は無理矢理自分を納得させようとしていた。脳がからっぽだろうがなんだろうが、千鶴が犯人だという事実は永久に変わるもんか。へ理屈こねたってどうしようもない事実なんだ。性格が異常でも木村が被害者なのと同じじゃないかー。(飯田 譲治/梓 河人『アナザヘヴン』)

「どうせ+にきまっている」構文は前項の「～にちがいない」よりやや多く見られた。とはいえ、数からいえばさすがに少数のほうに属することになる。さて、その述部内容の様子を見てみよう。例(46)から(51)にかけて「すべては偽名で嘘の住所と電話番号で交されている」「あの連中から選ばれる」「あの空っぽの脳について小難しいことを考えている」「霊安室へ遊びにいった、留守」「後継者は教授師の神秀」「また終ってから呑みに行く」などの述部内容にはマイナスなものからニュートラルなものまで並んである。(46)(47)(48)はそれぞれ「偽名、嘘」「連中」「小難しい」の語によってマイナス的に判定されるが、この場合では「軽視・余計」の気持ちが含んでいる。

- (49) 菊乃はゆうべとおなじように、《今夜、電気が消エテカラ、マタ参リマス》と囁いて、ヴェランダから小走りに消えた。また、みいちゃんに邪魔されなければいいがー。そこで夢二は面白いことを考えた。今夜訪ねてくる菊乃を、戸外へ連れ出すというのはどうだろう。夏も終わりの星の下で、病身の女を抱くというのも、なかなかの趣向ではなかろうか。切ない女の吐息に、草叢の虫たちは啼く声を潜め、夜半の月も棚引く雲の蔭に隠れ、看護婦たちも深夜の巡回を忘れるかもしれない。夜露で風邪を引くというのなら、みいちゃんの水車小屋だっていい。ゴットンゴットンという水車の音に合わせて、上になったり下になったりするの、さぞ楽しいだろう。だいぶ以前から、米搗きには使われていないというから、小屋には誰もいないだろうし、みいちゃんはどうせ霊安室へ遊びにいった、留守に決まっ

ている。夢二は自分の思いつきに、ニヤリと笑った。(久世 光彦『へのへの夢二』)

- (50) 弘忍の寺は、けっこう、はやっていて、七百人ぐらい(五百人説、千人以上説あり)の弟子がいたと言われていますが、そのなかの上座として、神秀(六〇六一七〇六)という人がいました。上座とは、筆頭の弟子、師範代のようなものです。神秀は非常な秀才で、十分に教学も修めており、五十代の、人格的にも立派な人だったので、「この人が跡継ぎだろう」という予想で、衆目は一致していました。

ただ、五祖の弘忍は、「このまま神秀に跡を譲るわけにもいかない。いちおう、何か試験をしなければいけないだろう」と思い、「さあ、だれか、自分の悟りを発表してみよ。自分の悟りを偈に書いて、張り出してみよ」と言ったのです。偈とは詩のようなものです。

ところが、弟子たちは、「どうせ後継者は教授師の神秀に決まっているから、わざわざ自分の悟りを発表したところで邪魔になるだけであり、その必要もないだろう」と考えて、だれも発表しなかったのです。(大川 隆法『大悟の法』)

- (51) 牧口の論文が載っている紀要のバックナンバー四冊を同封し、印刷を依頼する番場への手紙を書きながら唯野は溜息をついた。あさって金曜日は立智大学の「文芸批評論」だ。明日は会議にあてられた日で、どうせまた終ってから呑みに行くにきまっている。今から準備しとかなくちやなあ。次は「解釈学」なのだ。難解極まりないハイデガーを、グルメ・ブームのまっただ中、脳味噌がフォアグラになった学生どもにわかるよう喋らなければならない。ちえ。厄介だなあ。(筒井 康隆『文学部唯野教授』)

それに対し、(49) (50) (51) の述部「留守」「教授師の神秀」「呑みに行く」はプラスとマイナスのどちらにも属しないと見て、ニュートラルであると判定する。が、こちらの場合でも同様に「軽視・余計」の意味が伺われる。この点において、「どうせ+にちがいない」構文とは一様ではない。

小矢野(2000)は集められた例について「ほとんどすべてマイナス評価を帯

びた内容」との一言だけ残したものの、筆者は実際ここでニュートラルな場合も存在することをはっきりさせた。本稿にて集められたこの種の例文で言うとマイナス的なものが11例に8例も存在するため、「どうせ+にきまっている」構文の場合、述部内容はマイナスのほうに優勢を握っていることが理解される。だが割合から見て、ニュートラルのほうも着実に存在するのも無視してはならないところであろう。

上の両構文形式はともに「どうせ」との共起性が弱いと見てもよからうが、「どうせ+にきまっている」の組合が多数を占め「どうせ+にちがいない」のが多用されない原因はどこにあるのか。

では、前述してある基本的定義の視角から延ばして比較してみよう。「～にきまっている」の「決まる」の定義とは「結果・結論が出て、変わらない状態になる」「いつも変わらないでいる。一定している」また「～にきまっている」の形で、きっと…する、必ず…になるという、話し手の確信・判断を表す¹⁰などの解釈に対し、「～にちがいない」は<違うことがない>という意味で、「違う」の定義とは「二つの事物が一致しない。異なる。差がある」「それとは別のものである。異なったものである」「正常な状態からずれる」¹¹ことであり、「～にちがいない」はそれらの定義の反面意味を表す。すなわち<相違や誤りが無い>に重きを置いているのである。こうして眼前の事態について話し手の予想がともに確信の判断を伴うため、意味的には両者が一致すると認めてもよからう。ただし「～にちがいない」は普通、書面的言葉に使われるのに対し、「～にきまっている」は盛んに会話の中で姿を現すため、使用場面からいえば、さすがに「～にきまっている」のほうに「どうせ」の出現する条件に近づいているのである。

相違点以外に、両者にも共通点がある。それは話題の当事態が<必ず思うようになる>という潜在的意味をほのめかすところである。「～にちがいない」「～にきまっている」の出現する文は<必然的に（一定的に）起こる事態だと判断する>という含意を抱えている。こうした必然性（一定性）が「どうせ」の持つ「既定性」と相応じて文の主観的想定がいつそう向上したと考えられる。

¹⁰ 大辞林第二版「決まる」の項を参照したものである。

¹¹ 大辞林第二版「違う」の項を参照したものである。

2.4.3.5 「～てしまう」

ムード表現のうち、動作の終了・完成、もしくは事態の不本意な・好ましくない展開を意味する補助動詞「～てしまう」と副詞「どうせ」の共起状況を見てみよう。

- (52) さて、いっぱんに、精神の障害で識別力をうしなった状態を、心神喪失とよぶ。そして、その心神喪失者には、法律上の責任が追及できないことになっている。もちろん、刑事責任も問えない。この点は、島津ハルらの事件当時も、今とまったく同じである。

彼女らが、心神喪失の状態にあったとすれば、不起訴処分もじゅうぶんありうる。どうせ、訴訟へもちこんでも、無罪になってしまうのである。検察側が、裁判をあきらめたとしても無理はない。(井上 章一『狂気と王権』)

- (53) 左の頬に、鋭い爪で引っかいた傷跡があった。

「片山さん。あの子は出かけていて、帰っていません」と、涼子は言った。「あの子が帰らない内に私を連行して下さい」ホームズがストンと床へ下りる。

「いや。涼子さん。ちゃんと帰っているんでしょう、聖人さんは。しかも、左の頬に同じ傷跡をつけて」

「何ですって？」

「あなたもわざと同じ傷をつけたんですね。むだなことですよ。どうせ分ってしまう」

「あの子じゃありません！ やったのは私です！」(赤川 次郎『三毛猫ホームズの世紀末』)

- (54) 「長官が位をあげられたので、休みは二日間かもしれない」

「馬鹿、二日間の休みなど、わしがここに来てからあったためしがない」逆が釘をさし、国人を見た。「国人、衛士には気をつけろ」

「どうしてですか」

「これは聞いた話だが、悪い衛士に、泥棒の片棒を担がされることがある。衛士が扉を開けておいて、人足に忍び込ませて物を盗り、あとで上前をはねるといふ手口だ。どうせ最後には口封じのために斬られてしまう」

「そんな人たちには思えません」(帯木 蓬生『国銅』)

- (55) B工業の阿部社長は、朝六時に出社して、自分で工場の生産を指図します。(中略)

そればかりか、部下の作成した請求書の単価を勝手に訂正したり、部下が開拓した得意先や外注先に自分が出て行って取引関係をこわしてしまったり、部下の立場が悪くなるようなことを平気でやってしまうのです。それでも「オレがやらなければ」と言い続けています。部下は「いくらがんばっても、どうせ社長が勝手にやってしまうから」と全員構えて仕事をすることになってしまいました。(原田 繁男『社長が辞めればうまくいく!』)

- (56) 近藤はユンちゃんがあげてくれた缶詰の桃を美味しそうに食べた。ナウさんが彼の背中をさすっている。

「パパ、オイシイ？」とユンちゃん。

「オイシイ、ユンちゃんがあげてくれた缶詰は、とつても、おいしいよ」
近藤は食べながらも時に、頭を二三度激しく振る。痛そうではない。

「もういい」一切れほど食べた程度で近藤は桃の皿をユンちゃんに押し戻した。

「どうせ、すでに吐き出しちゃうんだから」近藤は捨てばちに言った。(吉川 精一『月曜日のカーネーション』)

限られた例文について調査した結果、「どうせ+てしまう」構文はほとんど非過去形の場合で出現している。例(52)から(56)までは「訴訟へもちこんでも、無罪になる」「分る」「最後には口封じのために斬られる」「社長が勝手にやる」「すでに吐き出す」などが述部内容であり、いずれも「~てしまう」のマイナス・ミーニングである不本意・望ましくない心情・遺憾・不満などといった話し手の情緒を表す意味として述べられている。動詞述語がマイナス的なもの

であってもニュートラルなものであっても、それにかかわらず文意味が「～てしまう」によって確実にマイナス方向へ展開している。この場合「どうせ」の担う働きは、<前もってどのように力を尽くしても最後の結果を変えることができず、全部余計な努力になる>という思いのもとに「余計」の意味を加え、「～てしまう」文の示すマイナス性をさらに上昇させていくことであると思われる。

過去形の場合もあるが、例示するなら「どうせ数年も待たずに、すべてが消えてしまったらうに」のように、あるいは「どうせ、きのうあの方程式を知っちゃったんだよ」のように、その後ろに「～だろう」や「～のだ」など他のムード表現がついた場合に限って現れるらしい。この点においてはテンスの節で考察した結果と呼応していると思われる。

2.4.4 共起成分

これまでの各節において「どうせ」の構文的特徴を多面にわたって見てきた。本節においてはそれ以外の、「どうせ」と共起する他の成分を考察することを目指す。前節においても触れたが、副詞の修飾できる品詞が多く、いろいろな状況の中で現れ、あらゆる文構成の場合が観察されるので、もっぱら単一の述語、例えば動詞述語のみに焦点を絞って見ることにしたら、混乱を起こしたり結論づけることに困難を招いたりしてしまう恐れがある。そのため、本節では第一に、基本的共起成分—述語の部分について調べておく。続いては、共起成分の枠を広め、単独の一述語—述語から文単位へ視点を伸ばし、二段階をもって論を進めていくことにする。

2.4.4.1 基本的成分

ここでの基本的共起成分といえは、副詞「どうせ」の使われる文の中に出現する各種の述語が目論みである。広範囲に述語を全面的に例示するために、集まった例から抜粋して「どうせ」文のみ残した形で分析を試みる。どのような述語がよく「どうせ」と共起するのか、下に分類を整理して示す。

名詞:「どうせ…っ、俺はガキだよ!」「どうせ、あしたは日曜日で休みやし」「どうせ、あたしは鬼ですよ」「どうせ、あのエイビスのオヤジのチェーンである」「どうせ、お母さんはバカですよ」「どうせ、そのへんの『守銭奴』のじじいで」「目の下なんかどうせ、マスカラが流れて真っ黒よ」「どうせ、店はおしまいだし」「どうせ、捨てられた子どもだ」「どうせ、死ぬまでの糧をうるだけの芸だ」「どうせ、死んじまえば、土ン中だ」「どうせ、祖国の復興なんてのは私には無理な話だものね」「どうせ、貴様とは喧嘩だ」「どうせ、長崎奉行から狙われておる伽羅じゃ」「どうせあんたみたいな独身者は万年床だし」「どうせいつかは死ぬる身だ」「どうせおかしな連中ばかり」「どうせお袋、夜中だよ」「どうせこけおどしのはったりだ」「どうせどこへ行ったところで日本の中さ」「どうせつまらない原因から、勤め帰りのひとでいっぱいの中車でけんかを始めるとは、非常識ではないか」

まずは名詞述語の場合である。この分類に姿を現すものの中、例えば見下ろしたり罵ったりする語（ガキ・鬼・バカ・じじい・連中・万年床）、または好ましくない行為や結果を指す語（おしまい・はったり・喧嘩）があり、それらの言葉そのものがマイナス的に感じられ、意味的特性があって「どうせ」につながるやすい。それ以外、一般的名詞のものもある。この場合、連体修飾が大きな役目を果たすことになる。例えば「無理な話」「つまらない原因」「死ぬる身」などのような叙述は名詞のみでは中立的であるが、連体修飾によってマイナス的に変化してしまうのである。ところが、こうした連体修飾すらついていない名詞もある。この場合なら、文脈を沿って文意を読むしかない。名詞述語の特徴は、こうした三段式の現象が伺える。

動詞:「どうせ、どうせと言ったら悪いんですけども、海外の労働力を日本が必要とするんであれば、逆に移住した方々が三百万人ですかね」「どうせ、わたしは、この戦いが負け戦じゃということは最初からわかつとる」「どうせ、上には土墨も残っていない」「どうせ、火曜日には医者に会う」「どうせ、犯人はすぐには逃げません」「どうせ、群秋生あたりが喋ったな」「どうせ、自分にふさわしい楽しい友達なんか出来っこない」「どうせ朝になるまで戻らんで」「どうせお前は大したところにやいかないさ」「行ったってどうせお日様なんか見えない

よ」「どうせこのようなことをやる者は、もうとつくに校長のリストに乗っているよ」「どうせこの御時世に自動車を乗りまわして春江に入れ上げるなどいう男は一顔は一おぼえていなかった」「どうせこの足じゃ、海水浴にも行けないけどね」「どうせこれの改定は必要になると思います」「どうせさっきまでそうしてたし」「どうせすぐに援軍が追い付くってことを忘れるな」「どうせだれもつかまりっこない」「どうせつぶれる」「それだってどうせできっこないですよ、このまま行けば」「どうせ僕はもう数学もできないし英語もできないし」「どうせどこかで誰かにバレる」「どうせたいした人物になれそうもないが、ここで死ぬよりましでしょう」

次は動詞述語の場合である。ここでは、マイナ斯的・好ましくない語（喋る・つぶれる・バレる）と可能の意味を表す語（出来っこない・行けない・つかまりっこない・できない・なれそうもない）が最大の特徴であろう。そのほか、ニュートラルにされる動詞も存在する。こういう場合は同様に、文脈を通して解読するのが手段となる。

形容詞：「どうせ、こんなてあいを弁口で屈伏させるてぎわはなし」「どうせ、うちのよな会社が紹介されるなんて無理、無理」「どうせ、俺は邪魔だ」「どうせこのオバサンとは、そしてこの娘とは、このさき二度と会う機会など無い」「どうせ、閑だ」

最後は形容詞述語の場合である。割合に関しては、名詞と動詞のがほぼ相当で、形容詞のほうが極めてまれである。注目に値するのは、「無理だ」「邪魔だ」「閑だ」というマイナ斯的で「余計」の意味をほのめかしている表現であると思われる。が、例があまりにも不足しているため、なお検証される余地があると言わざるを得ないであろう。

基本的共起成分を終えて、続きとして「どうせ」と共起する最も特殊な前後関係を持つ二者—「～なら」文と「～だから」文という複文分野の考察に入る。

2.4.4.2 「～なら」

まず提起するのが仮定表現の共起成分「～なら」である。ムード表現以外に、この類の構文も副詞「どうせ」を分析する際見逃してはならないところである。「どうせ+なら」構文の量が多数であるとともに、「どうせ」の使用例としては他と大別する異色のものでもある。杉本（2000）では、形態上の類型として「どうせ～なら」との構文形式を取り上げ、この場合「意志動詞が入り得る」こと、そして「開き直りのムードが現れやすい」特性を持つとされている。一方、小矢野（2000）では複文の立場から進んで「順接仮定条件づけ」の場合とし、「なら」までに属する従属節が「確定的な未来の事態を仮定的に捉えたうえで」、それに対して主節が「その事態にとって最善の事態の選択」を述べることを指摘した。が、両者はこの種の構文形式についてその述語の使われる細部傾向や、従属節と主節が形成する属性傾向などにはほとんど触れていない。ここで「どうせ+なら」構文の述部の個性を明らかにする一方、「どうせなら」直結構文と「どうせ+のなら」構文を併せて比較して相違点を探り出すことを試みる。分析するにあたり、二段階一従属節の述部性格、主節の述部種類と、この構文形式の中心的意味に分けて考察することにする。

「どうせ+なら」

(57) 睡魔だった。人を凍死に導く睡魔かもしれない。単なる眠気だとしても、それはスナイパーにとっての大敵だった。

動け。相手に念じる。とにかくこの凍りついた局面を打ち破ってくれ。

美加も今、二度と目覚めない眠りに導かれているかもしれない。視界に幕が下りる。目蓋を閉じたからだ。こじ開け、スコープ内のかわりばえのしない風景に視神経を戻す。

が、長続きしない。どうせそうなるなら、美加を抱きしめてこの睡魔を甘受したかった。美加の温かく潤う窪みを思いだす。おれも土になりたいよ、美加。（野沢 尚『殺し屋シュウ』）

(58) —この仕事をはじめる時に、わたしたちは、最後までやり抜く決心をしたのを、わすれないでせう。どうせ+和田の人間になるなら、たふれるまで、さうです、わたしは、死んでもきつと、やります。

と泣いていましめる。そのことば通りに身を粉にして働いて一家を切りもりし、四五歳で十和田の土となった後も、家族や土地の人々の心の支えとなる。(石川 淳/勝尾 金弥/那須 辰造『伝記児童文学のあゆみ』)

前掲した杉本(2000)は、「どうせ+なら」構文に意志動詞が入り得るとしか指摘しなかったが、ほかに加えた説明がない。つまり無意志動詞が入らないことを指していると思われる。だが、例(57)(58)からわかるように、無意志動詞は実際「どうせ+なら」構文に入るのである。(57)において話し手がスナイパーの任務を遂行している最中頭に浮かぶ言葉だが、睡魔に襲われつつ眠りかけたところ、眠ってしまうことが必至だと思い、それなら現状より自分の望む眠り方を選ぶ、という陳述である。(58)の話し手が十和田家に嫁入りした女性で生前、夫に対する励ましであった。自分が十和田家に嫁いだことを考え、その時は「十和田の人間になる」のがすでに決定した事実になっていたから、それならいい加減にやっっていくことよりも、むしろ倒れるまでやりきることにするという決心・選択を表明した場面である。(57)(58)を見れば、明らかに意志動詞以外に無意志動詞も難なく共起できることがわかる。

(59) 最後まで敵機と戦い、弾が切れたら体当たりをするつもりだったのだ。
「でかい目標がいて、助かったぜ」

どうせ体当たりをするなら敵機より、空母のほうが派手でいい。(竹内誠『太平洋最終決戦・不沈空母「硫黄島」』)

(60) 六十歳の姉が中国まで渡って大役を務めると聞いては、私もうかうかしてはいられない。思い切って、新しい事業にチャレンジしてみようと決心した。どうせやるなら、だれもやっていないことがいい。

スナックは場所を移して営業を続けていたので、日中にできることをと考へ、さまざまな角度から検討してみた。その結果、当時、まだ日本ではほとんど知られていなかった、アートメイキングの店を立ち上げることにしたのだ。(彩ノ木 フジ子『赤い電車は未知への一步でした』)

(61) それからしばらく、我々は中庭のへちま棚の下に椅子を持ち出して話

し合った。どうせ一服するなら、薄暗い作業室の中よりも、赤トンボが群れ飛んでいる秋晴れの青空の下の方がやはり気持ちいい。(足立 倫行『錦の休日』)

(62) 高校受験の時期がきたが、俺は高校なんかどうでもいいと思っていた。そんなに重要性は感じていなかったし、早く大人になりたくて仕方がなかった。周囲の友達が行くので、一応受けようかというくらいだった。

どうせ受けるなら、偏差値の高いところを受けておこうと思ったが、受験勉強はほとんどした覚えがない。試験の数日前に教科書をパラパラ見なおした程度だった。(古市 佳央『君の力になりたい』)

例(57)から(62)は「どうせ+なら」構文の例であるが、その間に現れる述語をまとめて見ると、「(そう)なる」「(十和田の人間に)なる」「体当たりをする」「やる」「一服する」「(試験を)受ける」などの動詞が出ている。(57)(58)は無意志動詞で、(59)から(62)は意志動詞である。(59)では、大きなヒントとしての前文脈「弾が切れたら体当たりをするつもりだった」がリードする。つまりそこで、戦闘機ごとに敵の軍事施設に体当たりすることを最後に実行するという決断をあらかじめ下しておき、その後話し手が体当たりを実行する際攻撃がすでに決まったので、あとは標的の選定しか残っておらず、空母を最後の攻撃目標にしたのである。(60)の話し手は新しい事業をはじめようとしている。ここにも「新しい事業にチャレンジしてみようと決心した」という前文脈が出現し、仕事での再起の目論みを予告してから「だれもやっていないことがいい」と自分の眼界を述べた。(61)では前文脈による提示がないものの、主な文脈においては「一服する」意欲が暗に示され、その意欲があつてこそ事態の実現が決められ、そこで話し手の心の中で前もって二つの選択肢を比較してから自分の好ましいほうを選んで述べたのである。(62)における前文脈は他の例ほど積極性が強くないが、「一応受けようかというくらいだった」思いが後の「試験に受ける」ことにつながっている。そして前例と同じく選択の段階に来て、「偏差値の高いところ」を受けることにした。受験勉強はいい加減に過ぎたにもかかわらず、「どうせ+なら」構文の範囲内には確実に自分の志望のほうに決めたのである。

上掲の例では、(57) から (62) に森田 (1992) の指摘した「最善を尽くす」もしくは小矢野 (2000) の指摘した「その事態にとって最善の事態の選択」という話し手の思考が入っているように見える。だが、こういう指摘には破綻が存在している。例えば (59) の場合、一見「最善を尽くす」ことで解釈したら通じそうだが、しかし入念に考えれば話し手の決めたことが「最善」というより、自分の好みに従った決定でしかないと思われる。(60) の「だれもやっていないことがいい」という選択は自分の新しい事業にとって、参考できる先例が少なかったりするのが予想できることでやりづらさが絶対伴ってくるので、必ずしも「最善」の選択ではないだろう。森田の指す「最善」はむしろ次の作例がふさわしい。もし主節を「大金持ちになるまで徹底的にやっていきたい」などのように替えたら「最善」のレベルで解釈できよう。話し手にとっても事態にとっても最もよい処置ではないため、「最善を尽くす」という傾向は成立せず、その代わりに「好みによる選択を下す」のほうが適切だと思われる。

ところが、「どうせ」と「なら」がともに一文に出現する場合は必ずしもこのルールに従うのではない。ここで言う「どうせ+なら」構文の特徴は、予定していたこれから行う事柄もしくは行動による結果と、事柄が行うという前提のもとに下すある決定・選択との二点が必要条件であり、その必要条件が存在しないと文は成立しない。例えば (63) のような場合を見よう。

(63) 「で、どうせ皆さん御親戚のかたは…」

と、母はだんだん調子づいて雄弁に一句一句に力をいれて話し続けた。「この谷村家のお家筋が大事なんで、わたしやとね子はどうでもよい、人の顔を踏みにじってまでも道彦をひき取らせた位なんですから、どうせお家のためならわたし達親子を犠牲にする位は何んともお思いではない、とこうとられるんです」(矢田 津世子『神楽坂』)

例 (63) の従属節に属する述部が「お家のため」である。ここでは何一つ実行することが決まっていないので、「どうせ」の働く範囲が文全体にまで伸ばし、「なら」との共起のつながりが一気に弱まった。この場合、筆者の言う「どうせ+なら」構文とは全く違う形のものである。「どうせ+なら」構文というよりもむしろ一般的な「どうせ」文に過ぎないと言えよう。「どうせ+なら」構文の

特徴—従属節に実行する行動もしくは行動による結果となる事態が明示され、それに対して決定・選択を下す特徴—が含有されていないため、この種の文は「どうせ＋なら」構文と認めることができない。従来の研究ではこうした差異に気づかず指摘しなかったため、ここにおいて筆者の認める「どうせ＋なら」構文は独特な成立条件かつ意味的制限を持ち、一般に言われる「どうせ～なら」文、つまり「どうせ」と「～なら」が一文に同時に出現すれば認める文ではないことを断っておきたい。

「どうせなら」直結

文の後部に主要述語（動作、状態）が提示してある場合、「どうせなら」という直結の形式で文がそれでまとまる。小矢野（2000）はそれを「圧縮表現」と呼び、「主節が表す事態と同類だから、省略が可能」とわずか一例で簡潔に済ませたが、実際この形式の例文が非常に多く現れる。

(64) 坂田は人影のないロビーのソファに腰をおろし、観光地図を広げた。食事はホテルの中でもできる。しかしどうせなら、繁華街にある店で食べてみたい。（大沢 在昌『涙はふくな、凍るまで』）

(65) だって朝食会というのは結構早くて、八時頃から始まることだってある。ということは場所にもよるが七時半前には家を出なければならない。七時半前に家を出るということは、お化粧品や服装の選定にかかる時間を入れると、六時半に起きなければならないのである。こんなに早起きを強いられるのだから、その上大真面目な固い会議などされたら、泣きっ面にハチである。会議は楽しくなければならぬ。つまらない会議で、さえないおじさんと並んで朝食をとっているところを、知っている人に見られ、「モリさん、見たわよオ」なんてあとでニヤニヤされたら、もうとり返しがつかないではないか。どうせなら、「モリさん、いいところ見たわよオ。案外趣味いいのねえ。すっごくステキな男だったじゃないの」と言われたい。（森 瑤子『終りの美学』）

(66) 人というのは、一生をかけて、自分の人生とはこういうものだとか解釈する生きものなのです。

どうせなら、せっかくの人生を楽しんでしましましょう。一生に一度の人生ならば、人生の主人公になって、この人生を精いっぱい楽しんでしまおうではありませんか。(栗原 修司『生と死への気づき』)

(67) 一人きりで部屋にいるのは気づまりだったから、非番の日には街中へ出かけました。大阪駅から環状線に乗り、適当な駅で下車しては目的もなく歩き続けるのです。どうせなら、大阪中の道を歩いてやろう。そう思いながら、私はあてもなく歩き続けました。何の用事があるわけでもなく、どこへ行くのもいわば気分の問題だったから、退屈しのぎに街灯や自販機の数を数え、それに飽きたら角を曲がり、また歩き始めるのです。(蓮見 圭一『水曜の朝、午前三時』)

(68) 服や靴はイギリス全土のチャリティーショップで長年にわたりそれらしきものを集めてきた。あとは、スッピンでも耐えうる素肌を手に入れて、「私は口紅とアイシャドウしかつけないのよ。これがイギリスふうなの」と公言してみたい。どうせなら、好きなスタイルは徹底的にサル真似をした方がいい。(井形 慶子『ときどきイギリス暮らし』)

例 (64) から (68) は「どうせなら」直結の例文である。本来従属節に現れるはずの述部がまるごと省略され、話の重点をすべて主節に譲った。この種の構文形式は基本的に「どうせ+なら」構文のルールに従うが、文脈と主節がさらにポイントになるであろう。なぜなら、前掲したように「どうせ+なら」構文には先行する予定の実行する事柄が要請されるので、「どうせなら」直結構文には従属節述部が存在しないため、文脈と主節を通してその先行する事柄を知ることが重要になってくるのである。しかも、「どうせなら」直結のところ本来の述語を、多くの場合は主節に求めることになる。もちろん必ずしも主節において提示されるのではないので、前後の文脈を主節における述部に併せてはじめて、「どうせなら」の指す意味がわかり述語を想定することができる。

(64) での主節は「繁華街にある店で食べてみたい」のが話し手の意向であ

るが、その前に「食事はホテルの中でもできる」という文が先立ち、前後の叙述を併せて、食事についての決定・選択が「どうせなら」の指す事態だということがわかる。(65) は話し手がいい気になれない男と食事する情景が知人に見られ、うわさ話として言われた時の愚痴であったが、「どうせ(言われる)なら素敵な男を見たと言われたい」と話し手の希望・望ましい事態が後に来る。(66) では従属節の述語が主節に求めるのではなく、前文脈に溯って適したものを探るのである。一般的ルールで主節の動詞述語を使って足したら本来指す文意味と異なってくるから、前後の文脈を基準に「どうせ楽しむなら」でなく「どうせ生きていくなら」のほうが適切だと考えられる。(67) と (68) の場合、従属節に適用する述語「歩く」「サル真似をする」はすでに主節の中に入っている。次に、「どうせ+のなら」構文の場合である。

「どうせ+のなら」

(69) 子どもが与えた課題を早めに終えてしまったときに、つい出してしまうがちなのが「じゃあ、もう一問やってみようか」という言葉です。これは絶対にいけません。子どもは「だまされた」と感じ、親への信頼をなくしますし、以後集中力も工夫もいっぺんになくなります。「どうせあとでふえるのなら、最初の分量を時間いっぱいやったほうが楽だ」と考えるからです。(小宮山 博仁『わが子を算数大好きに変える本』)

(70) 「なんだ、そういう考えね」

若葉はあざ笑った。合点がいったのだ。

「いくらアメリカ大統領でも、総理大臣の首をすげかえることはできないものね。どうせ失敗するのなら、思い切りハードルを高く上げておいたほうが失敗したとき同情してもらえるものね。よく頑張ったって…」(あすか 正太『撃破！日本消滅計画』)

(71) 高齢化対策についても二つの発想が存在する。一つは、地元の老人の処遇についての政策である。もう一つは、どうせ老人しか残らないのならば、いっそのことシルバー産業を始めようという発想である。だが、観光

と同じく、対人サービスや介護には永い文化の蓄積が必要である。いかに素朴で善良な人々がいるとはいえ、例えば、石炭を掘っていた人が急に高齢者に優れたホスピタリティを表現するのは難しい。街全体が高齢者にとって精神的にバリア・フリー（老いからくる障害・不自由をのりこえられるように用意された建物やサービス）の都市に変わるのは、企業誘致以上に困難である。ただし、やりがいのない仕事ではない。（野田 正彰『生きがいシェアリング』）

(72) 「お風呂場の鏡を見ると情けない顔になっていました。やはりレイプされたんだという現実には、その場で泣き崩れました。なんで私がこんな目に遭うの、何で私なの、チキショウ！ チキショウ！

悔しくても警察には届けませんでした。男はどここの誰かも分からないし、どうせ分からないのなら騒がれたくなかったからです。特に親や会社の人たちには知られたくありませんでした。レイプされた日に女友達のマンションに行き、風邪に罹ったことにして、有給を利用して会社を1週間休みました。今もふっと思い出すと、悔しくて悔しくて頭がヘンになりそうな時があります。病院で検査してもらい、幸い、妊娠もしていませんでしたし性病にも罹っていませんでした」（三井 京子『116人のレイプ体験』）

「どうせ+のなら」すなわち「どうせ+のだ+なら」という構文形式もたくさん見られる。「のだ」文の特性としての「既知」が働くことによって、「なら」との相性が一段上がっているように思われるが、この種の構文形式には「どうせ+なら」より無意志動詞との共起がいつそう盛んになっている。(69)から(72)ではそれぞれ「ふえる」「失敗する」「残る」「分かる」などの動詞があり、いずれも無意志動詞である。「どうせ+のなら」構文の数が「どうせ+なら」構文ほど及ばないにもかかわらず無意志動詞の出現比率が高い。ここから見て無意志動詞との相性が比較的に高いといえるであろう。それはなぜかという点、無意志動詞の表す事態は行動ではなく結果であり、いわゆる結果となった事態は「既知」のものだから、ある事態の発生を認めた上での接続が「のだ」によって確固たる基盤を得て、「なら」への一連の意味の進路が確保されたため、共起性がさらにアップしたのではないかと思われる。

(73) 「四五〇〇年前のエジプト王朝は、二〇世紀の公共事業による景気対策のケインズ理論を先取りした。目的のないピラミッド建設という無益な公共事業は、かえって争いごとを生まない。ピラミッドは偉大なる役立たずであった。後期のエジプト王朝がピラミッドを建設しなくなったのも、どうせお金を使うのなら無駄な公共事業を止めて、有益な公共事業に使おうという考え方の変化であった。しかしあの無駄なピラミッドは、今では年間四〇億ドルの観光収入になっている。結果的には人類最長の財形貯蓄であった」(竹村 公太郎『日本文明の謎を解く』)

(74) 夕方、離れの往診から帰ると、二人は、夕食の仕度にかかった。

「小春さんも呼びましょうか」

どうせ一緒に食事をするのなら、二人よりは三人のほうが楽しい。

久子は、エプロンの裾で手を拭きながら、受話器をあげた。(志賀 貢『女医彩子の事件カルテ』)

(73) (74) が意志動詞と共起する例である。従属節の述部を見て「お金を使う」「一緒に食事をする」いずれもある行動の遂行を目論む場合であり、ニュートラルな属性を帯びている。一方、主節のほうも的確に両者比較を繰り出した上で話し手の個人的な決定・選択を表明し、「どうせ+なら」構文の成立条件を守っている。無意志動詞のに対して、意志動詞との共起状況は「どうせ+なら」構文に比べて大差がないようである。が、

(75) だが、このように大多数の教師は、よく判る授業をしても生徒にしか評価されない。いくら教師が子ども好きでも、大人に評価されないのは切ないものだ。この時、立派な者は「子どもの生き生きした顔こそわが生きがい」と悟りの境地に入り、だめな者は「どうせ誰も評価してくれないのなら適当でいいや」となる。(森口 朗『授業の復権』)

(75) の場合は違い、筆者の定義に括られる「どうせ+(の)なら」構文のものではない。従属節に示されたのは話し手の実行する行動ではなく、不特定の

対象による行動であるから、まず話し手の当該事態に対する積極性が失う。こういう主語不特定の場合、「どうせ」は「～のなら」との連携が微弱で、むしろ後部にある「適当でいいや」と関わってしまう。なので主節の傾向が積極的でなくなり「どうせ」によって引っ張られ、消極的な決定・選択が下されるに至る。つまりこれは一般的「どうせ」文だと認められるべきなのである。

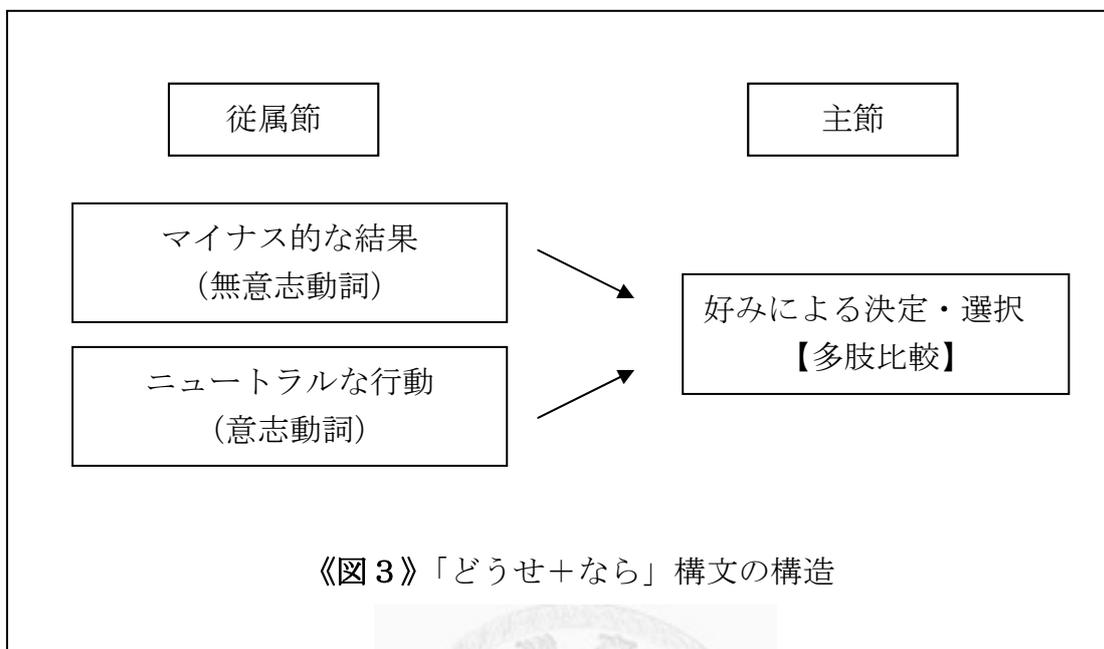
以上「どうせ+なら」、「どうせなら」直結、「どうせ+のなら」三種類の構文の例をまとめて見ると、前部すなわち従属節と、後部すなわち主節に属する述部の特徴を把握することができる。

従属節の述部に用いられるものがほとんど動詞であり、それ以外はわずかの名詞のみである。動詞の場合は前述の通り、意志動詞と無意志動詞はともに共起できるが、無意志動詞の場合は「どうせ+のなら」のほうが共起性が高い。名詞の場合は「嘘」「(どうせ)のこと」「そんな状態」「遊びの延長」「つまらない邪魔な言葉」など、すべてマイナス的な傾向を帯びるものである。形容詞と形容動詞の場合は、ある行動による結果でなく単なる状態を示すだけなので、基本的にはこの種の構文形式と共起しない。あえて数えるなら「(抱かれる)しかない」のような変性した形容詞に限り、じきに単独で共起する例は存在しないのである。

主節の述部に用いられるものが「～たい」「～う・よう」「～(ほう)がいい」といった三種類の用法があり、いずれも話し手の希望・好ましい気持ちが関与すると同時に、当該事態に対する決定・選択を意味している。「どうせ+なら」構文には必ず「多肢比較(多数選択肢による比較)」という心理的側面が存在する。換言すれば、話し手がその心理的先決条件から出発し、心の中ではまず二つ以上の選択肢が浮び、次にそのうちの一つを選定してから自らの希望を訴えて判断を下し、文を完成させる。仮に主節には「多肢比較」という心理が含意しない場合、「どうせ+なら」構文になり得ないのである。これが「どうせ+なら」構文について使用上の制約を考慮する際、極めて重要なポイントであると思われる。

各々の述部内容以外に、「どうせ+なら」構文における従属節と主節の属性関係も非常に注目に値するところである。二つの場合に分けることができる。従属節の属性がマイナスであろうとニュートラルであろうと、主節はプラス属性の「多肢比較を通して好ましきによる事態への決定・選択」である、という結

論が得られよう。最後に《図3》をもってこの種の文の構造を示す。



2.4.4.3 「～だから」¹²

複文分野の第二項目として挙げられるのが「どうせ+だから」構文形式である。これについて指摘した先行研究をいえば、森本（1994）と小矢野（2000）がある。森本氏は、因果関係を表す理由文の中に「どうせ」が適切に機能する一方、こうした理由文に「対の構成の仕方」があり、その前後関係として、「前者は「どうせ」をもつ理由表現であり、もう一方が、「だいじょうぶだ」「かまわない」「許容できる」「当然だ」というような意味をもつ表現」が共存すると指摘している。一方、小矢野氏は構文の側面から「どうせ～（のだ）から」の「順接確定条件タイプ」を取り上げる。氏の説によると、この場合従属節には「マイナス評価的な現状把握」の述語や「確定的な未来の事態」を表すものが出て、それを「根拠・理由づけとして、主節が表す現実の事態と関係づける」という特徴が存在するとされている。しかし、果たしてこの種の構文形式において、従属節と主節の間にはどのような属性傾向で出来ているのか、また主節で現れる表現の種類は単に許容しかないのか、といった疑問に関しては説明が

¹² 表記するにあたり、格助詞の「(時間・場所)～から」と混同される恐れがあるため、本稿では接続助詞の「～から」を「～だから」にした。

欠落している。したがって、本項目において以上の疑問を解明すべく「どうせ+だから」構文の分析を行う。

(76) ビザの取得は、思ったよりもっと簡単だった。インド人や中国人、タイ人、ネパール人など雑多にごった返す税関を通過して外に出ると銀行での両替え。それから八重子は突然、急ぎ出し、ゲートの左側にあるバス乗り場の方に向かった。

「どうせ、きょう中にはチャリコットへは向かえないから、市内で泊まろう。市バスが安い。それに、きちんと飛行機の到着に合わせて出るの」
言いながら手帳を見ている八重子と泉田正一の周りを、「タクシー」「ホテル」と叫びながら、まだ運転手たちが追いかけてくる。その彼らのカレー臭い匂い。(畑山 博『神よりも尊き者たち』)

(77) サブローが露骨に顔をしかめると、

「おっ、察した通り、もう酒が足りなくなってるじゃないですか。ホラ、これ。バルンタインの三〇年ものを二本ばかり用意してきましたよ。さあ、どんどんやってくださいね、どんどん」

金太郎はもうニコニコ顔で大変な勢い。

「さあーて、今夜は何からいくかなあ、先生。リクエストがあったら出してくださいよ、遠慮なく」

だって。サブローがうつむいていると、裕次郎がそばに来て、

「先生、もうあきらめたほうがいいですよ、今夜は。どうせだから陽気に行きまましょう、陽気に。ホラ、オヤジのが始まりますよ」

となぐさめてくれる。(ビートたけし『たけしの新・坊っちゃん』)

(76) (77) は勧誘表現とともに出現する例である。(76) では話し手の八重子が自分たちの予定した目的地へ向かえないことが確実に発生するとすでに想定したため、受け手の泉田に対して「市内で泊まる」ことを提案した。一方、(77) のような、従属節の述語を省略した例もある。「どうせなら」直結のような形で、従属節の内容が「どうせ飲むのはもう決まりだから」だと予想される。ただし、「どうせだから」直結の例は一つしかないので、あまり常用の形式ではないと

思われる。

次に取り上げるのは許容表現の例文である。森本（1994）では前述したように、因果関係を表す理由文の中に、従属節は「理由表現」の事態である一方、主節は「その出来事が許容できる」すなわち許容表現である構造で出来ていると指摘している。森本氏自身は、それは制約に対する暫定的結論だと言明しているが、筆者の調査では実際、例の許容表現以外にも他の表現がいくつか存在していることが証明されうる。

(78) 「クッキーしかないけど、食べる？」

紺色の缶を手に、冬樹さんが戻ってきた。

「あ、そのクッキー好き」

「そう？ それはよかった。じゃあ、いつもよりたくさん勉強したご褒美に、好きなだけ食べていいよ」

と、言われても、そんなわけにはいかない。定城だって食べたいだろうし。

「どうしたの？ 遠慮しなくていいよ。どうせ、ウチじゃほとんど食べないから」(鹿住 槇『半熟たまごのレジスタンス』)

(79) このごろは、悪い予感も当たるけど、いい勘も当たる。当てずっぽうにいつてみたのに、朽木さんは「ウィリアム・テル」のカウンターにちゃんといてくれた。土曜日の夜はいつもそうらしいけど、その日の「ウィリアム・テル」は満員で、店の女の人たちは、一つのストゥールに二人で腰かけたり、お客の膝の上に乗ったりしなければ坐れないくらいだった。急に思い立って電車に乗ってしまったので、私は紺のセーラー服のままだった。ミドリさんの肩掛けでも借りるつもりだったのに、春めいてきた気候のせいかな、もういつもの藤色のショールはお店に置いてなかった。どうせすぐ帰るからいいと軽く思ったのが間違いだったのだが、そのときはあんなことになるなんて、考えてもみなかった。(久世 光彦『謎の母』)

(80) 「まあ、冗談はともかくー」と隆志は言った。「時間があれば、君にぼの似顔絵もお願いするんだったな」

「まだ時間はだいじょうぶよ」

横で自分の似顔絵を大切そうに丸めていた娘が言った。

「いや、もうそろそろぼくらの順番になっているかもしれない」

「じゃあ、一応行ってみましょうか」と娘が言った。「そして、その後—」

「手続きが終わってからで結構ですよ。それからまたゆっくり来ればいい」と絵描きは言った。

「どうせおれは一日中ここにいるんだから」

「それじゃ帰りに寄ります」と隆志。(川西 桂司『薄曇りの肖像』)

- (81) 小さな村のため他には食事するところはなく、このホテルのレストランで夕食をとった。料理は魚のムニエルだったので、その日、訪れた「タヴェル・ロゼ」のハーフボトルにした。ゆっくり食事をしているうちにワインが空になってしまった。もう少しワインが飲みたくなり、せっかくシャトーヌフ・デュ・パプ村に泊まっているのだから、ここの赤ワインを飲まなければと職業意識が強くなった。一人では飲み過ぎになるかもと考えたが、どうせ、今夜はこのホテルに泊まっているのだから、這ってでも部屋に行けると思って、「シャトーヌフ・デュ・パプ」のハーフボトルをもう一本注文して飲んだ。勘定は宿泊代といっしょにしてもらうので、部屋の番号を伝えサインだけして部屋に帰った。(小阪田 嘉昭『ワイン醸造士のパリ駐在記』)

(78) から (80) は「どうせ+ (だ) から」と許容表現の共起例である。会話のため、主節と従属節の順序が逆に出ているものもあるが、まとめて見れば後方は全部「遠慮しなくていいよ」「いい」「それからまたゆっくり来ればいい」のように、相手や自分自身に対する許容を示す「～いい」という表現である。ちなみに、例 (81) 「這ってでも部屋に行ける」のほうが許容ではないであろうが、文脈から考慮すれば、話し手が本来「飲み過ぎ」に心配していたものの、「このホテルに泊まっている」ことがすでに決定されたことだから、<飲みすぎたら部屋まで這っていく>ことができる以上、その時点で「飲み過ぎ」が許容される行動になり、すなわち<飲みすぎても大丈夫だ>という考えで捉えても文の裏に許容の意味が成立すると思わせる。が、さすがに形式上は正規的な許容表現の例ではないので、一応類似性の持ったものにしておく。

- (82) 「そんなことより、どうするつもりなんだ？ 今夜から、どこに泊る」
「うちに泊って。長谷沼さんにも言ってあるわ」
と直美は言った。
「そうはいかないよ」
「いいのよ。どうせ、部屋は余ってんだし、ここなら、あの連中もやっ
て来ないわ」
「しかしー」
「あなただって私を見張ってられるじゃないの」
辻山はため息をついた。
「ああ言ってくれてるんだから、泊めてもらいましょうよ」
と、幸子は呑気に言った。(赤川 次郎『探偵物語』)

例(82)では「部屋は余ってんだし」の「～し」という接続助詞に興味深い。この例に「～だから」という構造はないが、話題事態をめぐる原因・理由として事実・条件を表す表現「～し」は、類似性を持つため取り上げることにした。文脈をよそに単純に一叙述として見たら、部屋が余っていることは客にとってはめでたいことだが大家にとっては困ってしまうことになるので、一般的にはマイナスだと認められるだろう。しかしこの場面においては客(辻山)にとっても大家(直美)にとっても望まれる、必要とされる条件であるため、むしろニュートラルだと認定するほうがふさわしいと思われる。

では、ニュートラルな表現と共起する「どうせ」の担う意味を調べるために例(82)を参考にみよう。まず整った文に替えてみれば「どうせ、部屋は余ってんだし、ここなら、あの連中もやって来ない(から泊まって)いいのよ」というふうになるが、「どうせ」を消去したら差がどこに現れるのか。

(82A) いいのよ。どうせ、部屋は余ってんだし、ここなら、あの連中もやって来ないわ。

(82B) いいのよ。部屋は余ってんだし、ここなら、あの連中もやって来ないわ。

<余っているのだから、君が泊まらなくても依然として使われない部屋だ。

泊まらないなら私にとっても損なのではないか>というようなニュアンスが (82A) の「どうせ」によって匂ってしまうのではないか。ただし (82B) ではそういうニュアンスが伺わなくて、もっぱら<空いている部屋がある>ことを説明しているだけである。というわけで、「どうせ」がそのプラス性の持つ文に参加したことによって新しい意味が出来たのであり、その新しく付加された意味が「余計」の意味であると思われる。なぜかというと、文中の直美が辻山に対して (82A) の発言を選んだ時点で「空き部屋があるかどうかは余計な心配だ」という思考が入っていたわけである。つまり、そういう既存する事態を示す上で相手に対して余計な考えは不要だという思考が心の中に潜んでいたから、「どうせ」を使ったのではないかと思われる。(82B) でも「余計」の意味を説明を通して表すことができるといわれるかもしれないが、入念に考えれば、単に「部屋は余ってた」はそれほど「余計に心配することはない」などのような文とのつながりが強くない。しかし「どうせ」を付け加えると自然にそうつながってしまう。これで「どうせ」が「余計」の意味を帯びることがわかってくるはずである。こうした主節がプラス性の持つ文は勧誘と許容表現の場合以外に、次の命令表現にも見られる。

(83) 笠岡は、いまようやくおmoi当たったことがあったのである。それは最近になって妻が異常に優しくなった事実であった。時子は、彼が胃の異常を訴えて初めて大黒柱としての重要性を認識したと言っていたが、彼女の性格としてその程度のことで積年のしこりを融解するはずがなかった。

時子は、父親を見殺しにされた復讐のために笠岡と結婚したのである。それが最近の急激な軟化は信じられないくらいであった。現に今朝、彼が家を出るときも家族で旅行をしたいと言いだして面喰らわせた。

それもこれもこの異変のせいだった。これは胃炎などではなく、もっと深刻なものなのだろう。医者は笠岡には前胃潰瘍症状などと言ったが、後で秘かに妻を呼び寄せて、不治の病名を告げたのだろう。そして、どうせたすからない命だから、いまのうちに客を遇するように大切にしろと忠告したのかもしれない。(森村 誠一『青春の証明』)

(84) やがて、もっと本格的に観測できる望遠鏡が、どうしてもほしいとい

うので、専門店へ連れていった。

三男坊が、即座に指した望遠鏡は、どうやら本格的なもので、専門的な観測にも、耐えうるものだったらしい。

どうせ、飽きて放りだすのだから、おもちゃ代わりの安いものにしなさいと、妻の反対は強硬である。三男坊のほうも、頑として聞かず、しまいには、その望遠鏡の前にすわり込んでしまう有様である。(池田 香峯子『香峯子抄』)

例 (83) (84) で主節に現れるのが命令表現である。この場合、従属節と主節の主語が異なることを注目されたい。従属節の第一主語によって描写する事態について話し手が主節における第二主語に命令を下す、という構造になっている。(83) の場合、話し手が医者で、第一主語の主人公の病状について、第二主語の妻に命令の形で忠告を伝えている。(84) では、話し手の妻が第一主語の三男坊の子供としての悪習について、第二主語の夫に強く命令した。従属節が好ましくない事態であり、主節がその事態に対して挽回するような立場に立っているのである。いずれも、従属節のマイナス的事態に対して、積極的な行動を要求する場面である。主節で命令はするものの、事態の行方から見て、マイナス的事態に陥らせないためにプラス方向の提案を命令にしたことが考えられ、かえってプラスの立場に立っているといえよう。

(56) 近藤はユンちゃんがあげてくれた缶詰の桃を美味しそうに食べた。ナウさんが彼の背中をさすっている。

「パパ、オイシイ？」とユンちゃん。

「オイシイ、ユンちゃんがあげてくれた缶詰は、とっても、おいしいよ」
近藤は食べながらも時に、頭を二三度激しく振る。痛そうではない。

「もういい」一切れほど食べた程度で近藤は桃の皿をユンちゃんに押し戻した。「どうせ、すでに吐き出しちゃうんだから」近藤は捨てばちに言った。(吉川 精一『月曜日のカーネーション』)

(85) 「まアー、ご自分の言いたいことばかりおっしゃって！！ 私そんな心算で言ったんじゃないわ。私…言いたいけど、どうせあなたの御機嫌を

悪くするんだから、もう言いません。この前のはごめんなさい。あなたのお気持ちよくわかってますから私を見捨てないで！！」

全部言わせず、私の唇が昌子の唇を覆った。熱い血潮が私の全身を駆けめぐった。昌子の背中に回した腕に力が入った。(大磯 輝男『異國に祈る』)

例 (56) (85) における主節の意味はいずれも「放棄」である。この場合では、主節に現れる述語は主として従属節の示す事態が実現できないよう、当該事態に関連する行動をやめる・諦めるという意味を表すものである。(56) の話し手・近藤は自分の子を失望させないために、苦痛を耐えておいしそうに桃を何とか食べて見せたが、結局はあまりにも苦しかったから、後で吐き出してしまうことを予想した上、食べ続けることを諦めたのである。(85) の場合、話し手・昌子は相手が自分の言葉で激怒されることを予想し、そういう好ましくない場面になりたくないから話すのをやめたのである。いずれも話し手自身が、従属節に出現する望ましくない事態を堅持せずに、消極的に回避するための「放棄」の表出である。

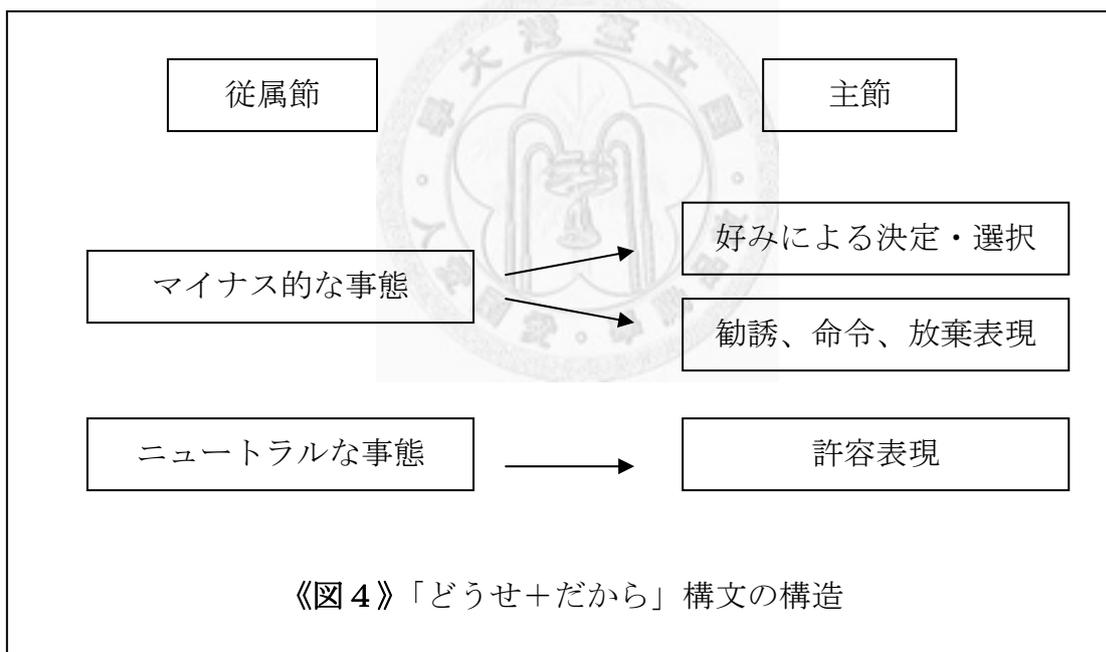
以上触れた共起特徴以外に、「どうせ+なら」構文のルールと同じような例 (86) (87) が、「どうせ+だから」構文にも見られる。この場合はいうまでもなく、主節のところに話し手の決定・選択が来るのである。

(86) 「お金のことなら心配しないで、あなたの一人くらい私が養ってあげる」

絹子はそう言って三崎を励ましてくれるが、三崎としてはそんな自分が情けない、どうせこの業界に足を踏み入れたのだから、バリバリの悪党になって情報を武器に暴れまわってみたい。(廣山 義慶『夜の総務探偵』)

(87) 二時すぎにトクタ村に着く。ここからドダ川の支流を一時間半ほど歩けばズンクル・ゴンパに行けるが、初日から無理をせず、ここでキャンプをすることにする。久しぶりに早い時間にキャンプを張れたので、日記の整理や洗濯をしたが、水が冷たく、三分も洗っていると手がしびれてくる。洗濯をしても、どうせすぐにほこりだらけになるのだから、下着以外は今後いっさい洗濯をしないことに決める。その方が気が楽だ。(佐藤 健『マ

以上分析した結果をまとめる。「どうせ+だから」構文の場合では総じて「勧誘・許容・命令・放棄」という、少なくとも四種類の意味と、「どうせ+なら」構文に出るような「既存する想定事態に対する決定・選択」という、合計五種類の表現が認知される。また、属性関係の問題について、勧誘、許容、命令表現の場合では従属節が既定のマイナス的なもしくはニュートラルな事態と共起して主節でプラス意味を表出する一方、放棄表現の場合では従属節が既定のマイナス的な事態と共起して主節が「消極的放棄」というマイナス意味を表出することがわかる。小矢野氏の従属節に対する「マイナス評価的な現状把握」という指摘の不足がわかり、それだけにはとどまらないことは本節で確実に示したのである。《図4》をもって「どうせ+だから」構文の構造を示す。



上掲二項目「どうせ+なら」「どうせ+だから」の場合は、「どうせ」の単独で出現する場合と違い、文全体が風変わりな意味に解釈される。この二種類の構文形式が、「どうせ」文の固有意味の隔たりを破り、さらに豊富にさせたのではないかと思われる。

第三章 副詞「しょせん」の諸相

3.1 先行研究

3.1.1 位置づけ

管見によれば「しょせん」について論述したものが極めて少なく、工藤(1982)、森本(1994)と武内(2005)にしか見られない。工藤(1982)は二章において触れたように、叙法副詞の分類を行いながら「しょせん」を「どうせ」とともに「はしより」という下位分類に置くことにしており、更なる分析が欠落している。語学的位置づけはほとんど「どうせ」と同源とされているので、2.1を参考の上で、ここでは繰り返し説明を省略させてもらう。

3.1.2 構文的及び意味的特徴

3.1.2.1 森本(1994)

「しょせん」について、森本(1994)では前章で考察した話し手の主観を表す副詞「どうせ」と対になって調査をなされている。「しょせん」は「どうせ」とともに森本の作った分類「グループ A12」に置かれ、「基本的平叙文(行為文)で現れる」上で、「その副詞の付く文の外にある文脈に言及する傾向がみられる」という特徴を有するとされている。森本氏の「しょせん」に関連する研究成果を整えて次に示す。

《表5》森本氏の「しょせん」に関する研究結果

基本的文タイプ	平叙文		疑問文		命令文	
	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定
	+	+	-	-	-	-

否定	否定文に現れるもの		否定される可能性のあるもの		
	+		-		
共起関係	平叙文		だろう	らしい	う／よう構文
	現在	過去			
	+	-?	+	+?	-

森本氏が「しょせん」のメカニズムについて①その文が、ディスコースにおける話し手の最終的結論的意見であることを示す、②「しょせん」の示す意見内容は、否定的なものに限られており、「しょせん」自体は、諦め、軽視などの気持ちを添えることが多い、③「しょせん」は、この副詞のついた文の外部に言及して、最終的発言をすると考えられるが、かならずしも言語的に表現される先行文脈があるわけではなく、漠然とした一般的な概念であることも可能である（森本 1994 : 132）との三点をもって結論づけている。なお、「しょせん」には「のだ」のような話し手の主観的態度の表現が随伴すると指摘している。ところが、「しょせん」の役割が「話し手の、ある事態に対する評価」とされているが、結論性について触れたものの、成立条件をはっきりさせずに半端で終わっている。他方、先行の文脈の必要性について普遍的真理という場合の下では「しょせん」の条件が厳しくない論じられているが、それ以外の場合に関しては不問に付されている。

3.1.2.2 小矢野（2000）、武内（2005）

武内（2005）は認知言語学の立場から「しょせん」と「どうせ」両副詞の意味領域を弁別し、近似する意味を持っていながらもその区別を探り出そうと試みている。2.1.2.5の節における「どうせ」をめぐる論考の行方は小矢野（2000）とほぼ一致しているものの、「しょせん」についての見方は小矢野氏の結論とは異を唱えている。前述したように小矢野氏は「どうせ」「しょせん」二語のつく文がともに連文構造の面において「理由・根拠」の機能を持つとしている。だが、それと反対方向に立ち、「しょせん」「どうせ」の二語が複文構造・因果関

係という側面では異なっていると武内氏は捉えている。武内氏の説によれば、「しょせん」と「どうせ」との相違を例(88)を通して説明している。

(88) a. しょせん／どうせ、アメリカ人の作ったものだ。 b. いい映画とは思わない。(武内 2005 による 2 例を合併したもの)

「しょせん」の場合、a の表出命題が b の表出命題の前提であるに対し、「どうせ」の場合、a の表出命題が b の表出命題が前提であるという推論からの結論(武内 2005 : 84)であり、つまり「「しょせん」の場合、第 2 発話が呼び出した想定を強めるように、「どうせ」の場合、第 2 発話が呼び出した想定 of 文脈含意として、第 1 発話を解釈するよう指示される」現象が見られ、したがって前者が「既存の想定 of 強化」、後者が「文脈含意 of 導出」という認知効果をもつとされるに至った。ということは、標的の二語の使用条件について小矢野氏は共通、武内氏は相違であると主張しているのである。以上を見てわかるように、両論は行き違っている。理解の便宜上、2.1.2.5 における武内氏の主張を示した《表 2》を再びここにおいて提示しておく。

《表 2》 武内 (2005) の主張—「しょせん」「どうせ」の異同

「しょせん」 & 「どうせ」	武内 (2005) の主張
共通点	5. 非真理条件的である。 6. 手続き的情報を記号化している。 7. 2 命題間を関係付ける談話連結語である。「しょせん／どうせ P、Q」というスキーマにおいて、P が Q の説明、理由となる。つまり広い意味での因果関係を表明する。 8. Q によって伝達される命題、あるいは Q から呼び出される想定は否定的な意味合いを持つ。
相違点	認知効果において、「しょせん」が「既存の想定 of 強化」、 「どうせ」が「文脈含意 of 導出」という働きを持つ。

3.2 問題提起

以上、「しょせん」についての先行研究を構文的及び意味的特徴という側面からその未解明のポイントを示した。本節では先行の研究成果における異同をまとめた上で、問題提起を明らかにする。

《表6》 先行研究—「しょせん」構文的特徴

特徴		学者			
		工藤	森本	小矢野	武内
基本的 文タイプ	平叙文	+	+		
	疑問文	-	-		
	命令文	-	-		
共起関係 (ムード)	だろう		+		
	う／よう		-		
	のだ		+		
連文機能	前提			-	+
	理由・根拠			+	+
テンス	現在		+		
	過去		-?		

※「+」：その現象が存在すると認める。「-」：その現象が存在すると認めない。

「+?/-?」：一応+、-と認めるが、判定困難の場合¹³。「空白」：未検討の項目。

¹³ 森本 (1994 : 56)

《表7》 先行研究—「しよせん」意味的特徴

特徴 \ 学者	森田	森本	小矢野	武内
既定性				
マイナス評価		+		
原因・理由・根拠			+	+
前提			-	+
結論		+		-

※「+」：その現象が存在すると認める。「-」：その現象が存在すると認めない。

「空白」：未検討の項目。

筆者の作成した《表6》《表7》を通して、そして上掲各研究の問題点のまとめとして、問題提起を次のように提示する。

- ① 構文上の側面から、「しよせん」の先行による研究結果のうち「共起関係（ムード）」に属する「だろう、のだ」以外に他の共起するムードがあるのか。あるとしたら、どのような現象を示すか。「テンス」において果たして「過去形」との相関関係がどうなっているのか。また、先行研究にて未検討の項目「ヴォイス」「とりたて詞」と述語、複文分野の接続助詞といった「共起成分」そして「テンス」に関わりの深い項目「アスペクト」が「しよせん」の成立条件に影響するか。
- ② 意味上の側面から、「しよせん」の持つ意味的特徴とされる「マイナス評価」「原因・理由・根拠」「前提」「結論」など、なお未検討の「既定性」について、それらの特徴は確実に成立するのか。なお、他の特徴が存在するのか。

上掲二点を解明して先行研究の補足を図るために、より全面的に考察を行うことにする。

3.3 辞書による記述

「しょせん」に関する記述は、『広辞苑』『新明解国語辞典』『現代副詞用法辞典』には見られるが、森田の『基礎日本語辞典』にはこの項目が立てられていない。

『広辞苑』と『新明解国語辞典』を調べると、

【所詮】①〔仏〕経文などによって表されることわり。表す文句の能詮に對していう。一遍上人語録「南無阿弥陀仏ばかり—たるべし」②詮ずる所。つまるところ。結局。▽副詞的にも用いる。「—かなわぬ恋」「—子供だ」(『広辞苑』)

【所〈詮〉(副) どんな手段を講じても、普通の意味ではその域を多く出ることにはまず無かろう、ということを表わす。「庶民にとって、マイホームは— [=結局] 紙の夢にしか過ぎないのではないか— [=とうてい] かなわぬ望み」(『新明解国語辞典』)

『現代副詞用法辞典』に比べてわりと説明が少なく、「結局」「とうてい」がその対応の語として立てられているのみで、意味を明白につかむのが難しいと思われる。『広辞苑』の説明が比較的古風なものである一方、『新明解』のほうがいっそう簡略で分かりやすくしているが、その説明が読者の理解にとって多大な助力には到底ならないと思われる。

それに対し、『現代副詞用法辞典』には、「しょせん」について以下のように説明が載せてある。

【所詮】 shosen

- ① いくら地価が下がっても、庶民にとってマイホームはしょせん高嶺の花だ。
- ② コンピュータが進歩したと言っても、しょせんは機械に過ぎない。
- ③ 何のかの言っても、しょせん負けは負けだ。

【解説】 どんなに条件がよくなっても、結果は予想どおり好ましくない様

子を表す。ややマイナスイメージの語。条件を受ける文の述語にかかる修飾語として用いられる。さまざまな条件を提示し、それにもかかわらず予想どおりの好ましくない結果になったことについて、あきらめと慨嘆の暗示を伴う。好ましい結果になった場合には用いられない。

× 何のかの言っても、所詮勝ちは勝ちだ。

→何のかの言っても、勝ちは勝ちだ。

「しょせん」は「どうせ」に似ているが、「どうせ」にはあきらめと慨嘆の他に怒り・自嘲^{じちょう}などの暗示もあり、結果が出る前にあらかじめ予想している場合に用いる。

? あんな高望みすれば所詮落ちるに決まってるよ。

→あんな高望みすればどうせ落ちるに決まってるよ。

「結果が予想通り」という記述は事態がすでに決定されたことをほのめかしていると見て、しかも指摘される二点目—「好ましくない様子」という記述が出現した。以上を通じて、「しょせん」は使用上の制約としてまず揭示されたのが、好ましい事態への接続不能ということである。しかも、プラス条件無視で事態がマイナス的に終わるといふ、予想通りの結果を述べる意味役割を持つとされる。その記述を見て、先行研究の森本（1994）、杉本（2000）において論じられた「どうせ」の「既定性」を想起させられる。しかし「しょせん」使用の際における他の制限が存在するのだろうか、また「どうせ」との間に果たしてどのような区別があるか、更なる意味や使用上のルールなどがあるように思われる。したがって、次節より「しょせん」の構文的・意味的特徴を解明するべく、五つの側面を通して分析していく。

3.4 「しょせん」の構文的特徴についての考察

3.4.1 ヴォイス

受身表現

(89) もちろん、わが国の憲法も、この「法の支配」という原則を取り入れています（四一・七六・八一・九八条）。しかし、わが国において、ほんとうに「法の支配」は貫徹されているでしょうか。法律は国会で作られますが、それは、所詮、帰するところ国会で多数を占める政府与党の意思で決定されます。しかも、制度上、選挙によって政権の交替がありうるわけで、その都度、法律を作る政策決定のイデオロギーが異なることになります。

（中田 考/眞田 芳憲『日本人のためのイスラーム入門』）

例（89）はじきに受身表現で終わる「しょせん」文の場合である。（89）の内容が指すのは国会における可決についての事情であり、そこで「しょせん」を通して常に存在するルールということ述べているが、こうした単純に受身表現だけで文をしめる例はわずかの一例で、非常に希少である。連体修飾節で出現する場合といえ、ないわけではないものの、結局名詞文のほうに重点が置かれるので、「しょせん+受身表現」という形式ではないと思われる。

可能表現

(90) しかし、「同じ夢にも」とする認識は果たして『栄花一代男』の創作以前から西鶴に自覚的に認識されていたのであろうか。結論的にいうならば、「銀の世の中」における銀に無縁で「色しらす」のまま生活に追われる町人にとって、好色の問題は所詮夢としてしか解決できないという潜在的な認識は、『栄花一代男』の創作以前から西鶴に存在していたに違いないが、それは『栄花一代男』の創作を通じて明確に自覚され、序文に明記されたということではなかろうか。その認識が銀の世の中における好色の違った次元での解決を求める『置土産』の世界を志向させることにつながってい

くといえるのである。そのような西鶴の認識の推移は、序文の最後の部分にあらわれている。(西島 孜哉『西鶴文学の魅力』)

- (91) 彼はシルクハットをとり、てっぺんのあたりが薄くなった髪をしばらくのあいだ手のひらで撫で、それからまた帽子をかぶった。つばを指ですつとならした。

「この笛を吹けば、君なんぞひよいひよいと追い払うのは造作もない。でもできることなら今は笛を吹きたくはない。この笛を吹くのはそれなりに力を要することだからね。私としてはあまり無駄な力は使いたくないんだ。力は先のためにできるだけセーブしておきたい。それに、笛を吹こうが吹くまいが、どう転んだところで、君には所詮私の行動を阻止することはできないんだから。それはもう、誰がなんといおうと明々白々なことであるわけだ」(村上 春樹『海辺のカフカ』)

- (92) いずれにしても、国際的な軍事力の行使が、国際社会が直面している問題に取り組むうえで、答えにならないということについては、国際的に認識が深まりつつある、といいいいでしょう。とにかく国際社会が直面している多くの問題を根本的に解決しようとするのであれば、それぞれの問題の経済的、社会的、文化的、人道的な、もろもろの非軍事的な要素を重視し、これらのことに取り組まなければならないのです。その点に直接ふみ込んでいかないうような解決策は、しょせん根本的な解決をもたらすことはできないのです。(浅井 基文『「国連中心主義」と日本国憲法』)

- (93) その間の主要な事柄を記すならば、新美は二年ほど前、到頭撮影所をやめた。新美が自ら語ったごとく、大部屋はいつ迄経っても大部屋で所詮浮び上ることは出来なかった。新美がやめるのと前後して、同じ撮影所の大幹部で同時に舞踊某派の家元でもある有名な女優が映画界から引退した。その女優が実演を添えた舞踊公演というプログラムで、各地へ巡業に出たその一座に、新美も加わった。(後略)(高見 順『草のいのちを』)

例 (90) から (93) までは可能表現とともに現れるものである。述語の内容

については (90)「解決できない」(91)「阻止することができない」(92)「根本的な解決をもたらすことはできない」(93)「浮び上ることは出来なかった」などが現れ、いずれも「できる」の否定形が中心である。それは、主節事態のマイナ斯的立場からより良い状況へ向上させる能力に対しての否定を意味している。「しょせん+可能表現」の場合は他の表現よりやや多いが、根本的にはさすがにまれである。

以上の受身と可能表現以外に、同じくヴォイスに属する使役と自発表現の共起例といえ、皆無だったのである。

3.4.2 テンス・アスペクト

前章において「どうせ」にもテンス・アスペクトの調査を行ったが、二語は過去形の場合で特に相違が見られる。「しょせん」のほうが「どうせ」よりかなり例が出ている。

非過去形

(94) 強がりを使いながらも、シモンズ中佐は間合いを詰められた分だけ、どうしても後退せざるを得ない。モストニュートの憲兵として、実戦的な格闘術や暗殺術の類すら身につけている彼女だが、現場の作業員でしかも怪盗のプロミネンスと比べると、しょせん実際の修羅場をくぐった経験が違う。とうとう壁際まで押し込められた中佐は、やむを得ず、最後の切り札を使う事にした。(秋津 透『要塞衛星ダモクレスの槍』)

(95) 「第一父さんは、大学に行かなかったことを、少しも後悔していないぞ。大学なんてしょせん、時間を浪費する場所だ。その点父さんは、高卒ですぐに専門学校に通い、社会で通用する専門知識を身につけ、現在の会社に就職した。みなが四年間、のほほんと親の脛を齧って遊んでいるうちに、バリバリと働き、給料を稼いだ。自分の手で稼いだ金だ。(後略)」(新堂 冬樹『カリスマ』)

(96) こうした記録を読ませられると、味方の苦しいときは敵も苦しんでいる、真正面から四つに取組んでいるとき勝敗がどちらにどう転ずるかは常に五分五分、という過去の戦訓のあることを嫌でも想起せざるをえない。ギリギリのところまで格闘しているものに与えられる勝利の栄光というものは、何やらマルスの気まぐれによる、つまり所詮は運不運によると、そんな気にさせられてしまう。(半藤 一利『遠い島ガダルカナル』)

例 (94) から (96) は「しよせん+非過去形」の場合である。(94) の話し手は作者で、包囲されたシモンズ中佐の心算を文字化するかのように、敵がいろいろ戦歴を持っていることは承知の上なので、自分は眼前の敵に比べて「実際の修羅場をくぐった経験が違う」ことについて疑いなく受け入れて、両者の差の大きいことをとっくに納得している様子が見られる。(95) で取り上げた会話はある父親の自分の子への話であり、大学というものを「時間を浪費する場所だ」と思い、それを軽蔑する立場に立って述べられている。(96) の場合、話し手の考えでは戦争における勝利ということが人為的奮闘なり軍備なり一切関わらず、それを決定できるのがあくまでも「運不運による」だけだとされている。

過去形

(97) オオナムチ神系氏族、いいかえれば、賀茂氏や三輪氏は古い製鉄技術の担い手であったが、韓鍛冶による新しい製鉄法によって、古い技術はしよせんは追放される運命にあった。タケミカツチの神と争ったタケミナカタの神は負けて逃げたのはそのためである。タケミカツチの神は中央より派遣された組織的、進歩的技術を象徴する鍛鉄の神である。古い技術に固執するタケミナカタの神は、新しい進歩的なタケミカツチの神と争って敗れ、出雲より逃げなければならなかった。(真弓 常忠『古代の鉄と神々』)

(98) 今まで書かれてきた世界史は、ほとんどが「陸の世界史」だった。しかし、モノ、ヒト、情報の移動という観点からみると、海は人類史のなかで予想外に大きな位置を占めている。そこで海と航海を中心に「海からの

世界史」を著してみた。しかし、白い航跡が海に飲み込まれてしまうのと同じで、限られた紙幅のなかで海にかかわる人間の営みの大きさを描くのは所詮無理だったようにも思われる。自己矛盾になるが、感性で海を体感することに文字はかなわない。「海を感じよ」である。(宮崎 正勝『海からの世界史』)

- (99) キケロがアントニウスに対して、どんな批評を下したかを聞けば、あなたの印象も変わるのではないのでしょうか。キケロは彼についてこう書いています。

「肉体が頑丈なだけが取り柄の無教養人で、酒に酔いしれ下品な娼婦と馬鹿騒ぎするしか能のない、剣闘士なみの男」

キケロはあまりにも正直に書きすぎたために、のちにアントニウスに殺され、そればかりかペンを持つ右腕を切り落とされてしまうのですが、私もこればかりはキケロに賛成しますね。

しょせんアントニウスは軍団長クラスの人材だった。私はそう思います。(塩野 七生『ローマから日本が見える』)

- (100) 真実の信仰の灯火が伝えられてきたこの比叡山から、インドへ向けて、今こそその仏恩を返しつつ同時に近代化の手伝いをするということは、日本の仏教がなしえるもっとも価値ある仕事ではないか。昨年の阪神・淡路大震災に際して、私は京都の寺院に被災弱者の救済の場を提供する組織的な運動が起こることを望んだが、若い僧侶のボランティア活動やある特定の寺院の貢献以上のものを日本の仏教界から望むことはしょせん不可能であった。それに比べて堀沢師の興されたこの仕事の意義は大きなものがある。(島田 美穂『證』)

- (101) 中大兄の近江遷都は、不吉な予感と民の怒りを蔵したまま、強行された。

最早、旧都となった飛鳥の都は、遷都でごった返していた。

飛鳥川を下る船、荷物を積んで山の辺の道を北へ向かう車と人の列。特に飛鳥川沿いの道には人が溢れている。しかも、その中で輝いている顔は一つもない。皆口をへの字に曲げ、仏頂面である。とにかく、気に入らな

いのだ。各所に放火したりして騒いではみたが、しょせん烏合の衆では勝ち目はなかった。遷都は強行された。(黒須 紀一郎『役小角』)

(97) から (101) までは「しょせん+過去形」の例文である。述部内容から見て「追放される運命にあった」「無理だった」「軍団長クラスの人材だった」「不可能であった」「烏合の衆では勝ち目はなかった」など、動詞も名詞も形容詞も出ている。「しょせん」を使って話題の事態・状況に対してマイナス的な意見を表明し、後ろに来るものが常に<侮り・見下ろし>の気持ちがこもった内容である。「しょせん」は「どうせ」よりかなり自由に過去形と連結することができ、いずれも過去の時空へ飛び戻って叙述するような感覚での用法であると思われる。

「～ている」

(102) 世界のミリタリーバランスでも、片方がミサイルを持っていたら、こっちはもっとすごいミサイルを持っているぞといわないと、パワーバランスがとれない。スカッド・ミサイルとパトリオット・ミサイルみたいなもんだよ。そこで初めて平和がなりたつわけだろ。非常に危険ではあるけれど、世の中というのは、所詮そういった力関係で動いている。だから、差別されている人たちは、平等にしろというより、自分たちがいかに優位であるかという誇りと実績を示してやればいい。(ビートたけし『だから私は嫌われる』)

(103) 沈んでいる鐘を福井が確かに見届けたと将軍の前で一旦申立ててしまった以上、今となってはもう取返しの付かないことで、実をいえば五十歩百歩である。いよいよその鐘を引揚げにとりかかってから、かれの報告のいつわりであったことが発覚するよりも、今のうちに早くそれを取消した方が幾分か罪は軽いようにも思われるが、それでかれの失策がいきい帳消しになるという訳には行かない。どの道、かれはその罪をひき受けて相当の制裁をうけなければならない。まかり間違えば、やはり腹切り仕事である。こう煎じつめてくると、福井の制裁と組じゅうの不面目とはしょせ

ん逃がれ難い羽目に陥っているので、今さら騒ぎ立てたところでどうにもならないようにも思われた。(岡本 綺堂『白髪鬼』)

例 (102) と (103) は「しよせん+ている」のものである。述語がそれぞれ「動く」「陥る」であるが、「～ている」を付加することによって<動作・結果の持続>を意味している。(102) の場合、世界が話し手の言う通りに「そういった力関係」で動くのが一般化された現象なので、こうした好ましくないかつ持続的に起こる現象について個人的意見を出す際、「しよせん」の出番となる。

(103) の場合は、<罪を背負うのがもはや回避できない>という観念した思考がまず出来て、必ず発生するという気持ちで「逃がれ難い羽目に陥る」結果を受け入れ、どうしようもない窮地に追い詰められた心境が「しよせん」を媒介に表されている。

「～ていた」

(104) 一見、この町の閉鎖性と矛盾する包容力はどこから来るのか。京都の存在意義は、異分子の排他性や拒絶性にあった。千年の古都として存続するためには、交代する権力者をも所詮通過する旅人として不信感をもって応接していた。(森村 誠一『凍土の狩人』)

(105) 「勉強のべの字も知らない」「ボキャ貧」「他人任せ」などと開き直ってみても、所詮は父や長兄に正面から向き合うことなく、逃げ回っていたのだ。本当に自信を持って自らを確立していれば、「なにくそ！」という悔しさをバネにもっと自分を磨き努力したはずだ。それを「自分はどうせ…」という甘えで逃げ回ってしまった。(小林 隆次/武田 國男『落ちこぼれタケダを変える』)

(106) この“地域”は、制度的・政治的な公的な統合体である「国」(陸奥国・紀伊国・薩摩国などの“くに”)である場合も、もっと広域的な「西国」「東国」などの“くに” —正確には「西の国々」「東の国々」という一種の集合名詞か—である場合も、「鎮西」や「蝦夷地」のように“くに”とはい

わずいわば地方として扱われる場合もあった。しかし、どの“地域”にも「くにぶり（風俗）」はあり、また政治的領域たりうる可能性はいつも含んでいたのであるから、所詮ここでいう各級の“地域”には、規模も意義も著しく異なるものの、根底には「くに」という共通の観念が存在していたとあってよい。そのことをみた上で、さしずめ日本六十六カ国の「国」の意味は一応明らかなものとして、ここではおもに広域的ないわば地方としての“くに”を、“地域（くに）”として注目したい。（黒田 俊雄『中世民衆の世界』）

例 (104) (105) (106) は「しよせん+ていた」形式の文である。その中で (104) は直結の場合で、(105) と (106) は「～ていた+のだ」という説明を表す表現と「～ていた+という」という引用の表現が付け加わっている。「～ていた」が独立に表現できるということは、すなわち「しよせん」が過去に持続する事態に対して作用することができることを指しているのではないか。現在・未来の事態についても、過去における事態についても、副詞「しよせん」が主観的意見を示す働きを持つと思われる。

3.4.3 ムード

「どうせ」と同様に話し手の主観的態度を表す副詞である以上、当然のことに「しよせん」もムード表現とは縁の深い副詞である。ところが二つの副詞と共起するものをめぐる特色が一味違うように見える。この節において、まず「～だろう」文について考察を行う。

3.4.3.1 「～だろう」

(107) 「しかし、人類は、自らの文明を善と思い、自然を破壊したのね。調和し、協調しなければならない限界点を越えて、自然を収奪し尽くしていたわけね。でも、大自然は、人間にしてやられるほど柔ではなかった。人類は自らの文明が大自然に与えたツケに今、脅えているわ。大自然が攻

撃を開始したのですもの」

最大の原因は、あくなき人間の欲望であり、その欲望を満たすべく開発された工業化であった。この工業化を促進したのが、利潤追求を第一原理とする資本主義であった。

資本主義を悪と認定したマルクスの直感は、この意味に限っては正しかった。しかし、彼もまた誤っていた。彼の思い描いた共産主義的ユートピアは、所詮、田園的で手工業的な社会をモデルとしたものではなかったらうか。(荒巻 義雄『樹々より木漏陽の国』)

- (108) ソクラテスの出した問題は、人間が価値の上とみるか、価値の下に人間があるとみるかの問題でもあった。ソクラテスには善の下に人間をおく見方がなされていたといえよう。善は超越的なもので、人間のためのものではない。人間的なことをこえたもので、人間の目的、理想としてあるとしても、人間に奉仕するものではないとする、善をたてまつるところがあるということだ。そのためか、人間を善実現のための存在、善のために奉仕し、仕えるのが人間だとするところがある。

しかし私はそこにたてられた目的がいかにもすぐれたものであろうと、どのような理想であらうと、理想のために人間があるのでなく、人間のために理想がある、人間のために人間が理想をたてるのであって、その逆ではない、人間こそ理想の、善の目的としてめざすものという思いをもつ。善といい、理想というも所詮は人間の都合に合ったものであろうということだ。(荻野 恕三郎『人生の意味と価値』)

例 (107) (108) は「しよせん+だらう」構文である。一見「どうせ+だらう」構文とは同種の意味を表しているかのようにであるが、実際は前後文脈関係の側面から言うとやや違いが存在するのである。述部の部分を見れば「(共産主義的ユートピアは) 田園的で手工業的な社会をモデルとしたもの」「人間の都合に合ったもの」であり、主として名詞の「もの」をめぐって叙述しているが、連体修飾から考えればややマイナス的に偏っているといえよう。(107) の場合は文末に反問する語気を含んでいるので、肯定的に捉えることができよう。そしたら完全な「AはBだ」という名詞文の形になり、そのマルクスの思い描いたユ-

トピアの内実を「しょせん」を通して提起したものである。(108)の場合、「しょせん」のつく主節が現れる前に、先行文脈は話し手が理屈を述べて先立てている。ところが最後に自分の前述した主張を翻すように、「しょせん」によって自分の論議しているものが帰するところ無意味である、というふうにより主張の説明を堅持することなくやめたのである。

(109) 一九四三年頃、日本の新聞は、連日『大東亜共栄圏』のことを書きたて、大東亜共栄圏のための会議が東京で開かれたことを報じた。メンバーは中国の親日政治家汪兆銘、インドやビルマ等の反英・独立の志士・ボース、バーモウ、タイのワンワイタラコン殿下等であったが、その中にもっとも若い、ビルマ独立の志士オン・サン少将がいた。女学校二年と小学校五年の私たち姉妹は“独立の志士”などという言葉に酔い、特に一番若いオン・サン少将を素敵だと思い、姿を見ようとわざわざ迎賓館の前まで行ってみたりした。独立の、共栄のといいながら自分の国が他国を植民地にしているおかしさに気づかないのはお粗末の限りだが、庶民（おまけに子ども）とはしょせんそういうものなのだろう。“聖戦”を疑いもしなかったのだ。（関 千枝子『ヒロシマ花物語』）

(110) 大井には十年間連れ添った内縁の妻の明子がいる。いつか、こういう日がくることは、大井とかかわった当初から、つねに心にたたみこんであったし、はなれてゆく男の気持を、むりやり引きとめようとする猛々しい感情の空転は、河村英二を失った際に知りつくしてもいた。男がいったん別れると決めたときは、女が泣いても、わめいても、さほど効果はないだろう。一時的な惰性でもどったとしても、またほどなくはなれようとするに違いない。

大井が三日つづけてあらわれなかったその日から一週間だけ、園子は大井を待つことにした。自分で定めたその日々がすぎると、園子は、念頭にゆらめいていた大井の姿を、脳の深いところへ押しこみ、固く封印した。つらいとも哀しいとも感じなかった。男と女の関係は、所詮、こういうものなのだろう。（藤堂 志津子『恋人よ』）

(111) 今でも、瞼を閉じると松宮先生のお姿をいとも簡単に思い浮かべることができる。生ある者にはいつかは必ず死が訪れる。美人や天才は薄命だという。松宮先生が天才であることに異論はないが、それにしても早すぎた死のように思われる。アユや河川にとっても、とてつもない宝物を失ったような気がする。これから、という時に神はなんと非情なことをなされるのだろう。松宮先生の死は、かえすがえすも残念でならない。

所詮、人の一生などというものは、川面を流れるうたかたの泡のように、かくもはかないものなのだろうか。(松宮 義晴/田子 泰彦『愛しきアユ サクラマスそして、川へ』)

(109) (110) (111) は「しょせん+のだから」構文の場合であるが、「しょせん+だろう」構文に比べて顕著な区別がつかないと思われる。その中、共通しているのは「しょせん+名詞(もの)+のだから」という構成である。(109)と(110)では「しょせん」につく主な述部が代名詞だけだったので、それぞれの主語「庶民(おまけに子ども)」「男と女の関係」に対する叙述内容が文脈に沿ってバックしてはじめて「しょせん」文の意味をつかむことができる。(109)の話し手は独立の志士という言葉に酔ったりした原因は、自分が庶民であるわけだと語っている。(110)の話し手は三人称の作者であり、文中の園子が直面した男女関係のありさまがそもそも存在していたと見て、自ら意見を表明したのである。(111)の場合、主語「人の一生などというもの」は前例よりいっそう人生の道理について語る話題であり、述部に「川面を流れるうたかたの泡のように、かくもはかないもの」が来て、世の無常が説かれる。

上掲の「しょせん+だろう」構文例は、いずれもあらかじめマイナス的場面を展開していろいろ語った最後、「しょせん」文によって全文を包括的に片づけるという段落構成になっている。なぜ筆者がここで「まとめる」でなく「片づける」をもって解釈したのかというと、「しょせん」が牽引する文の内容は、単なる結論だけでなく当該事態の前提でもありうるものが肝心なのである。

さて、これまでの「～だろう」の働きに注目されたい。文の構成からは明らかに「～だろう」文であっても、「～だろう」というムード表現はさほど文を左右する力がないように感じられる。もっとも述部は特に格別違った表現形式でもないから、その理由は「しょせん」にあると考えられる。ということは、「～

だろう」の効果を「しょせん」が消去したのだと予想されよう。この現象を起こした原因をいっそう的確に捉えるために、次の例をもって「しょせん」を離脱させると文の意味がどう変わってくるか見てみよう。

(108A) 善といい、理想というも所詮は人間の都合に合ったものであろう。

(108B) 善といい、理想というも所詮は人間の都合に合ったものである。

(108C) 善といい、理想というも人間の都合に合ったものであろう。

(108A) から (108C) は例 (108) を部分的に抽出してできたものである。これをもって「~だろう」と「しょせん」それぞれの働きについて分析する。(108A) は例 (108) から「しょせん」文をそのまま移したものであり、(108B) は (108A) の「~だろう」を取り除いて「~だ」という断定表現に替えたものである。(108A) の「しょせん」のみ削除した場合 (108C) となる。(108A) と (108B) を比較すると、あえて言うなら些細な語気の差異が感じ取られるだけで、いわば叙述上の操作に過ぎず、文意味まで影響が及ばないと思われる。が、(108C) を併せて見ればいっそう見当がつくであろう。単なる「~だろう」文の場合、推測のモードは難なく成立する。(108C) の場合では (108A) のような話し手の持つ確信感が失い、個人的推測にとどまる。しかし「しょせん」が加われば、叙述内容は一気に確信までレベルが上がってしまう。つまりこうした現象が起こる理由は「しょせん」にあり、当該事態が予想を通して決定的に決めつけられ、推測の語意をカバーして確信の語意へと変貌したのである。要するに、前章においても触れた「既定性」という特性に相当するものである。この「既定性」が働くことによって、「しょせん+だろう」構文における推測の意味が「どうせ+だろう」構文の場合と同じように薄れていく。その代わりに推測が想定に、つまり確信した予想になってしまうのである。また、以上の例文において、「しょせん」にも「マイナス性付与」という特性を帯び、もっぱら事態に対して「軽視」の気持ちを表していることがわかる。

3.4.3.2 「~のだ」

「しょせん+のだ」との構文形式について、森本 (1994) は「しょせん」が

こういう「話し手の主観的態度の表現を伴うことが多い」と指摘しているが、筆者が本稿にて使用される例文を調べたところ、確かにこの種の構文形式の数量がリードしている。「しょせん」をもって主張を訴える際、やはり「のだ」という話し手の説明の態度をより顕在化する成分が随伴すれば、文のまとまりがよくなり、結論として前提を回顧する立場になると思われる。しかも「のだ」と共起する際、「しょせん」文の述部に関する共起傾向が「どうせ」との間に違いが生じるようである。次の例を見よう。

(112) そして、努力しても変えられないものに対しては、淡白であることが大事です。「しょせん、この世のことは、この世のことなのだ」と思って、過ぎていくものに心を奪われないことです。そういう透明な心を持ち、執着を持たずに、さらさらと生きていくことです。(大川 隆法『幸福の法』)

(113) 私の母と姑—この二人のおばあちゃんは、いわば私をめぐってのライバル同士。お互いに相手が煙たくて、なるべく寄りつこうとせず、はじめからギクシャクした間柄だった。

それでも私は、娘がまだヨチヨチ歩きのころには、この二人が仲良くできるようとハワイの旅に誘ったりして、小さい孫を間に入れ、アレコレ努力もしてみたのだが、結局は骨折りゾン。しょせん、水と油なのである。

(小林 千登勢『されど道づれ嫁姑』)

例(112)(113)の場合、「しょせん」は「放棄」の意味を帯びている。述部がそれぞれ「この世のことは、この世のこと」「水と油」であり、変えられないニュートラルな状況について述べている。(112)では「努力しても変えられないもの」に対する大事なことが淡白な態度であると語られ、つまりその「努力しても変えられないもの」を「この世のこと」にした上で、そもそもそうであったから諦念の心持でいるべきだと、話し手が説法している。(113)において話し手は自分の母と姑の仲について語っているが、この例は「しょせん」の指す意味を説明するにはうってつけの根拠であると思われる。「はじめからギクシャクした間柄だった」二人に対し、話し手があれこれ考えて多大な努力をしても、その間柄は依然として良いほうへは進まないでいる。実ははじめから知っ

ていたことなので、最後に話し手は「水と油」という言葉をもって二人が一生合わないままで終わる>と自分の意見を示したのである。すなわち、「しょせん」の代表する構文関係が、結論と同時に事態の前提である、ということを再び証明したといえよう。

- (114) 社内ではおとなしくせに、取引先に行くと、自分をやたらと大きく見せようとする人がいる。商談を自分のペースで進めようという肚なのかもしれないが、聞いているほうが恥ずかしくなってくる。

「そのプロジェクトも私が担当しました」「今度、アメリカ支社から、ぜひ来てくれと誘われているのですが…」などと、得々と自慢するのは相手の反発を招くだけである。たとえ、それがある程度本当のことであっても、相手は感心するどころか、「どうせ、話の半分は脚色だろう」と思うだけだ。

しょせん、大言壮語は自信のない人間が自分を大きく見せようとしてするものなのだ。だから、すぐに底が割れてしまう。(堀場 雅夫『仕事ができる人できない人』)

- (115) いずれにしても、国際的な軍事力の行使が、国際社会が直面している問題に取り組むうえで、答えにならないということについては、国際的に認識が深まりつつある、とあっていいでしょう。とにかく国際社会が直面している多くの問題を根本的に解決しようとするのであれば、それぞれの問題の経済的、社会的、文化的、人道的な、もろもろの非軍事的な要素を重視し、これらのことに取り組まなければならないのです。その点に直接ふみ込んでいかないような解決策は、しょせん根本的な解決をもたらすことはできないのです。(浅井 基文『「国連中心主義」と日本国憲法』)

- (116) (前略) 運がよかったのだと思いたいが、私と息子の弾が椅子の羽の端っこの席に腰を降ろしてひと休みしたのを見計らったように牧師が登場し、説教が始まった。そして、二言三言の後「静かに祈りなさい」と宣う。すると、まわりの人々が、皆、祈りはじめる。そうなる私と私も昔、学生の頃、説教を聞かずにおしゃべりしていてチャプレン(学校神父)からひどく叱られた記憶がよみがえり、また、弾も祖母の願いで幼児洗礼を受け「グレ

ゴリー」なるミドルネームをいただいていたのを思い出してか、一時説教に聞き入ることになってしまう。ところが、こちらがその気になると、しょせん観光客向けなのか、予期に反して、挨拶程度のメッセージが終わると、牧師はすぐに舞台裏に消えてしまった。多少、拍子抜けの感がいなめず、もの足りないという気さえした。(稲本 正『ソローと漱石の森』)

(117) 実際、高校生くらいで1～3年間留学して、どのくらい英語力が伸びるかという、たいしたことはない場合が多いのです。口先だけはアメリカ人なみにしゃべりますが、中身は日本の普通の高校生と同じで「キャー、あの子かっこいい」程度のことしか言っていなかったりするのです。もともと相当な学力があつて語学のセンスもよく、トップクラスの高校に留学できれば多少の違いはあるのですが、それにしても、しょせん高校生は高校生なのです。(栄 陽子『現代アメリカ留学事情』)

(114) から (117) までの場合、「しょせん」は「軽視」の意味を帯びている。述部内容については「大言壮語は自信のない人間が自分を大きく見せようとするもの」「根本的な解決をもたらすことはできない」「観光客向け」「高校生は高校生」であり、(114) (115) はマイナス的な、(116) (117) はニュートラルなものであるが、そのうち述語が動詞であるものは一つしかない。述語だけ見たら必ずしもマイナス的なものを示しているのではないが、文の前後関係を考慮に入れると、たちまちマイナス性が読み取れてくる。例えば (116) の「観光客向け」という言葉は本質的には悪い意味を含まないものの、<本当はもっと内容のある儀式なのに、観光客であるために省略された過程>というような言外の意味が確実に伝達され、話し手は「しょせん」をもってこの仕方に対する「軽視」を表明したのである。(117) の場合、「高校生」という学級の呼称は本来中立的なものであるが、その段落に先行する内容が高校生の英語能力について悪い評判をしておいた上で、末には「しょせん」をもって話し手の立場からのマイナス的前提を受け手に提示したのである。

(118) 僕はなぜババが突然すべてを捨ててヨギの生活に入ったのか、そのわけを尋ねたことはない。彼は捨てるものなど生まれた時から何も持ってい

ないことに気付いたのだ。多少の知識は持ち合わせているものの、しょせん借り物なのだ。そしてそう気付いた瞬間から、彼の真理の探求への旅が始まったのだ。僕はそう確信した。究極のところ、人は真理を探し求め続ける以外、救われる道は閉ざされたままなのだ。(伊藤 公朗『ヒマラヤ音巡礼』)

- (119) 本当に治療がうまい名医のもとには、いくら高くてもどんどん人が集まってくる。なかには、赤ひげみたいに貧乏人からは金をとらないという、医者も出てくるだろう。そうすれば薬を患者に出すことによって、国からその利鞘みたいな金をもらって太ろうとする医者がいなくなるし、無闇矢鱈な検査もやらなくなる。

だいたい人間には病気を自分で治す力があって、薬はしょせん補助的なものなんだよ。ところが健康保険制度では問診だけで直してしまうような名医は薬を余り出さないから金が儲からないし、反対に、馬に食わせるほど、薬ばかり出すヤブ医者が、金持ちになっていくといつてもないパラドックスがまかり通ってしまう。(ビートたけし『やっぱり私は嫌われる』)

- (120) 木場石材店危急存亡の秋に際して、保田は保田なりに懸命になっていた。出来る限りの努力はしたつもりだった。でもそれは所詮、他人ごとだったから出来た努力だったような気もしている。

何故なら。それは、向かいの家の火事にバケツで水をかけるような努力だからである。火の中に飛び込むような無謀さを決して伴わぬ、常識的な努力だからである。誠意を以て努力したのは事実だが、何の役にも立たぬのも事実で、役に立たぬのに感謝はされる。感謝されるのは当事者ではないからで、火事を出した家の者だったなら、それでは済むまい。

所詮、保田は他人なのだ。(京極 夏彦『塗仏の宴』)

(118) (119) (120) の場合、「しょせん」は「余計」の意味を帯びている。森本(1994)では「しょせん」についての結論として「諦め、軽視などの気持ちを添えることが多い」という点が指摘されたが、筆者の主張では諦め、軽視

以外に、さらにこの「余計」という気持ちが表されていると思われる。例えば、(118)の場合「借り物」の指すものは「多少の知識」であり、その知識は人間の生死にとって無用なもの、つまり余計なものだとされている。余計なものに過ぎないから大したものを見ないで真理を探究しはじめた、ということである。

(119)の場合、一見「余計」とされるまでもない主語—「薬」だが、述部は「補助的なもの」で、前文脈では「だいたい人間には病気を自分で治す力がある」ことを前もって語り、続いて「しょせん」を使って薬物の役割を前提に掲げた。そこで人間は体の復元力に頼るべきで、薬に頼るべきではないことを戒めに言った。要するに、薬は復元力のある人間には必要がないから余計なものだ、という含意が存在するであろう。その意味は「しょせん」を通して付加されるのである。(120)の保田は自分を「他人」だと思い、向かいの店が家事になったといえども、常識以上の努力をやるのはさすがに余計なお世話になってしまう可能性があるため、適当にやればよいという考え方が出る。それは「しょせん」の持つマイナス性と呼応していると思われる。

(121) どこかから、声が聞こえる。「わたしたち、ただでさえ無理に無理をしてきたんだわ。船から出て…ヌバ人の中に入って…あたらしく得た能力でヌバ人を従えるなんて…それだけでも、あり得る話じゃなかったのに…それだけでも、たとえあり得たとしても数百年、数千年かかっても不思議じゃなかったの…その上まだ、領主として領土の切り取り合いをやり、すべてを従えて王になるなんて…それをわたしがいなくなったからってひとりきりでやろうとするなんて…所詮無理な話だったんだわ。そうよ、いっさいが長い夢。夢でなければこんなこと、あるはずがないでしょう？」(眉村 卓『迷宮物語』)

(122) 「勉強のべの字も知らない」「ボキャ貧」「他人任せ」などと開き直ってみても、所詮は父や長兄に正面から向き合うことなく、逃げ回っていたのだ。本当に自信を持って自らを確立していれば、「なにくそ！」という悔しさをバネにもっと自分を磨き努力したはずだ。それを「自分はどうせ…」という甘えで逃げ回ってしまった。(小林 隆次/武田 國男『落ちこぼれタケダを変える』)

「しょせん+のだ」のうち、過去形が接続するか否かという疑問について調査した限り、例(121)(122)の二例以外にはすべて非過去形である。(121)「無理な話だった」と(122)「父や長兄に正面から向き合うことなく、逃げ回っていた」という名詞と動詞の過去形が各一例であるが、その文脈全般を通して見ると、関連する段落が全部過去形で述べている。つまり、いずれも回想の話題で現れることがわかる。「～のだ」の述語過去形の場合に関して、「しょせん」と「どうせ」とは一致した傾向を見せる。

以上を見てきたように、「しょせん+のだ」構文における「しょせん」は「どうせ」に同じく「マイナス性付与」の特性を含み、「軽視・余計・放棄」三つの意味の場合が欠けることなく整っている。しかも主節の述語は名詞が優位に立っている。過去形はこの種の構文形式と共起はするが、「しょせん+過去形のみ」の場合ほど数が及ばないことがわかる。

3.4.3.3 「～にきまっている」

(123) 職人の必要な文化は、ごく一部の人がごく一部の人のために作ったものなんだ。(中略)

全てを中流にしてしまったということが、全ての文化を駄目にしたということだよ。文化というのは、しょせん金持ちのためにあるにきまっているんだ。貧乏人の世界に芸術なんて言うのはいらぬわけだから。だいたい、貧乏人の芸なんて見たかないよ。(ビートたけし『やっぱり私は嫌われる』)

(124) 一方、梨南子は、妹と顔を合わせようともせずに黙々と食事を準備している。また喧嘩でもしたのだろうか。この二人は、片方の機嫌がいいともう片方の機嫌が悪い、ということが多い。

亘と稔は、触らぬ神にたたりなし、という表情で、ソファで新聞を読んでいる。

「ふふ、そんな侮蔑の目で見ないでよ。女がそうやってお高く止まっていられる期間はほんの少しよ。自分が一番若いと思ったら大間違い。毎年、次から次へとあんたよりも若い子が出てくるんだから。ところてんみたい

に、女は『若い女』という箱の中から年々押し出されて、下に落ちていくの。男なんて、しょせん女は若い方がいいに決まっている。誰かにたかるんだったら、形のあるものをねだったほうがいいわ。残るものでないかね。若さに対する報酬をモノで払ってくれるのは今だけよ」(恩田 陸『黄昏の百合の骨』)

「にきまっている」という慣用表現は比較的に「どうせ」の分野において大いにその役を果たしているが、「しょせん」との接続例がわずかに上の二例しかない。これは、「どうせ」と「しょせん」の本質による相違がもたらした現象であるように思われる。その理由は、論理性の順序や、主節内容に対する認定のニュアンスなどといった差異にある。主語と述部内容を還元すれば、(123)は「文化というのは金持ちのためにある」、(124)は「男なんて、女は若い方がいい」になる。二つとも世間の道理のように大きい言葉で語られているが、それを決定的な主張にするために、話し手は「にきまっている」をもって表現する。次に、それをいっそう不動の道理かつマイナス的基準にするために、話し手は「しょせん」を登場させる。(123) (124)を見てわかるのは、例文の中で指摘されたことは絶対的真理とは言えず、必ずしも一般的通念として受け入れられないことである。ところが、話し手は自分の判断によってそれらのことが頻繁に発生するからやがて通念であると認定した際、この「しょせん+にきまっている」構文を通してその概念を成立させ、「軽視」の意味を付け加えるのだと思われる。

しかしこの種の構文は事実上少数である。その理由は、恐らく「にきまっている」というムード表現の性質にあるだろう。「～にきまっている」というムードは、述部がプラス・マイナス無視で接続されるので、必ずしもマイナス的な文と共起するのではない。したがって、マイナス性を担当する「しょせん」との相性がそれほど高くない所以であると思われる。

3.4.3.4 「～にすぎない」

「しょせん」とともに出現するムード表現の中、「～のだ」に次ぐ比較的多く観察されたのが、「～にすぎない」という用法である。この用法の前に来る述部内容は常に<最小限の程度のこと>を意味している。「しょせん」と共起する際

どういう特徴が浮かぶのか、例を通して見てみよう。

(125) 千佳子は、ゆっくりと話しだした。「よく世間でいわれるように、わたしもそれは相手に対する愛情が深いがためにするものだと思っていたんです。でも、それはごまかしにすぎないことがわかりました。愛情の度合いなどとは関係なしに、自分のために、自分自身の利益を守ろうとするために、そういう感情がわいてくるんですね。自分の領域を侵害される恐れから気持ちが苛立つにすぎないのであって、しよせんは自己防衛の表われにすぎないってこと、そして、わたしにははじめから嫉妬などする資格がなかったことに気づくまで、とてもながい時間がかかりました。あなたがあれこれと言いつつなされたように、わたしもたくさんの言いつつをしながら生きていたんです」(笹倉 明『にっぽん国恋愛事件』)

(126) しかし愛敬は、いつときに作れるものではない。普段の心がけからその人に自然に備わってくるものである。また快活さのない愛敬は、所詮こしらえものにすぎない。同じ愛敬でも、こしらえものは、作った愛敬であり、妖しくなまめかしい「愛嬌」となって、人の好感を得られない。(清水 栄一『勝ち運をよぶ心の力』)

(127) 読者のなかには、手記のなかに出てくる各自の悩みを読んで、「甘ったれるな」と憤慨する人もいるだろう。

とくに長引く不況のなかで、必死の就職活動によっても職を得ることができない人びと、雇用調整で解雇された人びと、あるいはその危険にさらされている人びとなどから見るならば、なんと「優雅な」悩みと受け取られるかもしれない。

しかし、そうした読者に理解していただきたいのは、「東大卒」には特権や優越的地位があるといっても、所詮は会社組織の歯車のひとつにすぎないこと、そして、その多少の特権が仕事の充実感や人生の幸福感をもたらすものではないことである。(川人 博『「東大卒」20代の会社生活』)

例 (125) から (127) にかけて、「～にすぎない」の直前に現れる述語はすべ

て名詞である。述部内容の性質を見ると、「自己防衛の表われ」「こしらえもの」「会社組織の歯車のひとつ」などがある。その中で(126)の「こしらえもの」がはっきりとマイナス的に捉えられるが、(125)の「自己防衛」と(127)の「会社組織の歯車」を品定めすると、それだけではニュートラルな言葉であると認められる。しかし全文を通して見れば、疑いもなくマイナス的に変わってくるのがわかるであろう。「しょせん」によって「～にすぎない」の指す最小限の程度にマイナス性を付与し、文全体に「軽視」のイメージが伺われる。

(128) 親子の愛だとか何だとか言っても、月に二百万円て聞いた瞬間に子供の顔は変わるよ。ただだから、お父さん、おじいちゃん死なないでって言うけどさ。月に二百万円だて言われたら、死んでって言うよ、例えば、このままだとガンで死ぬと言われてたのを、家まで売って治したというようなことを、何で今まで聞かなかったかという、結局はそこまでやろうとする人はいないということなんだよ。国の保険でまかなえる範囲の治療ならして下さいって、みんなそういうものなんだ。

それ以上のことだてやりゃあやれるわけだけれど、絶対やらない。人のふんどし使って治療してもらって、おじいさんが死にゃ泣いて、やることはやったんだて言うやつがいるけど、あれは嘘だよ。全然やってなんかいないんだ。親子の愛だとか、人間愛だとかいくら言ったって、日本の医療制度に完全にのっかった上での、しょせんインチキくさい愛に過ぎないんだから。(ビートたけし『やっぱり私は嫌われる』)

(129) 高い公租公課は航空会社の重荷になっていたが、規制による無競争の時代には表に出なかった。格安航空会社の参入もなかったのも、競争とはいうものの、しょせん温室の中の表面的な戦いにすぎなかった。公租公課が高負担にはなったが、それらはすべて空港整備に充てられるのだし、空港の絶対数が少ない時代の新空港は必ず高需要が保証されていたからである。(杉浦 一機『空港大改革』)

(130) 2年半前、「神戸」の人々は誰もが口を揃えて憤ったものです。「TVは嘘つきだ」と。無理からぬ話です。被災地以外の人々へ向けての“お涙

頂戴” エピソードばかりを延々、繰り返していたのですから。「報道」なる大義名分を錦の御旗に、所詮は「悲劇」を“覗き見”していたに過ぎぬのです。地域密着型のラジオのほうに余程、報道の原点を貫き通しました。井戸水の在り処を、病院の場所を、自衛隊風呂の場所を、生活情報として流し続けたのです。(田中 康夫『嗤う!』)

例(128)と(129)における述語は依然として名詞のものであるに対し、(130)が唯一の動詞例である。これまでの名詞と動詞の割合を見る限り、「しょせん」が極めて頻繁に名詞と共起するのは言うまでもない事実となっているだろう。

(128)「インチキくさい愛」(129)「温室の中の表面的な戦い」(130)「悲劇」を“覗き見”していた」というマイナ斯的な述部内容であり、前にも言及したように、前文脈を参考しない限り「しょせん」文の意味をつかむのは難しい。しかも「しょせん」の導出する話題から見れば、例えば(128)親子の愛、(129)航空会社の競争、(130)TV報道の真義などといった、ほとんど厳しい・堅苦しい・本気な・広範な話題であると言えよう。これも「しょせん」を議論する際、重要な特徴である。また、(125)から(130)において観察されたように、「しょせん+にすぎない」構文の場合、「しょせん」の表す意味が唯一の「軽視」の意味であり、「放棄」「余計」という意味役割は全く存在しないことがわかる。

3.4.4 とりたて詞

3.4.4.1 「～しか～ない」

調査の中で、「～にすぎない」と数が相当するもう一つの表現「～しか～ない」が注意を引く。とりたて詞¹⁴に属する「～しか～ない」文は、主語となるものの性質が限定されていることを中心的に述べる表現であり、この<限定>という特性のためか、「しょせん」との共起がかなり生じる。次の例をもって説明する。

¹⁴ とりたて詞(とりたて助詞)の位置づけについて、寺村、奥津、沼田などといった従来の学者によって「とりたて詞」と「ムードの表現」に二分されているが、前掲したムード表現とは文法的に使用制限が多かれ少なかれ差異があるので、ここでは「しか」「だけ」を別に一項目を立てて論じることにした。

- (131) (前略) たとえば、全く日常化してしまった「いじめ」があげられます。どんなに追いつめられたり、殺されそうなほど「いじめ」を受けたとしても、子どもにはどうすることもできません。だって、しょせん大多数の子どもには、学校の集団というものしかないですからね。そこで、悲劇が起きてくるのだと思います。だからこそ、新しい成長の場が必要ではないでしょうか。それは、第二の学校ではない、「個」が認められる場所でなくては意味がありません。(小林 竜太郎『誇りです、登校拒否』)
- (132) 英領インドのほぼ三分の一を占めたナワブ (イスラムの太守) の支配する王国やマハラジャ (ヒンドゥーの藩王) を戴く藩王国は、独立と同時にインド共和国に吸収され (一部はパキスタン併合)、旧王族はインド政府から支給される年金で生活していたが、この年金制度もその後廃止された。民族資本を育成し、ゆくゆくは「社会主義型社会」の建設を目指す国民会議派政権にとって、旧王族の存在はしょせん封建制の遺物でしかない。(五島 昭『インドの大地で』)
- (133) 1520年3月26日にスペイン北西部のサンティアゴ＝デ＝コンポステラで開かれた議会で、国王は議員たちを懐柔しようとしたが、冷たく拒絶されただけだった。4月13日、議会はスペイン北西部の港湾都市ラ・コルーニャに移された。そこにはカールを乗せてドイツへ向かう船隊が待機していたからである。それから1ヵ月以上、闇取引や圧力、贈賄などのさまざまな手段が講じられ、かろうじて過半数を越える賛成票を獲得した結果、5月20日によりやくカールは船に乗ることができた。彼はスペインの貴族たちがたがいに争わないよう、かつての家庭教師であるアドリアン枢機卿に摂政職をゆだねて国を離れた。しかし、これは大きなあやまりだった。アドリアン枢機卿は人びとから敬われていたが、しょせん外国人でしかなかった。そして自分たちが軽んじられていると感じたカスティリヤの人びとは、団結心をいっそう強めるようになったのである。(遠藤 ゆかり『カール5世とハプスブルク帝国』)

(134) プラスラン公爵も強情なデオンには、ほとんど手を焼いたらしい。結局、ゲルシイが大使館の主と決まっている以上、プラスランはデオンの格下げを考え、全権公使の肩書を剥奪して秘書の地位に逆戻りさせることにした。当然のことながら、デオンはこんな処置に満足できない。ゲルシイの如き人物の部下として働くくらいなら、辞職しようと思決意する。

とはいうものの、デオンとゲルシイのポスト争いも、所詮は彼らを背後から操っているヴェルサイユ宮廷の権力争いの縮図でしかない。ルイ十五世とブロリー伯爵とデオンを結ぶ「機密局」と、寵姫ポンパドゥールと外相プラスランとゲルシイによる政府官僚機関との対立は、ポンパドゥール侯爵夫人が不倶戴天の敵としているブロリー伯爵への憎悪と相まって、一段と激化していたからである。(窪田 般彌『女装の剣士シュヴァリエ・デオンの生涯』)

例 (131) から (134) は「しょせん+しかない」構文形式のものである。そのうち (131) の場合は、「～しか～ない」の「ない」がそもそもの役割—形容詞として使われているのに対し、(132) (133) (134) すべての場合、離れずに一つのまとまった言葉として「～でしかない」の形で出来ており、それが文末に付加することによって「ただの～にすぎない」のような意味を表しているのである。すなわち「～でしかない」の場合、「～にすぎない」という表現とは意味的に似通っていることが理解されるのではないかと思われる。また、述部内容としては「学校の集団というもの」「封建制の遺物」「外国人」「ヴェルサイユ宮廷の権力争いの縮図」などの名詞述語であり、ニュートラルなもの（学校の集団、外国人）もあればマイナス的なもの（封建制の遺物、権力争いの縮図）もある。

(135) 「この仕事は自分に向かないんだ」「好きではない」などとぼやきながら、適当にやっているような人は、しょせんじり貧になっていくしかない。

いまの仕事を「辞める」と言い出したとき、誰も惜しんでくれないようでは他の仕事についても決してうまくいかないだろう。(川北 義則『39歳の誕生日までにしておくこと』)

(136) 「火事じゃ」の声に驚いて、若夫婦が外へとび出した。「赤ん坊を忘れた」と気がついた母親が、炎に包まれた家にとび込もうとすると、夫が妻の袖をつかんで言ったという。「あとから、いくらでも産めるから…」
子供のためと言いながら、所詮は、自分のことしか考えていないことに驚く。(明橋 大二/伊藤 健太郎『なぜ生きる』)

(137) 思えば、現皇后の婚約・結婚報道はテレビ放送が開始されて間もない頃のことであった。人々はメディアへの接触のしかたを学習していなかったから、受け手側からの批判、シラケ・ムードはおこらなかった。だが、その後のメディア社会で、受け手は経験的に学習能力を発揮していく。とくに皇室イベント報道では、先の天皇死去報道の「異常なバカ騒ぎ」(おすぎ、前掲『東京新聞』)に気づき、また、その後の大喪の礼や即位の礼、大嘗祭報道では政治的意識操作を嗅ぎとっていった。礼宮と川島紀子の婚約・結婚報道では、3LDKの大学教員宿舎に住む「普通の女の子」のサクセス・ストーリーというシナリオをつくり、“紀子ちゃんブーム”を煽っていく。が、“結婚できなかつたら皇籍を離脱する”という礼宮の発言(『週刊文春』一九九六年九月五日号)のなかに、スキャンダラスな一面を感じとっていったのであろう。受け手には所詮、バブル全盛時代の“楽しき学園物語”に登場する“若いカップルの恋愛ごっこ”程度にしか映らなかつた。(門奈 直樹『心とメディア』)

例 (135) (136) (137) において、「～しか～ない」は動詞と共起している。この場合動詞と共起するものが他の項に比してやや増加したが、全般的に考慮すると、さすがに数が少なく、対する名詞例が圧倒的に多いのである。(135)「じり貧になっていくしかない」(136)「自分のことしか考えていない」(137)「“若いカップルの恋愛ごっこ”程度にしか映らなかつた」という述部内容が含み、「じり貧」「自分のこと」「恋愛ごっこ程度」などの言葉遣いから伝わるのは、いかにも動詞文の場合のほうが名詞の属性が的確にマイナス傾向であることであり、事態を言明する動詞述語は属性に拘泥しないように感じ取られることである。この場合、話題の主語やその場の事態がそもそも<まともではない>という気

持ちが動作の存在を通してはっきりしてくるのである。

以上の「しょせん+しかない」構文をまとめて見ると、(131) から (137) は全部「軽視」の気持ちを伝達していると判断されよう。ただ (131) の場合、つまり形容詞述語の場合は「軽視」の気持ちが薄く、もし動詞述語の場合に替えて「しょせん大多数の子どもには、学校の集団というものしか持っていない」であったら、「軽視」の気持ちはいつそう簡単に捉えられるだろう。

ちなみに、「～しか～ない」の同類とされる「～だけだ」という表現も「しょせん」と共起する例が発見されたが、極めて少数で二例しかない。

3.4.4.2 「～だけだ」

(138) 伊崎はたちあがって、冷蔵庫からビールの小びんを三本もってくると、栓をあけ、一本ずつ江間とエラに渡した。

「コップはいらんだろ。じかにやってくれ」

「妙な暮し方をしてるんだな、きみたちは」

江間は冷えたビールを、びんの口から飲んだ。彼は子供のころ、ラムネを飲んだときのことを思い出した。

「こいつは、おかしい奴だね。ほら、ピカソの版画の複製にうんとエロチックなのがあるだろ。あれを出してきては、この構図でやれ、なんて言うんだから。たまんねえよ」

この部屋でジーンズのパンタロンをはいて喋っている若々しい伊崎と、外で見る彼との落差が江間にはどうしても理解できなかつた。だが、しょせんこんなに自由になれるのは、部屋の中だけだ。一步外へ出ると日本の法律に首根っこを締めつけられて生きるのだ。(五木 寛之『戒厳令の夜』)

(139) ママ、こういふと、かろうじて自由になる蔓で、思いつきぎゅっと僕のことを抱きしめる。

『拓。あなたに、こういうことを言わなきゃいけないのは、そりゃ、切ないわ。でも、たった一つ、覚えておいて。あなた達は一私達は、地球の生物から見て、よそものなのよ。たとえどんなに地球の生物が異常に見えたとしても、私達にはそれに文句を言う資格なんか、全然ないの。地球の

生物に干渉しないで。それは、最低限の、ルール。…あなたを…夢ちゃんやあなたを、そして明日香を生んだのは、私の我儘なんでしょうね。あなた達は、そもそも、生まれてくるべきじゃなかったのよ。こんな星で生まれてきても、所詮、あなた達は、行き詰まるだけ。あなた達は、先のない種。ひとは—あきらかに、未来がない種を、残してはいけないのかも知れない』(新井 素子『緑幻想』)

例(138)では、主節が「こんなに自由になれるのは、部屋の中」であり、ニュートラルに、あえて言うならややマイナス的に感じられるが、「しょせん」が加勢することによって「マイナス性付与」され、諦めの雰囲気漂ってくる。

(139)の「あなた達は、行き詰まる」も同様な場合である。「自由になれる」と「行き詰まる」という述語自身がニュートラルなりマイナスなり、「しょせん」が関与することによって文意味がマイナス的になる。総じて言うと、「しょせん」が「～だけだ」ではなく「～しか～ない」と比較的よく共起する原因といえ、「～だけだ」の限定的な語気が比較的弱く、かつこのとりたて詞の表現の前に来る成分が特にプラスかマイナス方向へ偏ることなく普遍的に通用されているため、「しょせん」との相性が低いのもかもしれない。

次は、共起成分の節に入る。

3.4.5 共起成分

3.4.5.1 基本的成分

この節において、「しょせん」と共起する述語の種類によって分析を行う。述語の制約を目標に、まず、前節の調査ですこぶる多く観察された名詞述語をはじめに見ていく。ここでも「どうせ」の章節で取り上げた論述の仕方をもって、述語の傾向を論ずることにする。

名詞:「大学なんてしょせん、時間を浪費する場所だ」「しょせん「子供」だ」「中途採用組はしょせん「補強」という企業は多い」「しょせんお他人さまのことで

ある」「しょせんこの世は河のようなもの」「合併特例債というのはしょせんこれも借金であって返していかないといかぬものである」「自分の能力は、しょせんこんなもの」「しょせんこんな街だ」「実用書なんてしょせんそんなものだ」「しょせんアントニウスは軍団長クラスの人材だった」「しょせんコンサバティブな人間」「あの車は見た目は乗用車の形をしているが、内部はしょせんトラックだ」「私たちはしょせんドライにはなりきれない、心情の濡れた湿っぽい情緒民族だ」「女子はしょせん下司な生きものよ」「下書きはしょせん下書き」「完全復元」などしょせん不可能なこと」「しょせん余興よ」「しょせん先生は田舎医者ら」「いかに帝国の精鋭とはいえ、イエニチェリはしょせん命ひとつの兵隊だ」「いつもの安本さんも親切だけど、しょせん女だなあ」「技はしょせん技じゃよ」「しょせん某国立大農学部中退の私です」「しょせん根も葉もない噂です」「生まれついてから共産主義のなかに育ってきた彼らが急に資本主義をとり入れるといってもしょせん無理な話だ」「いくら孫と同じ名を付けて可愛がっていたと云っても、猿はしょせん猿である」「ウチの多角化戦略なんて、しょせん砂漠の蜃気楼だった」「お前さんは、しょせん自分の好きな道にもどってゆく男さ」「しょせん違うもので、比べるのは変ですよ」「しょせん食糧というのは絶対に欠かせない、生活の基本になる、生活というよりも人間が生きていくための基本になる物資であります」「いくら気取ってもしょせん飼い殺しの身で、末は子会社の社長どまり」「人生はしょせん70年、80年」「所詮、「雅び」とは鄙の中の都会ぶりの強調であった」「所詮、お互いに反対の電荷を持った粒子である」「所詮、この世ではともに天を戴かざる敵であった」「所詮、はかない抵抗だった」「死はいずれ訪れるものだし、そのときは、所詮、みな独りなのだ」「所詮、やり方次第である」「所詮、パリ標準に準拠する高い目標を持つ、キリスト者のグループであるという性格に根ざすものである」「所詮、中国人なんてそんなもんですよ」「身請け話は所詮、二人の夢どすわな」「医師も所詮、人間」「でもそれは所詮、他人ごとだったから出来た努力だった」「吉本は、所詮、古兵衛あつての吉本」「僕達は、所詮、異邦人。所詮、月日が運んできたこの星への旅人」「所詮、村上はこれまでじゃ」「私は所詮、泥水にまみれて、呻吟しながら生きる女だ」「所詮、私達は、そういうものなのよ」「若者の夢とは、所詮、自らの体をもって購わなければならないものであった」「所詮「アマチュア」の集合体」「所詮あたるも八卦あたらぬも八卦で」「女というものと云ったって、所詮そのある

がままのもので」「所詮それは個人の営為とも言える」「夫婦とは所詮そんなものだ」

「しょせんは、コップの中の嵐だったとも言えます」「しょせんは、他人事」「我々から見て偉いお医者さんでも、しょせんは人間さ」「企業戦士の社員諸氏は運命共同体を誓いあった同士ではありますが、しょせんは他人」「しょせんは俱に天をいただきざる奴」「しょせんは刺し違えもいとわないう覚悟の戦術」「勤労所得や法人所得のように働いて得た所得も土地譲渡所得のように転売で得た所得も、しょせんは同じカネ」「しょせんは海の中の住人」「都を守ると誓ったわたしも、しょせんは崇り神であったか」「カメラもしょせんは窓であった」「しょせんは鬱憤ばらしの戯文」「わしとても、所詮はお前達と変わらぬ山の民である」「所詮はかれも軍人であった」「所詮はオーストラリアである」「所詮はテストだもの」「資本主義自由経済体制も、社会主義計画経済体制も、所詮は一八世紀の産業革命以来の近代工業社会が、より大きく見れば一五世紀のルネッサンス期を先駆けとしてはじまった物財を重視する思想が、高度に発展した結果、生み出された体制である」「所詮は一円でも多い売上を上げるために靴の底を減らしている社員の総体だ」「九郎どのは所詮は人の主にはなれぬお方だ」「人も所詮は動物であり」「曹操も劉備も孫権も、所詮は同じ種類の人間だ」「われらが、こうして一座するのも、所詮は名もない国侍、百姓、馬借らの一揆を防ぎ、お若い公方ぎみの幕府を守りぬくためでござるぞ」「確かにあなたは誇り高く意志の強いプロの暗殺者ですが、所詮は女性」「所詮は当て推量で」「所詮は意志の弱い男だ」「儂は、所詮は技術屋よ」「所詮は救いようのない愚か者か」

名詞述語の場合、わりに多く出現するものが例えば性別（男・女・女性）、ある集団の総称（人間・動物・軍人）、代名詞（こんなもの、そういうもの）、そして言葉自身がマイナ斯的に好ましくないと感じられるもの（他人・他人事・愚か者・異邦人・田舎医者・噂・崇り神）などといったものである。この際、名詞ごとに持つ意味的特性が発揮する。いわゆる差別語が出たら手軽に「しょせん」との呼応が判断できるものの、そうでない場合—つまり、それらを除き、ごく一般的な名詞の場合も多々ある。ただし、この場合は単に名詞述語の持つ意味だけでは明白に「しょせん」と呼応できないため、連体修飾または前文脈によって名詞の立場を顕在化させることになるのである。

例として挙げるなら、まず、意味的特性が顕著なものは「しよせん砂漠の蜃気楼だった」のような鮮明な印象を持つ名詞である。「蜃気楼」の特性を知っている人は、たちまち文の意味がわかってしまう。次に、「しよせん某国立大農学部中退の私です」のように、もしその文がわずかに「しよせん私です」という短い表現であったら、「私」というものに何の条件を持っているのか、文脈を通して見ないと全然心当たりが出来ないに決まっている。しかし連体修飾「某国立大農学部中退」という成分が加われば、「しよせん」文の内部で意味がまとまる。

もし意味的特性も連体修飾も含有しない場合、頼ることのできるものが文脈を除いてほかならない。例えば「人も所詮は動物であり」との文を読むと、人間と動物の共通しているもの、すなわち＜本能＞のような条件がすばやく頭に浮かぶであろうが、しかし「所詮、やり方次第である」という例に出る「やり方」のような名詞を読むと、それはいったいよいやり方か悪いやり方か、見当がつかなくなる。そしたら前の叙述が重要になってくる。すなわち文脈が不可欠のものとなるのであろう。

動詞：「男の強さはしよせん、相手を打ち倒す腕力や財力や権力のように、はつきりしたかたちが見えている」「しよせんスリルはあるけれどもやっぱり収益が大きい」「しよせん一人でやることって、限界があるじゃないですか」「しよせん実際の修羅場をくぐった経験が違う」「いきがってみたって、しよせん長いものには巻かれる」「所詮、帰するところ国会で多数を占める政府与党の意思で決定されます」「民活」も所詮「政府へのお付き合い」に止まり」「所詮ここでいう各級の“地域”には、規模も意義も著しく異なるものの、根底には「くに」という共通の観念が存在していた」「世の中というのは、所詮そういった力関係で動いている」「しよせんその修行生活の平和が、日本経済の帝国主義的アジア収奪の上に成りたってることには間違いないんだからな」

「しよせんは先方と会ってみなければわからない」「韓鍛冶による新しい製鉄法によって、古い技術はしよせんは追放される運命にあった」「所詮は権門体制—荘園制社会の支配秩序の諸身分から原則としてはずれている点で共通している」

動詞述語の場合、結果・状態を表す語（存在する・成り立つ・共通する・動く・止まる）が大部分を占めている。それらの語自体は中性であり、実際ここに出た例はすべてマイナス的な意味を帯びていない。つまりこの場合では、「しょせん」が一方的に文意味に対してマイナス性を施していることを意味している、と言えるであろう。当然のことで、文脈、特に前文脈と力を合わせて文全体の意味がはじめて完全なものになるのである。

形容詞：「しょせん“休眠”しているものに価値はない」「しょせん、親が自分の子どもの才能について客観的な判断をするのはむずかしい」「しょせん基礎教育と思えば、実際働き出してから個人差のほうが、ずっと大きいのにね」「男と同じものをきても所詮つまらない」「しょせん、対症療法では駄目ですよ」「若い僧侶のボランティア活動やある特定の寺院の貢献以上のものを日本の仏教界から望むことはしょせん不可能であった」「しょせんモノづくりの現場は地味」「限られた紙幅のなかで海にかかわる人間の営みの大きさを描くのは所詮無理だったようにも思われる」「まともな日本語感覚の持主なら件の経済人のように、所詮無理だということになる」

形容詞の場合、形容詞と形容動詞の比率はおよそ五分五分である。そのうち、自らマイナス的な傾向を持つものが「(客観的な判断をするのは) むずかしい」「つまらない」「駄目です」「不可能であった」「地味」「無理だ」などのマイナス的判断の語であり、特に形容動詞のほうがマイナス傾向がはっきりしていると思われる。

数量から言えば、名詞のほうが圧倒的に多く、次に動詞、それから形容詞という順番であるので、「しょせん」は名詞との相性が最も高いということがわかる。

続きに、「しょせん」の複文分野へ入る。

3.4.5.2 「～なら」

ここにおいて、「しょせん+なら」構文について触れておく。下の例は「どうせ+なら」構文のようなものであるが、ほんの一例しかないので「しょせん」

にもこうした用法があると断定するまではいかないであろう。が、出現する場面から見る限り、「どうせ+なら」構文の特徴が備わっているのである。

(140) もし果してそうであるとすると、三上と福井とがあたかもそこで落合ったことになる。ふたりが期せずして落合って、それからどうしたのか。昼間の行きがかりから考えると、かれらはおそらく鐘の有無について言い争ったであろう。そうして論より証拠ということになって、二人が同時に淵の底へ沈んだのかも知れない—と、ここまでの筋道はまずどうにかたどって行かれるのであるが、それから先の判断がすこぶるむずかしい。その解釈は二様にわかれて、ある者は果して鐘があったためだといい、ある者は鐘がなかったためだというので、どちらにも相当の理屈がある。

前者は、果して鐘のあることが判ったために、三上は福井の手柄を妬んで、かれを水中で殺そうと企てたのであろうという。後者は、鐘のないことがいよいよ確かめられたために、福井は面目をうしなった。自分は粗忽の申訳に切腹しなければならない。しょせん死ぬならば、口論の相手の三上を殺して死のうと計ったのであろうという。(後略)

上の例に出る最後の一文が「しょせん+なら」構文であるが、後部の主節「口論の相手の三上を殺して死のう」がプラス意味で現れている。つまり話し手が福井の立場に立って述べたこの文には、<好ましい決定・選択>というプラス意味が含んでいる。しかしながら、「しょせん」文にはプラス表現が伴ってこないため、これは誤用例かもしれない。どう見ても「どうせ」をもって入れ替えたほうが自然な発話になるのではないかと思われる。かつ例文が一つしかないので、ここでは例外として扱うことにする。

3.4.5.3 「～だから」

従来の研究では、「しょせん」についてもっぱら単文の場合に注目を浴びている。ところが、実際「しょせん」は複文分野に使用される場合「～だから」と共起する事実も存在しているが、どうやら重要視されなかったようである。これより、「しょせん」の複文における代表的な組合「しょせん+だから」構文の

使用状況について論を展開する。

(141) 海にいきや、家もないのにボート買ってそこらへん走り回ってるやつもいるしね。それが共同でボート買ったりリゾート地買ったりしている。食えないやつが金持ちのまねをするからいけないんだよ。リゾートマンション買ったからローンで生活が苦しくて、なんてわけのわからないことしているんだから。

しよせん日本人はヤドカリ生活だからね。次から次へと新しいもの買いかえるけど、同じようなものしか買っていない。ヤドカリはとんでもない立派ででかいものは買えないんだね。自分の器量にあわせたものしか背負えないんだから。(ビートたけし『だから私は嫌われる』)

(142) その書類にはこの村の収穫がコプトスの州知事に納められたことが記されていた。書類の末尾には耕作地の監督官が日付を入れて署名をしていた。

「この村はカルナク神殿の所領のはずだ」パザイルは言った。

「どうやら、何もご存じないようで…」村長が答えた。

「だが、大神官が持っているリストにはこの村の名前が入っていたぞ」

「それなら、大神官もあなた同様、何もご存じなかったのでしょうか。いや、無理もない。所詮、園丁あがりのお大神官ですからね。必要な情報が届かなかったのでしょうか。大神官の持っているリストは正しくありません。嘘だと思ったら、テーベの登記所に行って土地台帳を調べてみてください。私の村はカルナク神殿にではなく、コプトスの管轄に属していることがわかるはずです。境界標だってそうになっています。(後略)」(高野 優/クリスチャン・ジャック『ピラミッドの暗殺者』)

(143) 英二、お前は何を言っているんだ。業績が少しぐらい良くなったといっても、しよせん朝鮮特需でトラックが売れたからじゃないか。いわば他力本願で再建がなったに過ぎん。思い上がるのもいい加減にしろ。わしが作りたいのは、国内だけでなく世界で通用する小型乗用車なんだ。そのことはお前は百も承知しているはずだ。自動車会社というのは、乗用車を作

っている会社を言うんだ、もっと言えば、まともな乗用車を作れない自動車会社では社会的な存在意義が薄い。(佐藤 正明『ザ・ハウス・オブ・トヨタ』)

例(141)から(143)は「しょせん+だから」のものであるが、従属節まで言い切りの形で主節が省略または倒置された場合である。述部内容をまとめて見ると「日本人はヤドカリ生活」「園丁あがりの大神官」「朝鮮特需でトラックが売れた」などの文であり、述語のところには名詞と結果・状態を表す無意志動詞のものが出ている。(141)では、話し手はいろいろ批評を出して人間の矛盾した実態について自分の意見を示している。そこで<日本人の生活がヤドカリ生活だから、でかいものは買えない>ということを中心の中で決めつけておき、それに対して「しょせん」を使って前提にし、風刺した言い方で「軽視」の気持ち溢れている。(142)の場合、主節が見つからないようであるが、前の文を読めば、倒置されていることがわかるであろう。そもそも<園丁あがりの大神官だから、知らないのも無理もない>という意味で出来ているだろうが、「園丁あがり」という言い方にまず軽蔑をあらわにしていることが感じられ、「しょせん」とあいまってマイナス性が付与され「軽視」の意味が歴然となったのである。(143)の場合、主節にあるべきものを前の「ても」節に求められる。すなわち<会社がまともな車を作り上げたわけではなく朝鮮特需が本当の原因だから、トラックが業績よく売れても思い上がるな>と、話し手がはっきりと喝破した場面である。同様に「しょせん」は従属節のマイナス的事態を踏まえて「軽視」の気持ちとともに前提を掲示したのである。

(144) 成輔は短く頷き、

「なんのかんのいっても、原始人に近い未開人ではないか、というわけですね」

「いえ、そこまでは言いませんが、しょせんは我々の遠い祖先なのですから、我々の一般感覚で理解できないはずもないと思ひまして。まさか彼らも、想像も及ばない視力や聴力を持っていたわけではないでしょう」

「いや、そこなのです」成輔は思案がちに目を細め、しゃくれた顎をさすった。「我々の想像の及ばないところが、彼らの内側にあったのではない

かと私は考えているのです。無論、私だけではなく、少なくない数の考古学者が…」

海老名はそこで口をつぐんだ。(柄刀 一 『4000年のアリバイ回廊』)

(145) 僕の学生時代にも、非行に走る者がいなかったわけではないし、現に、停学、退学処分を食った者もいます。

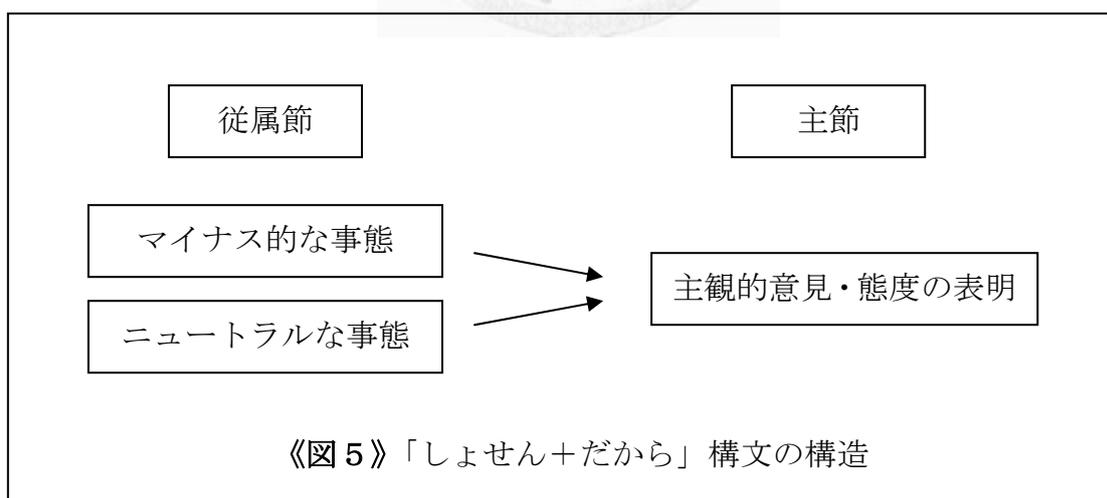
でも、どうみても、受験体制に反発して抵抗した、というようなカッコ良さはなかった。要するに親の目の届かない所で遊び呆けてしまった、という感じでした。

大人に反抗したいのなら、まず自分を大切にしなければなりません。タバコやアルコールが禁じられているからといって、それを破っても、別に大人に反抗したことにはならないのです。一学生は、しょせん自分で生活費を稼いでいるわけではないのだから、大人ではありません。(赤川 次郎 『三毛猫ホームズのプリマドンナ』)

(146) もっとも、こういうふうにはジャーナリズムが一時の話題にしたのも、ほんの束の間であって、私も秀十郎も、二、三カ月もするうちに、また元ののんきな境涯に逆戻りした。考えようによれば、これはずいぶん不甲斐ない話だが、所詮は二人とも有名人となり得る素質など持ち合さないのだから、むしろ当然と言えるだろう。私たちは相変らず芝居の舞台裏で働き、秀十郎は重宝がられて、幸四郎(八世)や勘三郎(十七世)の後見をつとめたり、相変らずの黒衣姿で大簧の子から花びらをふらせたり、書割の袖で鳥の笛を吹いたりしていた。黒衣後見に関しては、彼はやはり楽屋では名人と目されていて、特に吉右衛門系の丸本歌舞伎を上演する場合には、彼の黒ん坊は定評があった。(千谷 道雄 『秀十郎夜話』)

(144) から (146) は「しょせん+のだから」構文の例文であるものの、「しょせん+だから」構文とは意味合いが共有していると思われる。例の順番に沿って、従属節では「我々の遠い祖先」「自分で生活費を稼いでいるわけではない」「二人とも有名人となり得る素質など持ち合さない」などの述部内容が出ている。ここで注目されたいのは、(144) のように従属節がマイナス的事態でない

場合も存在することである。主節の言葉「我々の一般感覚で理解できないはずもない」から、話し手がその遠古人種についての推測を固くかつ軽く見ている姿勢が伺われる。いわば事態に対する「軽視」なのである。この場合「しょせん」を取り除いても文は成立すると思われるが、「軽視」の気持ちが消失すると同時に「既定の前提」という意味合いもなくなってしまう。なお、(145)と(146)の場合では、<学生は自活していないのだから、たとえ年齢が二十歳以上に達しても大人だと認めない><自分たちは有名人となれる素質など持ち合わさないのでから無名に逆戻りするの 당연なことだ>と、各々にマイナス的な意味を表している。従属節に属する事態をマイナス的に捉えることもできるが、度合いとしてはそれほど高くないと思われる。むしろニュートラルな事態と捉えても納得されよう。それに対し、主節では従属節の提起した事態について話し手がマイナスかニュートラルな属性の主張を持ち出す。しかし、主節を含んで文を全体的に見ればマイナス的に認定されるのである。ということは、「しょせん+だから」構文形式において、「しょせん」の影響の及ぶ範囲が従属節にとどまらず、広く主節まで覆いかぶさるといえよう。しかも「どうせ+なら」と「どうせ+だから」構文のような、複文分野へ入ると意味が一転するなどの傾向が存在しないのである。《図5》によって構造関係がいつそうはつきりわかるであろう。



以上を通して「しょせん」の複文における意味役割を見てきた。代表的なのは「しょせん+だから」構文だけであることから考えれば、「しょせん」は複文より単文に適しているようである。また「どうせ」の複文分野との差が甚だし

いと帰結できると思われるが、四章において全面的な相違を比較し、結論につなげることにする。



第四章 副詞「どうせ」「しょせん」の相違比較

4.1 構文的特徴

二章と三章において、副詞「どうせ」と「しょせん」について構文的特徴かつ意味的特徴を多面的に考察してきた。本章ではそれらの特徴を整理して示すと同時に、考察した結果を踏まえて両者の相違比較を行うことにする。

まず、本稿において検討した全項目を羅列し、広域的傾向を見よう。

《表8》副詞「どうせ」「しょせん」による構文的特徴の有無1

副詞 特徴	「どうせ」		「しょせん」	
	受身	あり	受身	あり
可能	あり	可能	あり	
使役	あり	使役	なし	
自発	なし	自発	なし	
テンス・ アスペクト	非過去形	あり	非過去形	あり
	過去形	なし	過去形	あり
	「～ている」	あり	「～ている」	あり
	「～ていた」	なし	「～ていた」	あり

《表8》はヴォイス、テンス・アスペクトの考察結果によって整理したものである。ヴォイスについて、各自に例の最も多いのは、「どうせ」が受身表現で、「しょせん」が可能表現である。が、「しょせん+可能表現」のほうはさすがに例が多いとはいえない。一方、例が見られないのはともに自発表現で、「しょせん」に使役表現の例も欠落している。受身と可能表現の通用が共通点である。

テンス・アスペクトにおいては、非過去形はともに接続できるが、過去形の場合に違いが生じる。「どうせ+過去形+ムード」の形式では数例あるが、「どうせ+過去形のみ」の形式がほとんど見られない。それに対し、「しょせん」は

自由に二つのテンスと共起することができる。「～ている」「～ていた」の場合では、前述の現象と類似した結果が得られる。「どうせ」は依然として過去形との相性が悪く「～ていた」とは共起できないが、「しょせん+ている」もしくは「しょせん+ていた」の形式が支障なく共起できる。したがって、テンス・アスペクトの考察結果を通して「どうせ」は過去における事態に対する陳述に困難があるという見当がつく。

続いては、ムード、とりたて詞と共起成分の部分を表で示す。

《表9》副詞「どうせ」「しょせん」による構文的特徴の有無2

構文的特徴	項目		「どうせ」	「しょせん」
ムード	① 「～だろう」		あり	あり
	② 「～のだ」		あり	あり
	③ 「～にちがいない」		あり	なし
	④ 「～にきまっている」		あり	あり
	⑤ 「～てしまう」		あり	なし
	⑥ 「～にすぎない」		なし	あり
とりたて詞	① 「～しか～ない」		なし ¹⁵	あり
	② 「～だけだ」		なし ¹⁶	あり
共起成分	① 基本的成分	名詞	あり	あり
		動詞	あり	あり
		形容詞	あり	あり
	② 「～なら」		あり	なし ¹⁷
	③ 「～だから」		あり	あり

ムードの結果について説明する。「どうせ」の範囲内において唯一の共起しない表現が「～にすぎない」である。一方「しょせん」には共起しない表現が二

¹⁵調査によると他のムードと同時に出現する場合は存在する。しかし単独で共起するものが一例しかないので、本稿では“なし”として、特に論じることはない。

¹⁶ 同上。

¹⁷ 一例発見したが、例外だと判定したので、“なし”と認める。

つあり、それぞれ「～にちがいない」と「～てしまう」である。それ以外の、両者ともに共起できる表現は「～だろう」「～のだ」「～にきまっている」などがあり、とりたて詞の「～しか～ない」「～だけだ」は「しょせん」とのみ共起する。

共起成分について、基本的成分つまり主節述語をまとめてみた結果、両方とも名詞、動詞、形容詞の例は見られるが、「どうせ」と「しょせん」が呈する様相が異なる。量的に言えば「どうせ」の場合、名詞と動詞が相当で、形容詞・形容動詞が少ない。一方「しょせん」の場合、名詞が断然トップの地位で、次に動詞、最後に形容詞・形容動詞の順番で現れる。複文分野の場合、「どうせ」は「～なら」「～だから」とともに現れ、単文の場合と一味違う意味をもって文を成しているものの、「しょせん」のほうは明らかに「どうせ」のようではなく、複文でも単純に文全体の意味をマイナス的に維持している。

次に、ムードととりたて詞の節における考察から得た結果を比較する。

《表10》ムード、とりたて詞の節による考察結果

ムード、 とりたて詞		副詞			「どうせ」			「しょせん」		
		軽視	余計	放棄	軽視	なし	なし	軽視	なし	なし
主節述部属性・ マイナス性付与	「～だろう」	△、－			－			－		
		軽視	余計	放棄	軽視	なし	なし	軽視	なし	なし
	「～のだ」	△、－			△、－			△、－		
		軽視	余計	放棄	軽視	余計	放棄	軽視	余計	放棄
	「～にきまっている」	△、－			△、－			△、－		
		軽視	余計	なし	軽視	なし	なし	軽視	なし	なし
	「～にちがいない」	△、－			なし			なし		
		軽視	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	「～てしまう」	△、－			なし			なし		
		なし	余計	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	「～にすぎない」	なし			△、－			△、－		
		なし	余計	なし	なし	なし	なし	軽視	なし	なし

	「～しか～ない」	なし	△、－		
			軽視	なし	なし
	「～だけだ」	なし	△、－		
			なし	なし	放棄

※「△」：ニュートラル属性。「－」：マイナス属性。

ムードととりたて詞の節で得た結果を、「主節述部属性」と「マイナス性付与」の二通りに説明する。まず「主節述部属性」について、上記八項目にて現れた属性は「しょせん+だろう」の結果のみ除いて、全部ニュートラルとマイナスである。すなわち、副詞「どうせ」「しょせん」はプラス属性の主節内容と共起しないことがわかる。また、唯一異なるものはニュートラルな主節内容を持たない「しょせん+だろう」構文の場合であり、マイナス的なものは問題なく共起することができる。この点、二語の持つ意味的特徴と呼応している。

「マイナス性付与」について、二語ともに圧倒的に多く現れるのは「軽視」の意味で、「余計」の意味は「どうせ」のほうが顕著である。対して「放棄」の意味は比較的まれで、「～のだ」文のみで二語と共起する。

《表 1 1》共起成分の節による考察結果

共起成分		副詞	「どうせ」	「しょせん」
基本的成分—述語	名詞		軽蔑の意味を表す語 好ましくない語 ほか	性別を指示する語 集団総称の語 代名詞 好ましくない語 ほか
	動詞		好ましくない語 可能の意味を表す語 ほか	状態を表す語 ほか

	形容詞	余計の意味を表す語 ほか	マイナス的判断の語
属性関係・成立条件・表出意味	「～なら」	従属節：△、－ 主節：＋	なし
		① 「～たい」 ② 「～う・よう」 ③ 「～（ほうが）いい」 □ 好みによる決定・選択 □ 多肢比較	
	「～だから」	従属節：△、－ 主節：＋、－	従属節：△、－ 主節：△、－
		① 勧誘：従－、主＋ ② 許容：従△－、主＋ ③ 命令：従－、主＋ ④ 放棄：従－、主－ ⑤ 決定・選択：従△－、主＋	マイナス性付与・ 軽視

※「＋」：プラス属性。「△」：ニュートラル属性。「－」：マイナス属性。

「□」：成立条件。

共起成分について、基本的成分一述語の場合と「～なら」「～だから」の場合に分けて考察した。名詞の場合、「好ましくない語」が共通するものであるが、ほかに「性別」「集団の総称」「代名詞」などが「しよせん」によって表すものの「どうせ」には出現しないことに興味深い。その理由は、前掲三種類の名詞のうち、「性別」「集団の総称」各自には一定のイメージが含意され受け手の脳中で自然に思い浮かべるという特色がある。一方、「代名詞」はその文の前の段落内容があつてはじめて使用されるものである。よって、この三種類の名詞は次節に説明する「しよせん」の帯びる意味的特徴「前文脈指向性」と似通った特性を持つため、「しよせん」との相性がよいと思われる。動詞の場合、注目されるのは「しよせん」の「状態を表す語」であろう。ほとんど無意志動詞が含み、行動より結果を重んじる「しよせん」に合う。形容詞の場合はともに例文

が非常にまれであるため、詳しい分析はできなかったが、少なくともマイナス的な状況を示すものであることがいえよう。

複文分野の「～なら」「～だから」について、「しよせん+なら」構文の場合が存在しないとされる。「どうせ+なら」構文は「どうせ」の諸表現の中で最も特殊性を持つものであり、従属節がニュートラルかマイナス的な内容であるにもかかわらず、二つの成立条件「好みによる決定・選択」「多肢比較」のもとに、主節にプラス表現が来る。他方、「～だから」と組む場合、二語ともに従属節がニュートラルかマイナス的な内容であるが、主節のほうに大いに相違が現れる。「どうせ+だから」構文の場合、主節における五つの表現のうち、「放棄表現」以外に他の四種類がプラス意味を表すものである。対して「しよせん+だから」構文の場合は、ニュートラルかマイナス的な主節叙述が伺われ、マイナスの意味の場合「軽視」の意味を匂わせる。

次節に、意味的特徴を整理して比較を行う。

4.2 意味的特徴

この節をもって、副詞「どうせ」「しよせん」について筆者の認定する意味的特徴を《表12》で示し、先行研究における不足の部分を引用して自説を説明していく。

《表12》副詞「どうせ」「しよせん」意味的特徴の有無

副詞 意味的特徴	「どうせ」	「しよせん」
既存の想定	あり	あり
マイナス性付与・軽視	あり	あり
マイナス性付与・余計	あり	あり
マイナス性付与・放棄	あり	あり
前提	なし	あり
結論	あり	あり

原因・理由・根拠	あり	あり
前文脈指向性	なし	あり

《表12》の比較を踏まえて、ここにおいて「どうせ」の先行研究による「既定性」という特性について筆者の意見を述べる。杉本の定義によると、いわゆる「既定性」とは①「ある事態の先行きを考える場合、主体の努力・期待・予測の如何に拘らずその結果が予め決定されること」②「ある事態の現状を考える場合、主体の努力・期待・思案の如何に拘らずその本質が予め決定されていること」(杉本2000)である。ところが、<あらかじめ決定されていて変化しない>という意味を伝える説明が読者の誤解を生じさせると思われる。なぜかという、筆者の考えでは、この特性を説明するに当たり、「現実状況は実際そうであるかどうかをともかくとして、話し手にとっては、事態に対していかなる努力を尽くしても、想定した事実は反転されることなく確実に不動のままでいる」という陳述のほうが完全な解釈に近いと思われる。加えて、「既定」という言葉はあくまでも<すでに定まった事態>としか連想されず、その事態がそもそも未実現の「想定」にとどまっていることが見落とされてしまうため、筆者の上掲の考えを定義にして、武内(2005)において指摘された「既存の想定」という言葉を用いて命名したほうが適切なのではないかと思われる。前章の考察によると「どうせ」「しょせん」はともに「既存の想定」という意味的特徴を持つことが証明されている。

「マイナス性付与」の特徴はすでに二章において説明したが、副詞二語ともにそれを有して、それぞれ違った場合に「軽視・余計・放棄」という三種類の意味が表出される。その中で、「軽視・余計」の意味は他人にも自身にも使用されるが、「放棄」の意味はだいたい自身の場合に使われる。

「前提」「結論」などについて、二つの副詞に相違が見られる。「どうせ」の場合、「前提」ではなくもっぱら「結論」として現れる一方、「しょせん」の場合は両方の役割とも果たせるのである。特に「しょせん+のだ」構文の場合、「前提的結論」という用法が顕著であると思われる。話し手は話題の事態についていろいろ考えたり述べたりするにもかかわらず、心の中ではとっくにある前提があらかじめ控えており、そして最後にその前提をもって最終的結論として話題を収める。これが、「しょせん」のみ持つ特徴なのである。また、「原因・理

由・根拠」などと言われる理由表現については、「～だから」との共起が許されるので、副詞二語はともに理由として表されうる。

「しょせん」文のはっきりした意味的特徴としては、あらゆる説明や解釈をよそに、どうしても「しょせん」によって掲げた道理が先行する。その道理は必ずしも世間共通なものでなく、話し手の個人的経験・意見によるものもあり得るが、概して言えば、「しょせん」は厳粛な述部内容（道理・自然の成り行きなど）と共起する傾向が伺える。世間共通な道理を表す場合以外ならば、「しょせん」の所属する文の意味を理解するには、その先立つ段落の力を借りなくてはならなくなる。したがってそれを「しょせん」文の持つ特性の一つとして、本稿では「前文脈指向性」と名づけることにした。しかしそれに対して「どうせ」にはこうした特性を帯びず、だいたい一文の範囲内で経緯が捉えられる。「どうせ」文は以上の意味的特徴からわかるように、個人的想定が重要なポイントとなっている。「しょせん」のような広範囲にわたる世間の道理や厳しい角度からの戒めがないため、遠い道を経由して前文脈を段取りにしなくても、ほとんど一文の中で意味を判然とつかむことができる。それより、むしろ後方に出る情報が比較的重点が置かれているのである。

「～しか～ない」と「～だけだ」については、「限定のとりたて詞」という分類に入るが、実際使用上に際してはムード表現に近似しているように思われる。

「しょせん」と共起できる理由は何かという、それは恐らく＜限定＞という意味が「しょせん」の持つ「既存の想定」と重なり、その中で＜事態の展開がある程度なんらかの枠によって拘束される＞という含意の側面で共通するためであると思われる。そしたら、なぜ同じ特性を帯びる「どうせ」とは共起しないのか、という疑問が浮かび上がってくるであろう。これについて、「しょせん」の持つ前提を表す特性に関わると思われるものの、更なる検証が待たれるであろう。

以上をもって構文的・意味的側面から副詞「どうせ」「しょせん」の相違比較を完了させた。最後として、五章では結論および今後の課題を述べる。

第五章 結論および今後の課題

5.1 まとめ

考察と相違比較を経て、この節において副詞「どうせ」「しょせん」二語の持つ構文的・意味的特徴の共通点・相違点について最後の結論として、以下の《表13》を掲示し、中心的な考察結果を簡潔に述べる。

《表13》副詞「どうせ」「しょせん」についての考察結果総表

特徴 \ 副詞	「どうせ」	「しょせん」
ヴォイス・受身	○	○
ヴォイス・可能	○	○
ヴォイス・使役	○	×
ヴォイス・自発	×	×
テンス・非過去形	○	○
テンス・過去形	×	○
アスペクト・「～ている」	○	○
アスペクト・「～ていた」	×	○
ムード・「～だろう」	○	○
ムード・「～のだ」	○	○
ムード・「～にちがいない」	○	×
ムード・「～にきまっている」	○	○
ムード・「～てしまう」	○	×
ムード・「～にすぎない」	×	○
とりたて詞・「～しか～ない」	×	○
とりたて詞・「～だけだ」	×	○
基本的成分・名詞	○	○
基本的成分・動詞	○	○
基本的成分・形容詞	○	○

共起成分・「～なら」	○	×
共起成分・「～だから」	○	○
既存の想定	○	○
マイナス性付与・軽視	○	○
マイナス性付与・余計	○	○
マイナス性付与・放棄	○	○
前提	×	○
結論	○	○
原因・理由・根拠	○	○
前文脈指向性	×	○

※「○」：その特徴を持つ。「×」：その特徴を持たない。

本稿の考察を通して得た結果の中、先行研究において未解明の部分と筆者の発見・主張を整理する。

第一に、森本（1994）の着目した「どうせ」の過去形との共起状況については、過去形共起不能ということをはっきりと明らかにし、さらに比較を通して「しよせん」がテンスにおいて使用制限がないことがわかった。

第二に、森田（1992）、森本（1994）、杉本（2000）など従来の研究で盛んに言及されてきた「既定性」についてその命名と定義の適切性に疑いを持ち、武内（2005）が提起した「既存の想定」という名称こそ思考のプロセスにふさわしいこと、そして「しよせん」にもそういう意味的特徴を持つことを指摘した。

第三に、森田（1992）からはじまる「最善を尽くす」という「どうせ」の有する意味については、事態を決定する際、話し手の選択を左右するのは「最善」という思考ではなく「最も好ましいこと」であることを明らかにし、「どうせ+なら」構文の場合のみ起こる背景的・心理的側面の現象「多肢比較」が潜在していることによって、話し手が「好みによる決定・選択」をはじめて下すのであるということを説明し、「どうせ+なら」構文を成立させる新たな二つの要素を解明した。

第四に、杉本（2000）や現代副詞用法辞典に見られる「マイナスイメージ」という傾向を踏まえて「どうせ」「しよせん」が実際マイナス性を自身の関与す

る文に与えるという特性を持つと見て、筆者は「マイナス性付与」という名称を提起し、場合によって三つの意味「軽視・余計・放棄」が発生するとの実態を指摘した。

第五に、小矢野氏と武内氏が行き違っている「前提」と「結論」の意味役割については、副詞二語はともに「結論」として使われるが、「どうせ」には「前提」を担う機能がないことがわかり、さらに「しょせん」には「前提的結論」という特殊な意味合いを持つことを明らかにした。

第六に、筆者が命名した従来の研究では発見されなかった「前文脈指向性」であるが、「しょせん」のみ有する独特な意味的特徴として、「しょせん」の参加した文の意味を理解する際、ほとんどの場合文脈を沿って前の文もしくは段落までたどることによって、「しょせん」を指すことの意味がはじめてわかってくる。それと違って「どうせ」の場合はほとんど一文の中で「どうせ」に潜む意味が了解されるのである。

最後に、副詞「どうせ」と「しょせん」について筆者なりの定義を述べてみる。

「どうせ」：眼前の事態が必ず自分の想定したマイナス的な結果になることを話し手が予想し、それに対して「軽視・余計・放棄」など主観的感情を表す。「～なら」と共起する場合に限って、プラス性の帯びる文が出る。

「しょせん」：いかなる良い影響となる事態が起こっても、眼前の事態がある前提によって必ず自分の想定したマイナス的な結果になることを話し手が予想し、それに対して「軽視・余計・放棄」など主観的感情を表す。特に「軽視」の意味が濃厚である。プラス性の帯びる文とは共起しない。

以上をもって、本稿の結論とする。

5.2 今後の課題

本稿をもって副詞「どうせ」「しょせん」の現れる実態を考察してきた。が、「しょせん」以外に、「どうせ」と意味上の近接性を持つ語は、なお存在すると思われる。それが「どっちみち（どのみち）」という副詞である。例えば次のような場合において、両者の表す意味が極めて類似である。

(147) (前略) 祐太は三人の男に囲まれて殴られた。十七人入り乱れてのケンカになった。どっちみちやられるのなら、祐太は一人でも多く相手を殴ったほうが得だ、とやけになり、相手構わず蹴りまくった。(嵐山 光三郎『夕焼け学校』)

文章の叙述通りに、「やけになる」気持ちを持っているにもかかわらず、「どうせ」ではなく「どっちみち」が使用されている。この二語の区別をつけるために、まず「どっちみち」の帯びる特性などをはっきりさせなければならないのである。「どっちみち」の性格がわかる次第、「どうせ」との相違も解明されよう。この問題について今後の課題にする。

参考文献（五十音順）

- 奥津敬一郎・沼田善子・杉本 武（1986）『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 川端善明（1983）「副詞の条件—叙法の副詞組織から—」『副用語の研究』明治書院
- 工藤 浩（1977）「限定副詞の機能」『国語学と国語史』明治書院
- 工藤 浩（1978）「『注釈の副詞』をめぐって」春季国語学会研究発表会
- 工藤 浩（1982）「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『研究報告集』
vol.3、国立国語研究所
- 工藤 浩（1997）「評価成分をめぐって」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房
- 工藤真由美（2004）「現代語のテンス・アスペクト」『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』朝倉書店
- 国立国語研究所（1965）『類義語の研究』秀英出版
- 国立国語研究所（1991）『副詞の意味と用法』大蔵省印刷局
- 小矢野哲夫（2000）「評価的な意味—副詞「どうせ」を例にして—」『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古希記念論文集』ひつじ書房
- 佐治圭三（1992）『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房
- 澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- 杉本和之（2000）「副詞「どうせ」の意味と機能」『愛媛大学教育学部紀要 人文・社会科学』第 33 卷、愛媛大学人文学会
- 鈴木 泰（2004）「テンス・アスペクトを文法史的にみる」『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』朝倉書店
- 武内道子（2005）「関連性への意味論的制約—「しょせん」と「どうせ」をめぐって—」『副詞的表現をめぐって—対照研究—』ひつじ書房
- 橋本進吉（1948）『国語法研究』岩波書店
- 星野佳之（2001）「「どうせ」と「せっかく」の意義—「無駄」の回避—」『清心語文』ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会
- 松下大三郎（1974）『改撰標準日本文法』勉誠社
- 宮島達夫・仁田義雄（1995）『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版
- 森田良行（1992）『基礎日本語辞典』角川書店
- 森田良行（2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 森本順子（1994）『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版

山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館

山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館

李 澤熊（2003）「副詞の類義語分析—どことなく、なんとなく、それとなく」『日本語教育』116号日本語教育学会

渡辺 実（1974）『国語文法論』笠間書院

渡辺 実（1996）『日本語概説』岩波書店

渡辺 実（2002）『国語意味論』塙書房

用例出典

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」モニター公開データ（2009年度版）

